魔法少女リリカルなのは × Silver eyes

舞台裏の黒衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはxSilver eyes

【Nコード】

N6370X

【作者名】

舞台裏の黒衣

【あらすじ】

異端のデバイスは夢を見る。それはとある少女の夢。異端のデバイスは少女と出会う。それがきつと、彼の始まり。

のんびりするのが大好きで、軽く対人恐怖症で、需要があるのかわからないツンデレ？という成分の持ち主。そんな彼が出会うのは一人の少女。彼女と触れ合う事で変わっていく彼の中のナニカ。少女との日々で彼が手に入れるものは平穏か、それとも波乱の日々か。だがそんなことよりのんびりしたい（by 主人公）

夢の中で出会う少女。それは彼に一体どんな影響を及ぼすのか。そして彼は少女と共に何をなしていくのだろうか。

ところで夢の中で寝るってのはどう思う？（by 主人公）

無駄に高性能？だけどデバイスらしからぬ主人公と、少年、少女らを中心に、ほのぼのなストーリーを描けるといいな（切実）

第一話 『始まり』

新暦61年 12月21日 海鳴臨界公園

冬真っ只中な寒気が厳しいこの季節。辺りは夕日に包まれ、オレンジ色に染まる公園

その公園の中にあるベンチに栗色の髪をした一人の少女が座っている。しかし少女は遊んでいる様子でもなく、ただ俯いて力なく座っているだけ

いや

少女は泣いていた。声を押し殺して

傍目からはただ座っているようにしか見えないが、時折震える体と、小さな、本当に小さな泣き声が時折聞こえてくる

時間故にか周囲に人影は見られず、その少女に気付く人は居なかった

そう、人は、居なかった

「ふえ？」

不意に、俯いていた少女が顔を上げる

その目には大きく涙が溜まっており、今にも零れ落ちそうではあったが少女はそれを気にする様子もなく、辺りを確認するため立ち上がって周りを見渡す

「さっき…こえ？ うん、だれかのこえが聞こえたような……」

確認するように呟きつつ少女は立ち上がり、辺りを見回す少女。頭を動かすたびに、左右に括られた髪がまるで跳ねるようにぴよぴよよこと動いている

しかし少女が見る限り、人はおろか動物すらも確認できない

それでもしばらく辺りを見回していた少女の視線が、ある方向に向けられる

「…こつちからだったっけ？」

少女の視線の先には「犬のフンはキチンと飼い主が処理しましょう！」という、ある意味お決まりの注意書きが書かれた立て看板に広い芝生とそれを囲うような茂み

ふと、少女の頭をよぎる記憶があった

この公園で、昔家族と一緒にピクニックをした懐かしい記憶

少女の、厳しくも優しい父が頭を撫でる

少女の、見ているとほっとする笑顔を浮かべる母

少女の、頼りになる大好きな兄が少女の座る場所を整えて

少女の、姉が手を引いてそちらへ導いていくれる

少女と、皆が笑いながら

そんな、幸せだった記憶が蘇り、少女の瞳に溜まっていた涙が頬を伝って零れ落ちる

再び押し殺した嗚咽をあげそうになり、それと同時に俯きそうになった時　キラリと、茂みの中で何かが光った

「……………あ」

その光を見て少女は、その場所へと若干駆け足気味に近づいて

「うにゃあっ!?!　へぶっ!?!」

こけた

盛大にこけた

受け身も取れず、手を体の前面に持つていこうとすることすらできずに

無駄に勢いが付いていたのか、まるでヘッドスライディングかの如く

残念な事に、その少女の運動神経は切れていたのだ

いや、切れていると家族に言われるほどに酷かったのだ

どれだけ酷いと言われるとそれはもう酷かったのだ

幼少期、傷を作った原因の9割近くがこけたという理由ぐらいに酷かったのだ

何も無い道でこける位……いやこれは天然だったか

話を戻して、倒れてしまったついでに顔を茂みへと突っ込んだ少女。その際少し頬を引っ掻いた程度で済むあたり、彼女の運はかなりの物なのかもしれない

夕暮れの、そろそろ本格的に日が沈み、夜が訪れようとするこの時間の公園。辺りには人っ子一人おらず、静寂に包まれる中。茂みから体が生えているその光景はシニールともホラーとも取れそうなる意味芸術的な光景を生み出している

倒れた少女はぴくりとも動かない

そんな彼女を見ていたのは半分ほどその身を沈めた夕日だけであつた……

くプロローグ、完く

「…ふ、ふみゆ……」

いや、どうやらまだ終わらないようだ。倒れていた少女は茂みから枝や葉っぱがそれなりにくっ付いた頭を引き抜く

立ち上がりつつくらくらする頭を覚醒させるために、左右にブンブンと降る

「にゃあ〜、お顔がひりひりするの〜……」

おそらく顔を打つたのだらう。そんな泣き言を言いつつグシグシと顔全体を擦る様に汚れた顔を袖で拭いていく少女

続けて服や膝などに付いた土埃を払い、ある程度取れたところで改めて茂みの中を、今度は慎重にしゃがみつつ確認する

茂みの奥に、僅かに夕日を反射して輝く何かが見えた

その視界に移ったモノを手を伸ばして取り、確認するように目の前に持ってきて　ソレに、目を奪われた

それは500円玉程度のサイズのぼろぼろの金貨

その金貨の中心部分に、埋め込まれているかのように付いている汚れた銀色の球体

それを囲うかのように描かれた透明な、魔方陣の様な図形。その形は所謂五芒星と呼ばれる形をしている

夕日を反射する金貨はぼろぼろで汚れていて、だが、とても綺麗で

銀色の球体に付いた汚れを指で軽く拭く。僅かに球体が輝いた様に見える、少女はますます目を奪われる

少女はしばらく、そこから動けず

その手にある金貨、その中心にある銀色の球体から目を離せずにした

これが少女、高町なのはと奇妙な魔法の杖との出会い

デハイス

魔法少女リリカルなのは x Silver eyes

第一話 『始まり』 (後書き)

もう一つのプロローグへと続きます

裏一話 『もう一つの始まり』（前書き）

この話で一応プロローグは終わります。

色々書いていきたいことがあるので、原作開始までかなり伸びる
かもしれませんが、どうか宜しく願います。――（）<

裏一話 『もう一つの始まり』

何か、聞こえた気がした

それは、一体いつからだったのか

声が聞こえてくる

それは遠いのか近いのか

声が聞こえている

とても聞き辛い。まるで何かを我慢しているかのような

声が聞こえる

喚いてるわけでもない、叫んでいるわけでもない、だが

声が、聞こえた

なぜかはつきりと耳へと届き、そして理解する

泣き声が、聞こえた

この声の主は、今泣いているのだと

（　　）　　ったく、一体何なんだ？

さっきから誰かが泣いている、それがどうにも気になる俺は不機嫌に覚醒を果たす

目覚ましが泣き声のせいか、または別の理由からか気分が今一つ優れない

霞む視界の中、辺りを見る……確認できない

正確に言えば、辺りがほぼ真っ暗であるため、確認のしようが無いと言ったところか

所々光が漏れている個所から外が確認できなくも無いが、目的のもの　おそらくは人間か？　はそこからでは見えない

しかしさっきから頭の中が引つ掻き回されているみたいなの不快感が俺を苛む。気持ち悪い、どころではなく正直また意識を手放しそうだ

なぜこんな状態なのか　とりあえず行動しようとして、諦める

力を入れた瞬間、全身を割れるような痛みが走ったためだ。内心舌打ちしつつも、次の手として身体を動かさず周囲の状況を確かめようと、センサーを使い

（　　）　　ガッ……！？

今度は頭を刺すような痛みが走り、行為を断念する。もし無理やり
にでも行為を続けていたら、頭の中がどうかなってしまいそうな予
感する

昔から嫌な方面だけは勘が良く当たる…とても嬉しくはないが。し
かし助けられた場面も多数あるため、複雑な気分だ

そんな思考が無意識の内に流れる

頭はじくじくと痛みを発し、相変わらず泣き声は止まない、周囲の
状況を確認することもできない

なんだかもう色々面倒になってきた俺はとりあえず

「ここで泣くんじゃねえ。眠れないだろうが」

と、喋って

いや、喋れたのだろうか？

喋ろうとした瞬間に、何かカラダの中で爆発したような、そんな
感覚がした

緩やかに意識が遠のいていく

閉じていく視界の中、何かが見えた気がしてそちらに意識を集中する

こちらを覗き込む人間、おそらくは子供。深い紫色にも見える黒色の瞳がとても印象的な、少女

そこまで確認した直後、俺は意識を失った

魔法少女リリカルなのは Silver eyes

裏一話 『もう一つの始まり』（後書き）

質問等があれば、この欄で登場キャラ同士の掛け合いをしつつ答えていきたいとひそかに思っております。

何かございましたら、遠慮なく送って下さると大変嬉しく思います

第二話 『デバイスが夢を見る』状況整理と眠る少女と』(前書き)

3話目です。ようやくストーリーとして本格的に始まるわけですが、自身の構成スキルの低さのせい、ほとんどストーリーが進んでいない気がします。すいません；

10/20日修正

少女の瞳の色の修正。別の事と勘違いしていたみたいです。すいません；

第二話 『デバイスは夢を見る』状況整理と眠る少女と』

澄み渡った青い空、所々浮かぶ白い雲、空に浮かぶ太陽から降り注ぐ日の光

ベンチのすぐ傍にはよく手入れされた観賞用の木が生え並ぶ他、色々な自然に満ち溢れている

降り注ぐ日の光はとてもいい感じに遮られており、日差しによって暑過ぎることも無く、日陰によって肌寒いということも無い

あのベンチに座ってのんびり過ごす時間は、まさに至福の時と言っても過言ではないだろう。ここで何か飲み物があれば言うこと無しではあるのだが、そう都合良く持っているわけは無い

(まあいいさ……あれだけ条件の揃った癒しスポットなんて滅多に無い。欲張りすぎると碌なことにならんだろうし、さっさとのんびりするか)

ベンチに向かって歩き出す。心なしか早歩きなのは気のせいではないだろう

とは言っても俺の体躯は10歳程度のため、早歩きでも若干焦れる

(やれやれ、どれだけ子供染みてるんだか)

自分に対して苦笑いしながら歩いている途中、少し強めの風がふき
思わず目を閉じてしまう

風に乗って自然特融の香りが流れくる。その安らぐ香りを楽しみつ
つ目を開けて再び歩き始めようとして、自分が向かっていたベンチ
に誰かが座っている事に気付く

綺麗な…とても綺麗な少女だ

長く美しい金の髪。それを両サイドで括っており、余った髪を背中
へと流している

風によって流れるたび日の光が反射し、髪全体が輝いている様な、
そんな光景が広がっている

視線を少し下にずらせば、整った顔。おそらくは美少女と評価され
る容姿であろう

目蓋を閉じているため目の色は分からないが、きっと綺麗な目をし
ていると思わせる何かがある少女にはあった

触ったら壊れてしまいそうな印象を受ける華奢な肩から延びる腕は
細く

白く、簡素な造りながらも上品な印象を与えるワンピースから美し
い脚線が覗く

一般的な肌よりも白い……かといって病的なほど白くもない。所謂
美肌というやつだろうか

それが少女の美しさに拍車をかけており、まるで一種の芸術品かのような、どこか神秘的な雰囲気纏う少女から目を離せない

とりあえず無駄に良さげな言葉と表現を無意味に使い無駄な状況描写をして現実逃避をしたが、そろそろ本音を言おう

(なんてこった……既に先客が居たとは……)

そんな感想を抱くとガツクリと肩を落とし項垂れる。少しの間シヨックで固まっていたが、気を取り直して姿勢を正すと再びその光景を視界に収める

先程は気付かなかったが、少女からは微かに寝息が聞こえている。眼を閉じているというよりもお昼寝の真っ最中のようだ。

(最高の癒しスポットで優雅に昼寝だと……? 羨ましすぎる)

思わずそんな思考が湧いて出る

おそらく今の俺は凄く羨ましがな視線を少女に送っているのだろうが、当然寝ている少女に対して何も効果はない。それでも暫くの間未練たつぷりに少女とベンチを見ていたものの、諦めたように歩き出す

(仕方ない、別の場所でも探すか ん?)

ふと、頭の片隅に引っ掛かるものを感じた

小さな小さな違和感……いや、違う。これは

(……既視感? 一体何の)

その正体を探ろうと、先程頭に引っ掛かったモノに意識を集中しようとして

「ん、うう……にゅ〜」

(……にゅ?)

少女が発した謎の言葉に意識が持ってかれてしまう。それと同時に引っ掛かっていたモノは完全に霧散してしまった

……別に少女が悪い訳ではないのだが、どうしてもジト目を向けてしまうのを止められない

ベンチに座っていたもぞりと少女が身動きする。どつやら寝ていた少女の意識が覚醒しつつあるようだ

「……っんっんっん！」

と、そんな気持ちよさげな声を発しつつ頭上で両手を組み、盛大に身体を伸ばしながら目を開ける少女。ふと、少女の開かれた目がこちらを見た。思いつきり互いの視線が絡み合う

予想通りというかなんというか、ワインを思わせるような深い赤の瞳。それが俺をロックオンした

少女の時間が止まる…1秒…2秒…3秒

「え…ええええ!?!」

驚いたような少女の声、わたわたと全身で「私慌ててます」と表すかのような動きをしている

まあそんな少女の様子を俺はバツサリ無視して、先ほどから抱いていた疑問をぶつけるために口を開く

と、ほぼ同時に少女も口を開き

「誰だお前? / あなた誰!?!」

俺と少女の声が重なった

意識が覚醒する

何も考えず…というか考えられない。俺は久しぶりに、本気で困惑している

(……夢?)

そう、夢だ

懐かしい、かつてお気に入りだった場所に謎の少女。しかもやたらとリアルな夢だった。しかしまあ……

(夢を見るなんて……昔以来だ)

遠い昔の、もう戻らないあの日

何も知らず、ただ普通の子供として愛されていたのだと理由もなく信じていた、シアワセな日々。それ以来夢を見たことはなく……というより、夢を見るほど深く眠れた試しが無い

（しかし、実際に夢を見るのは浅い眠りの方のレム睡眠とかいう方だから、深く眠れたと表現するのは色々）

そんなどうでもいい事を考えて、気付いた

頭の中の不快感が消えている

それだけではない、考えただけで頭痛が襲ってくるようなことも無いし、何より身体が軽い

軽く左腕を動かす…多少の痛みが走る、また感覚に微妙な違和感、細かい不満点はいくらでもあるものの
動くなら問題ないと結論付けて身体を起こそうと…起こそうと……

右腕に奇妙な感覚、先程から違和感を感じていたものの、おそらく身体が不調によるものだと

（……そろそろ現実から逃げるのはやめるか）

聴覚には誰かの寝息と、身動きをするたびにシーツが擦れる音が流れ込んでくる

それと同時に右腕の奇妙な感覚が若干強くなる

身体が強張る…どうやら今度は緊張しているらしい。これも久しく

感じていなかった感覚だ

右に顔を向けるのが怖いが今更の話だ。そもそも現在の周囲の様子は知覚機能があるため周囲の様子は把握できる。大事なことなので2回言いましたとも言おうと思ったのか。言うつもりなんてなかった

分かっていたことだ。ただ今の今まで現実を見ようとせず、身体の調子を確認するフリをして現実から逃げていただけの話

覚悟を決めて、ゆっくりと…意味も無く非常にゆっくりと顔を右に動かす

視界がずれていき、やがて見えてきた光景は

緩みきつた顔をした少女が右腕に抱きつくような形で寝ていた

「~~~~~ツ!!!」

解っていた事とはいえあまりの恐怖……そう、恐怖に叫びそうになるものの我慢に成功する

(ギイイイイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!(

胸中では馬鹿みたいに悲鳴を叫んではいたが。ああ、もしかしたら生まれて初めて恐怖によって叫んだかもしれない

暫くしてようやく無理やり落ち着いたフリをして、俺はこの状況を整理をしようとする

1、誰かの泣き声が聞こえた気がして意識覚醒。その後なんやかんやで再び意識を失う

2、再び覚醒。夢を見たことに本気で困惑しつつ、身体の調子を取り戻していることに驚くフリをしつつ現実逃避

3、現実に直面し、初めての経験叫び

4、据え膳食今現在の状況わぬは男の恥……ん？

駄目だ、まだ落ち着いてないらしい。まあ考えていればその内落ち着くだろうと希望的観測を抱きそのまま思考にふける

2 4の流れはまあ自分で確認したわけだから問題ない。問題は1 2の間な訳だが……

(まあ、今の状況的に右腕に掴まっている少女に拾われた。というのが一番違和感が無いか)

意識を失う直前見た少女 栗色の髪と黒い瞳…まるでアメジストの様な紫色にも見える印象深い瞳。辺りはほとんど闇に包まれては要るものの、俺にとって少女の髪の色を確認することは別に難しくもない

ホー、ホーという鳴き声……フクロウだったか？それとリーン、リーンと鈴虫が鳴いている状況と合わせておそらくまだ深夜と言うべき時間帯なのだろう。頭を動かさず視線を巡らせると時計が見える
…時刻は3時半

時間帯のせいか、すぐ横の少女以外にもこの建物 おそらくはこの少女と家族が住む家 に三つ程反応があるが、どれも動きが無い所を見ると就寝中なのだろう

ある意味好都合な状況ともいえる。今なら誰にもばれずに逃げ出せるだろう

すぐさま実行。少女が掴む右手を捻り、（ガシッ！）抜こうと……？

再び視線は右へ。少女が先程よりも力強く掴んでいる光景が見えた

状況から推察 結論。右手を捻って少女の手を離させる事に成功。しかし抜こうとした瞬間少女が再び、最初よりも強く俺の腕を掴んだ

偶然の産物かそれとも別の何かか。結果的に俺の腕を完全に固定させるという事態に陥る

ここで俺が手を外そうとする場合、先程捻った方向とは反対へ強引に捻ればいい。だがその場合腕をガツチリと掴んでいる、というよりもキメている少女は

（間違いなく、起きるな……）

先程みたくほとんど衝撃を与えずに外すのは不可能な状況のため、はつきり言ってどうしようも

(……ああ、待機モードに戻れば問題無い……じゃないか)

完全に呆けていた。どうやらまだ落ち着いてないようだ……いい加減頭を冷やさねば

とりあえずクールダウン。深呼吸を繰り返して頭をスッキリさせる。まだ心は動揺してはいるが、とりあえず頭はスッキリした

頭がスッキリしたことによりスムーズになった思考は、次々と自身の状況を理解していく……本当に今までどれだけ呆けていたのか良く解る

はつきり言つと俺の体はボロボロ。外面はほぼ修復は済んでいるものの、内面はかなり酷い

エネルギーも枯渇するか否かというレベルまで行っていた形跡、というより情報ログがある。さすがに肝が冷えた……肝なんて物はないが

現在は最大保有値の1〜2割と言ったところ。まあ元々あまり最大保有値は高くはないためこれはそこまで深刻ではない

センサーはどうやら7割ほど修復済み。周りの状況が分からなければ

ば状況判断に支障がでるためかなり優先的に治すようにしているのが幸いしたか

他にも色々診て回るが……よくもまあここまでといった感じの壊れ具合に辟易へきえきとする

一番致命的なのは自己でエネルギーを生成する機能。俺の中心核にある物が持つ規格外の機能の一つ

エネルギーを理論上無限に生み出すというふざけた機能だが、これはほぼ死んでいる。俺にとって一番重要な機能でもある。致命的すぎるな

それとは別に、エネルギーを回復するための機能もあるが……こちらにもダメージは大きい

一つは周囲の魔力素を。もう一つは魔力保有者から魔力を取り込み、自身のエネルギーに変換するこの二つの機能。前者は無いよりはマシ程度であるが、完全に死んでいる

元々あまり役に立たないが、今の状態だと喉から手が出るほど欲しい機能……普段でも肝心な時にも役に立たないのか

そして後者……これは

視線は右へ、腕を掴む少女へ固定

(……なるほど、凄まじい保有量だな)

何の因果か、俺を拾った少女が魔力保有者だったという事が

そのお蔭で生きていられるのでその因果に感謝しつつも、少女の魔力保有量に驚きを隠せない。明らかに年齢に対する保有量が釣り合っていない

5〜6歳に見えるのだが、実はもっと年を取っていたりするのだろうか？

…まあ今は後回しか。再び状況の纏めに入る……

1・隣にいる少女に拾われたお蔭で一命を取り留める

2・ある程度回復して、無意識の内に待機モードを解除したため現在の状況に陥った可能性が濃厚

3・外はなんとかあったが内はボロボロなので無理は禁物。早急にエネルギー回復の必要あり

4・そのエネルギー回復手段が限られているためこのまま逃げ出すのは得策ではない

3、については先程確認した通り。4はこのまま外に出たとして、この少女以上の…言い方は悪いが、高物件に出会える保証が無い。

1、2については証拠がないので推測でしかない訳だが、1はそれしかない気もする

2については…確かに待機モードはエネルギー消費率の低下、自己修復機能の効率上昇等。良い事尽くしだが自発的に使う機会は少な

い。突発的な事態に対処しやすいのは人型の方だからだ。モード切替時には多少とはいえ無防備になる上、タイムラグも起きる

待機モードを使う状況となればとりあえずは二つ。致命的なまでの損傷、もしくはエネルギー不足。特にエネルギー不足は最悪だ。それが無ければ何もできない、自己修復さえも

俺は寝ている時に襲われる事を警戒、睡眠時は人型でいようとする習慣がいつの間にか付いたため、ある程度状況が改善された後人型になった。と考えれば推論ではあるが正解の可能性は高い

さて、状況の整理は済んだが、問題はこれからの事

(あまり気は進まないが、この少女の傍に置いてもらうというのが最善か)

兎にも角にも体を直す事が最優先。現在自力でエネルギーを生成できない状況のため、少女から魔力を分けて貰わないとどうにもならない

そうなると彼女の近くに置いてもらうか、常に所持してもらうのが最善だ。離れると分けて貰うことができなくなる

(となると、事情を説明して協力してもらわないと駄目か…)

さて、少女の答えは承諾か。それとも 拒絶か

承諾は……普通の人間なら有り得ない。人は異端を簡単に拒絶する……だがそれが普通の対応であり、人として正常の反応である

誰だって自分から危険であるかもしれないモノに関わろうとするはずがない……この少女はどうなのだろうか

魔力を保有しているということは魔法に関わりのある人間なのだろうか？ その可能性は無くもないが、この緩みきった顔した奴が魔導師というのはどうにも信じられない

……キリが無い。思考をストップした後待機モードに戻る。今の内に少しでも直していた方がいい。拒絶された時の保険として

「う……うう……」

横の少女からの声。どうやら掴んでいた物が無くなったせいかわどく不満げだ。緩んでいた顔が険しくなる

さすがに背に腹は代えられない。こちらは命が掛っているのだ。我慢してもらわないと

「う、あう……ぐすっ」

いや待て、さすがに泣かれるのは予想外だ。いつの間にか険しい顔から不安げな、寂しげな顔になり、手は今も尚何かを掴もうと布団

の上をさまよっている

なんだこの状況は。俺が悪いのだろうか？ 他人の安眠よりも自分の命を取る俺は間違っているのだろうか？ いや、間違ってるはずは無い。普通はそうする誰だってそうする、はずだ

「ひ……は……やなの……」

閉じている少女の目、そこから何かが流れ落ちて

「……すー……うにゃー……」

横には安らいだ顔にも、緩みきつただらしない顔にも見える少女が眠っている

その手にはもう離すまいとばかりに、先程よりも更にしっかりと握まれた俺の腕

「……………」

俺は、何をしてるのだろうか

そう胸中でつぶやくが、答えは帰ってこなかった

第二話 『デバイスが夢を見る』状況整理と眠る少女と』 (後書き)

次はなのはSIDE、というよりもこの小説でのなのはの過去描写になると思われます。

と、一応自分確認用の主人公となのはの設定？メモみたいなのができておりますが、こういうのは需要があるのでしょうか？かなり独自設定がある…ような気が致します。なのでもし気になるという方が一人でもいらっしゃる場合は上げてみようかと思しますので、感想のほうに記入していただけると助かります。

長くなりましたが、それではまた次回で会いましょう

第三話 『少女が一人でなくなった日』（前書き）

……ええと

ほの…ほの？を指摘す新参者です、はい

……どうしてこうなった

と、とりあえずなのはSIDEの第三話となります！

第三話 『少女が一人でなくなった日』

今から一年くらい前からだったか。少女の生活が一変したのは

仲の良い家族。暖かい家庭

それが突然、壊れた……少女の父、高町士郎が倒れたことによって

母の大好きだった笑顔が、見ていて悲しい作り笑いになった

いつも元気に、陽気に振る舞っていた姉が、空元気になった

兄の目が、雰囲気、態度が。とても恐くなった

それから母は、病院に入院した父の世話と翠屋の経営のため、殆ど家に居なくなった

姉はそんな母のサポートと学校の両立のため、妹に構えなくなった

兄は学校以外の時間はひたすら道場に籠るか、外に出かけるようになった

少女は一人になった

少女の新しい一日が始まった

少女の生活が変わってしまっ
てしばらくたった。相変わら
ず少女は一人だった

朝、誰も居ない家で起床

一人での朝食

リビングに置かれたお金

一人でのお留守番

一人での勉強

一人の昼食

一人でテレビを見て

一人での散歩

一人で公園に入り

耐えきれず、一人、泣く

明日も明後日も明々後日も、
そんな日々が続いた

何時の頃だったか。たまたま公園に居た女性が、少女が泣いている事に気付いた

ひどく心配してくれた。赤の他人である少女に対して

少女は凄く嬉しかった。嬉しくてまた泣いた

次の日も、また次の日もその女性は少女の様子を見に来てくれた

少女は嬉しくて嬉しくて、公園で女性を待つ時間が好きになった

それはある日の休日だった

少女はいつも通り、公園へと向かっていた

入口へと差し掛かった時、声が聞こえた

気になった少女はそちらを見る

いつもの女性が、男性と、おそらくは同年代くらいの少年を連れて一緒に公園で遊んでいた

その様子はとても楽しげで、それを見た少女も釣られて笑顔になった

一緒に遊んで欲しいと、子供としては当然の欲求が湧き出てくる

少女は声を掛けようとして 固まった

少年が放った言葉が、彼女の動きを止めた

「さいきんお母さんが家にいないじかんが多いからさみしい」

その言葉が少女の浮かれていた心を抉った

その少年が悪い訳ではない。少年としては親と一緒に居たいというのは当然の欲求だろう

その女性が悪い訳ではない。女性は他人とはいえ、泣いている少女を放っておくことなどできなかつたのだから

では、誰が悪いのか？

（ わたしだ ）

自分自身の心が発した言葉が、少女を責める

（ 赤の他人なのに。かんけない人なのに。そのやさしさにわたしが甘えた、甘えてしまった ）

そのせいで

（ あのこに、さびしい思いをさせた ）

少女は再び、一人になった

一人きりの公園で、相変わらず泣いていた

不意に少女が顔を上げた

そのまま隠れるように近くの茂みに身を潜める

先程まで少女が居た場所にやってきた人物がいた

あの日、声をかけてくれた女性だった

女性は辺りを見渡し　まるで誰かを探しているかのように　しばらくして来た道を戻っていった　し

少女は女性が去ってから念のため10分ほど待つと、安心したような、どこか空虚な笑みを浮かべてベンチに再び腰を下ろす

再び、泣き声が聞こえ始めた

少女は人の気配に敏感になった

誰かが来るたびに隠れる事を繰り返すうちに、いつの間にかそうなっていた

少女は泣く時にほとんど声を出さなくなった

万が一誰かの接近を許しても、泣いていると気付かせたくないと思死になって声を抑えた

少女は人通りの少ない場所と時間帯を選ぶようになった

何度も公園に入り浸っていた故に可能になった事だった

夕方と言うには遅く、夜と言うには少し早い時間に家に帰ると、誰も居ない家が少女を迎える

この時間が一番少女にとって都合が良かった

早すぎると、誰も居ない家に一人で居る時間が長くなってしまっ

誰も居ない家は、人の気配に敏感になった少女には辛いため、あまり家には居たくない

遅すぎると、誰かが早く帰ってきていた時に、その人に心配されたりしてしまうためだ

何回かその失敗をしてしまった時は、母に心配を掛けて泣かせてし

まったこともあれば、兄に物凄い剣幕で一方向的に怒られたこともあった

姉に何か言われることはなかった。学校と母のサポートで疲れきって、家に帰ると早々に寝てしまうからだ

少女は学習していった。どうすれば迷惑を掛けずに済むか。どうすれば余計な手間心配を掛けずに済むのか

少女は家族に心配を掛けない【いい子】になっていった

新暦61年12月21日

少女、高町なのはのいつも通りの一日が始まる

いつも通りの一人での朝食。黙々と食べる

いつも通りのリビングに置かれたお金。最低限のお金を使って昼食と夕飯を買い、残りは貯金している

いつも通りの兄の外出。休みの日は、兄は毎日この時間に居なくなる

いつも通りの一人でのお留守番。誰も居ない家。合鍵は持っている
とはいえ、不必要に家を留守にしてはいけない

いつも通りの一人での勉強。幼稚園には行っていない。登下校は誰かに迷惑を掛けてしまうから。その分を自主的に勉強する

いつも通りの一人の昼食。コンビニでサンドイッチを買う。毎日同じ味で飽きてしまったが、飲み物を使って無理やり飲み込んだ

いつも通りに一人でテレビを見る。天気予報を見て雨具が必要かどうかを判断する。余りに雨が酷い時は外には出ない。風邪を引いてしまったら家族が大変だ

いつも通りの一人での散歩。目的なんて無い。家に居るのが耐え切れないから正直どこでもいい

いつも通りに一人で公園に入る。人目に付きにくく、この時間帯は更に人通りが少なくなる絶好のスポットにあるベンチに座る

いつも通り、一人、泣く。貯めこむと身体の調子を崩してやっぱり迷惑を掛けるから。だから、泣く

明日も明後日も明々後日も、そんな日々が続くのだと少女は思っていた

そんな未来を想像して、少女は更に泣いた

声も泣く、泣いた

そんな少女に

誰かの声が、聞こえた気がした

そこは、とてもあたたかい場所だった

透き通るような青い空。まるで綿菓子のようなふわふわの小さい雲と、とてもあたたかい光を放つ太陽

とてもきれいに手入れされている木々が並んでいて、そのすぐ近くにベンチがある

お日様の光がちょうどいい感じに遮られているその場所は、おもわずそこでお昼寝したくなるような、そんな気分させる

わたしがよく行っている公園に雰囲気似ている気がしたけど、あの場所はここまで居心地の良さそうな場所ではなかったはずだ

わたしはふらふらと、まるで寝起きのようなふわふわした気分でそちらに近づいていく

ベンチまで後少し、というところまで来たときにわたしは気づく

(…だれか、ねてるの)

なんだか気になって目をこらし……おもわずため息がもれる

ものすごいきれいな女の子が、そこにいた

(ふわあ〜……)

おもわずぼーっと見とれてしまう

ふと、後から。わたしからそう離れていない位置に気配を感じて驚く

ここまでだれかが近づいてきて気づかなかったのはすごく久しぶり
かもしれない

なんとなく、おそろおそろ後ろを振り向くと目に入ってきたのは

真っ白な、髪

まるで冬に降りつもった新雪のような、きれいな白

そして印象的な…銀色の目、でも半分ほどしか見えていない 確か
こついうのを半眼って言うんだっけ？

こちらを見る半分閉じてた目がだんだん開かれていって……なんだ
か驚いてる様子なの？

でも、そのおかげで銀色のきれいな目がはっきりと見える

「な……な……」

「え……?」

目の前の人 わたしより年上の男の子。10歳くらいなのかな？
が何か喋った、気がする

なんとなく、なんとなく緊張する。男の子の真剣な表情、もしかして、これから何か重大な

「なんか増えたああああああああああああつ!?!?」

「にやああああああああ!?!?!?」

いきなり大きな声を出されたから、わたしは驚いた拍子に叫び返していた……

どこからか、スズメの鳴き声が聞こえてくる。どつやらもう朝みたい

「ん……」

もぞもぞと身動きをして、体に伝わる心地よい熱を離さない様に引き寄せる

あたたかい。すごく暖かい

そんな何かを今、わたしは抱きしめている

ベッドの中はぬくぬくとしてとても気持ちいいけど、あまりだらだらするのはダメだ。それは【いい子】がする行動じゃない

なごり惜しいけど、その手に持っていた“抱き枕”から手を放

（ え？ ）

疑問。わたしの家、というより部屋には抱き枕なんてものは無い

どんどん意識が覚醒していく

だったら今わたしが抱きしめているコレはなんなのだろう

だんだん感触がはっきりと伝わってくるようになる

まるで人の腕のような感触がする。とは言っても誰かと一緒に寝たのはもうずいぶんと昔なため、あまり自信が無い。

思わずさわさわと手で確かめるようにさわりながら、ゆっくり目を開けていく

まず目に映るのは白い髪……どこかで見たような気がするけど、思い出そうとしてもまるで頭に霧が掛るかのように思い出せない

視線をずらすと見えてくるのは　こっちを見ている銀色の目。こっちもどこかで……

「……起きたのならば離れてくれないか……いや本当に真面目にできるだけ迅速に」

その言葉に我に返る。今のわたしはその人の手をまるで抱きしめるようにして掴んでいる

その状況を認識すると今度は一気に顔が熱くなる。おそらく顔は真っ赤になっていると思う

「じゃ……じゃあああっ……!」

「っっ……!?!」

思わず思いきり力を込めて、押し返すように突き飛ばす……ううん、
そうとする。けれども、今のわたしはベッドの端に居たらしく突き
飛ばそうとした反動で私が

僅かな浮遊感、思わず目をぎゅっと瞑る。けど、何時まで立っても
予想していた衝撃は来ない……目を開けてみると

「……あ」

「やれやれ、突き飛ばそうとして自分が落ちそうになるのか（間抜
けだな）」

腕をわたしの背中へと廻して支えてくれている姿が見えた。それと
同時に言葉を掛けてくる。最後の方はボソツと喋ってたのでよく聞
こえなかったけど

それと体勢のせいかな、その人の顔が近くにあるため少し……ううん、
凄く恥ずかしい

「……あ、あり……すみません……」

反射的にお礼が出掛けたけど、迷惑を掛けた時はまず謝らないと。
と思い返したわたしは途中で言い直す

「…… 別にいい。部屋に見知らぬ者が居たら驚くのは普通の事だ」
言い直したせいか、少し怪訝そうな顔をしたけどそう言ってくれた事にとりあえず安堵する。それと同時にそのそっけない口調にどこか違和感を覚える

なんだか、何かを我慢しているような

「降ろすぞ」

「え？あ、はい……」

そう言った後、衝撃を与えない様に ゆっくりと丁寧に わたしを床に降ろした後、背中を支えていた腕が離れていく

（あ……）

離れていく温もり。それに一抹の寂しさを覚えつつ、先程言えなかったお礼を言う事にする

「あ、ありがとうございます」

「……」

頷く動作、どうやらそれが返事の代わりみたい

改めてその人と向き合う形になり、その人の全体の容姿が見えてくる

わたしより年上…多分10歳くらいの、男の子

所々跳ねて肩までかかる白髪に、とてもきれいな銀色の目。でも半分ほど閉じているせいで睨んでいるようにも見えて、どこか怖いという印象を受ける

着ている服は余り見ないタイプ…例えるなら口元まで隠すような紺色のタートルネックなのかな？

下は膝下まであるズボンなのだけど、その下から柔からそうな生地が伸びているため露出はほとんど無い

視線がその人の目に戻る。お世辞にもいい目つきとは言えない、その銀色の瞳。何かが引っ掛かる

(どこかで、見たことがあるような)

じーっと男の子を見る

「……………」

こちらを怪訝そうに伺う銀色の瞳……やっぱりどこか　　ってああ
っ！？

やっと思い出す。その瞳は昨日拾ってきたコイン、その中心にあつた球体と同じ色なのだ

そこまで考えて辺りを見渡す。昨日は帰ってきてお風呂に入った後すぐ眠ってしまった。拾ってきてしまったコインを抱いて

いけない事だと解っていた。落し物を拾ったら交番へ　それが模範的な【いい子】の行動だと解っていた

それでもなぜか……ううん、もしかしたらあれが藁わらにもすぐる気持ちって事なのかな

あのコインからなぜかほっとするような温もりを感じた気がして……手離せなくなったのだ

一通り部屋を探してみたけど、コインは見つからない

なんとなく、そんな気がしていた

だって男の子の……思い出すのも恥ずかしいけど、その腕に抱きついて眠っていた時に感じた温もり。それはあのコインと同じモノだったから

(でも、そんなことありえるの……?)

コインが、人になるなんて

(確かめてみたい……けど)

違ったらどうしよう。という思考が頭をぐるぐると回る

(でも……知りたい)

気分を落ちつける。覚悟を決める。正面から男の子を……正確にはその瞳を見つめて

「あの……あなたは、あのコインなんですか？」

そう、問いかけた

男の子はその言葉を聞き僅かに、本当に僅かに目を見開いた後、溜息？を付きつつ答えてくれる

「……ふう、こちらから切り出す手間が省けたか。よく判ったな？」

「あ、いえ…その、ほとんど当てずっぽうみたいなものですけど…」

わたしは自分がそう思い至った経緯を…とても上手な説明の仕方とは言えなかったけど話していく。時々詰まったりもした

男の子がそれに文句も言わず聞いてくれたことが、少し嬉しかった

説明が終わる。わたしは喋り終わった後ほっと一息を付く……そういえばこれだけ喋ったのはいつ以来だったろ

「…………ふむ」

わたしの説明を聞いて少し考え込む仕草をする男の子。今更だけどその動作の一つ一つがとも子供とは思えないような…落ち着きと言っのだろうか。それがある

「（本当にほとんど勘みたいなものだな）まあそれならその辺は説明する必要はないか。では改めて 初めまして。俺は魔法の杖…所謂デバイスと呼ばれる存在、みたいなモノだ」

そう自己紹介しつつ男の子が銀色の光に包まれて、姿が変わる……公園で拾った、あのコインの姿に。途中から電子音みたいな声にな

つていたけどそれはあまり気にならなかった。不思議な光景にほとんど意識を奪われていたから

しばらくぼけーっとしてしまっただけ、慌ててわたしは自己紹介し返す

「…あ！は、はじめまして！た、高町なによ…なのはと言います…
…？」

ふと、男の子の自己紹介に聞きなれない単語を聞いた気がした。頭の中で先程の言葉を反芻する。決して噛んでしまったことから逃げているわけではないです

「……魔法の、杖？」

魔法の杖とはあれだろうか。可愛い女の子がぶんぶん振り回すと星とかなんか色々出て変身して、最後は悪役を爆発させたりする魔法少女のお供的なあれことなのかな

「どついう想像をしているのかは知らんが、魔法の杖とは…デバイス そうだな、魔法の呪文プログラムを記録したり、魔法を制御するための調整演算をしてくれる機械……魔導師の相棒であり武器であるってところか」

まあ、あくまで俺の見解だが。と付け加えて説明してくれる男の子

……この場合デバイスの子って言うのかな？ でも見た目人間だし、男の子でいいよね

「へ〜……」

それにしても、聞きなれない単語ばかり出てくるものかと思っていただけ、意外と身近な言葉が出てきた事に驚く

「えーっと、PCパソコンみたいな物……って事ですか？」

「まあ、そうだな。魔法専用のPCとも言える……のかもしれない
なんだか魔法に対するイメージが崩れていく感じがする。なんとなくか魔法ってのは、こう、原理の解らない不思議なものであると思っていたのだから。うん、実際に姿は変わったときは不思議だと思っただけ」

「まあ、それでなんだが」

「…？」

男の子が凄く渋る顔をしつつ何かを言おうとしてるのだけど……凄

く言いにくそうな雰囲気です

「あー……なんだ。俺みたいない得体の知れない存在ははつきり言っ
て不気味だとは思うんだが」

「え、いえ！ そんなことは……無いです」

慌てながらの否定

確かに目の前の男の子は未知の存在で。さっき実際に姿が変わる場
面を見せて貰ってなかったら、話してくれた内容もすぐには信じら
れなかったと思う。でも

「そんなこと、無い」

今度は男の子の目を見て、はつきりと言う。そう言いきるわたしを
見て、目を細める男の子。それがどこか、悲しげに見えた

男の子は確かに人間でないのかも知れない。それでも

（不気味だというのなら、誰も居ない、明かりもついていない真っ
暗な家のほうが、よっぽど不気味だよ……）

帰ってくる度そんな家を見て、わたしは何度恐怖しただろうか

そんな家で過ごす夜が、どれだけ怖かっただろうか

お母さんもお姉ちゃんも帰ってくるのは10時過ぎ、お兄ちゃんは

……

「……あー、とにかくだ」

男の子のその声に、わたしの意識は現実に戻される。そうだ、今はこの男の子の話を

「その、かなり無茶なお願いだとは解っている。だが、どうか暫くお前の傍に置いてくれないか？」

「え？」

いま、この人は、なんて、いった……？

暫くお前の傍に置いて

言葉の意味を自分の中で何度も、何度も確かめる。間違いじゃない……？本当に

「……すまない、先の言葉はわす」「一緒に居てくれるのっ!?!?」
「あ?」

思わず大きな声が出る。でも、今はそんなこと気にならない

「一緒に……わたしと一緒に居てくれるの……?」

じっと見る。その瞳を。確認するかのように、縋るかのように。そのきれいな銀色を

「……まあ、そうだな」

男の子の肯定

泣き出しそうになった。嬉しくて

「……ほんとに……ほんとっ……に……」

声が詰まる。目が凄く熱い。泣き出しそうに、ではなくて本当に泣いてしまったみたいだ

「……………そ…反……………予…外……………」

男の子が何か喋っている気がする。でも今のわたしには聞こえない
理解できない

頭の中が真っ白になって、涙が止まらなくて、でも心の中はとても
あたたかい気持ちで溢れてる

きつとわたしは笑っている

泣きながら、笑っている

声を出して、泣いている

久しぶりに、声を出して、泣いている

悲しいのではなく、嬉し泣き

新暦61年 12月22日

その朝に

わたしは、
一人ぼっちじゃなくなった

第三話 『少女が一人でなくなった日』（後書き）

というわけで、デバイスと少女の生活が始まるわけですが……

こんな入り方で違和感なかったでしょうか？もの凄く不安でございますが

ところで、デバイスの解釈ってこれで合っていますかね？

少しどころかなーり不安ですが

これについてご意見があれば送って下さると嬉しいです

勿論感想などもございましたらどうぞ！

そして気づいたら未だに名前が出てない主人公さん

……じ、次回も宜しくお願いします！

第三話 追記 『名前』（前書き）

「さすがにその反応は予想外だ……」

予想外すぎる反応に思わず声に出してしまうが、少女は気づいた様子がない

一時動きが止まった時「ああ、拒絶だったか」という諦めの感情が自身の心を占めていく。だがそれだけだ。慣れたことだ。仕方がないのだ

先の言葉を忘れてくれ

そう言おうとしたが、途中で遮られた

驚いた拍子に思わず呆けた声が洩れるが、そんな事どうでも良くな
った

（何故、そんなに嬉しそうに泣く？）

訳が分からない。この少女が解らない

俺は少女に恐怖を抱く。本来抱かれるはずの存在である、俺が

だから気付かない

俺が、恐怖以外の感情を、抱いていたことに

俺は、気付かない

第三話 追記 『名前』

しばらくして落ち着いたわたし。でも泣く所をいっぱい見られちゃつてとても恥ずかしい

「…いきなり泣いちゃってごめんなさい」

「……」

無言で首を振る男の子。気にするなっことなのかな？

「あ……」

そこで気づく、そういえば男の子の名前を聞いてなかったんだ

「ん…どうかしたのか？」

「あ、あの！ お名前なんていうの？……じゃ、じゃなくて、何て言ってますか？」

男の子は「ああ、そういえば」という顔をしている。ふ、普通は名前は忘れないと思うけど、自分も忘れていたから人の事を言えないでも、返ってきた返事は予想外な言葉だった

「あー……無い」

「……え？」

思わずぽかーんとして、男の子を見る。「冗談を言っているや、誤魔化している様子でもない

つまり本当に名前がない……？

「え、えーっと……じゃ、じゃあどう呼ばれていたとかそういうのもいいと」その前に「……え？」

遮られたので疑問に思いながらも続きを待つ

「俺に敬語は必要ない。無理に使われると……あー……あれだ、逆に疲れるんだ」

「え……」

男の子はそう言うけど、その顔は明らかに今思いついたと言った感じだ。口元もひくひくしてる

多分、そういったことに慣れていないのだと思う。そんな彼なりの不器用な気遣いに少し微笑ましい気分になった。

「あはは……じゃあ、お言葉に甘え……じゃなかった。そうするの！」

「さて、名前の話だったな」

焦るように話を戻す男の子。もしかして照れてるのかな？ 無愛想
って思ってたけど、意外とそうでないのかも

「……ん、一度だけだったが、一応あったな」

「うん。どんなの？」

「シルバーSilver レイスWraith」

そう、呼ばれたこともあった。と男の子は言った

「……えっと……しるばーは確か…銀？」

そう確認するようには尋ねると、男の子は頷いてくれる

「ああ、合っている。Wraithは……亡霊や幽霊って意味だ」

「うんうん。つまり……え？」

つまり繋げると銀の亡霊（もしくは銀の幽霊）？　そ、それはなん
と…うか……

「……あ、あはは……」

「……どつどつでも思えばいい」

凄く、怖いです（お化け苦手）

ちょっと微妙な空気が漂ったけど、気を取り直してわたしは考える

えーっと……さ、さすがに亡霊や幽霊はないよね。幽霊君だなんて嫌すぎるよ

だとしたら銀、しかないよね……うん、でもきれいな銀色の瞳が印象的だし、ぴったりな感じがした

「うん……じゃあわたし、ギン君って呼ぶね!」

そういつて元気よく宣言するわたし。黙ってうなづく男の子ギン君

その様子が少し照れくさそうに見えた気がして、わたしはなんとなく笑顔になった

第三話 追記 『名前』（後書き）

「ん……」

「どつした……あ」

少女が悩むような声を上げるので、思わず尋ねてしまった

どうも調子が狂う。やはり子供はガキ苦手だ

胸中で舌打ちする。そんな俺の様子に気付かず、少女は答える

「うん、名前のことだけだね」

名前？ まだ何かあったのだろうか

そんな事を思った瞬間、嫌な予感が俺を貫く

（……な、なんだ？）

なんだ、このタイミングで嫌な予感だと……？

目の前の少女が口を開く。嫌な予感はどうも強くなる

「ギン君髪も真っ白できれいだから、シロって名前のほうが可愛くてよか「却下だ」…えー…」

少女が不満げな顔をしてくるが、却下だ。さすがにそれは勘弁してくれ

「シロ」と言う名前は、俺の中ではペットのイメージではない。さすがにそう呼ばれ続けられるのは……なんというのか、そう、情けなく感じる

尚も不満そうにこっちを見る少女を、どう説得したものか……妙な事に頭を悩ませる、そんな、平和な朝だった…

第四話 『昔の記憶と家庭の事情』前編』（前書き）

時間がかかってしまいました。第四話となります。

今回は少し文量が多めなので、前後に分けました。

それではどうぞ。

第四話 『昔の記憶と家庭の事情』前編』

俺を拾った少女、高町なのはから海鳴臨海公園に俺が落ちていたのだと聞いたのは今日の朝の事

朝食等を済ませ、10時辺りに高町家を出て公園に来ると少女はベ
ンチに座り、俺は何も考えずに空を見ていた。まあつまりはぼけ
っとしていただけだが

今は正午…12時前ぐらいか

空を飛んでいる鳥 あれはなんとという名前だったか を視線だけで
追っていると、ふと頭に浮かんできたのはとある疑問

そういえば、あの日からどれくらい時がたったのだろうか。と

機能停止した後の情報が無いため、まったくわからない状況なので
ある

機能停止前に居たはずの世界であったなら、日付で確認するなりで
きたのだろうか…その世界すら違うのだから確認のしようも無い

では何故今の俺は、停止前に居たはずとは違う世界にいるのだら
うか？

停止する直前に色々としていた様な気もするが、その情報は曖昧過
ぎる上断片的なため、判断材料にはならない

この身は水準よりも遥かに優れた記憶能力を有している…いや、そ

うできている

停止する直前だろうかなんだろうが記憶に残っていてもおかしくはないはずなのだが

はっきり言つて曖昧な記憶がある、ということのほつがこの身にとつては異常と言つてもいいのかもしれない

ああいや、記憶する機能自体に問題が発生していたとすればありえるのだろうか？

黙々と考える。推測したとしても証明する手立てが無いため、無駄だとは解つていてもつい考え込んでしまうのは俺の悪い癖か

結局のところ、現在の俺には答えは出せないのだろうかというのが結論

とまあ、その日の事を考えていたからだろうか

とある記憶（情報）が頭を過る

あの日知つた真実

自分がどういふ存在だったのか、という事

自分が生まれた意味、生きて、育てられたその理由

それを伝えるのは二人の科学者^{にんげん}

ノイズが走る

もう喋ることは無い二人の内の一人

狂ったように笑うもう一人と、そいつを壊そうとする自分

ノイズがハシル

気がついたら故郷と呼ぶべきであろう場所は原型を留めておらず

自分のお気に入りである いや、もはや面影すら無いお気に入りであった場所で途方に暮れる自分

呆然と佇む自分と、ソレを護る様に取り囲むモノ達

一気に変わってしまった自分を取り巻く世界。その現実から目を逸らすかのように、周りに群がるモノを壊していく自分の手は……

ノイズが止まる

ソレを追うために自分が生まれた世界を飛び出した

理由は特に無く……ただ単に他にやる事が無かっただけなのか

逃げた一人を放っておくと何をされるか解らないというのものもあるの

かもしれない

旅が、始まった

ただ探し出して、壊すためだけの旅が

どれだけの世界を渡り歩いただろうか

沢山の人に出会った

沢山の人が笑っていた

沢山の人が生きていた

沢山の人が見えなくなった

沢山の人に怨まれ、疎まれ、拒絶され

そんな日々の果てに、ソレを追い詰め、壊し

その果てに、俺は

壊れた

(はず、だったんだがねえ…)

しかし現実はどうだろうか。あの時壊れたと思っていた自分はまだここに存在している

まあ細かいことを言えば確かに壊れている。自身の機能、その半分以上は停止状態

しかも、ある意味一番重要とも言える機能は停止状態ではほぼ全壊。自己に備わっている自動修復機能では完全修復はおそらく不可能ときた

これではいざという時

(…はっ。馬鹿らしい)

そこまで考えてから思考を中断させる

もはや自分が戦う意味も理由も無い

それに…

(この世界に魔法という技術は無い、と思う)

ここに来るまでに何人かとすれ違い、その度に確かめてきたが魔力を感じない

人以外の物　例えば街灯だったり車だったり等　にも魔法による技術は使われていない

新聞やテレビでニュースをざっと確認しても関連する単語は確認できなかった

一般的ではない…所謂裏の世界ではどうかは知らないが

少なくとも今自分がいる海鳴市で魔法を使わざるを得ない事態になる可能性は限りなく低いのではないだろうか

そこまで考えて改めて再認識する

ここでは…海鳴市では自分という存在は異端なのだ

(ああ、もう一人居たな)

待機状態の俺を膝の上に乗せ、ベンチに座っている少女

魔法という技術が無い世界で魔法の素質を持った存在

“高町なのは”

今の年齢である魔力。その素質は相当なものであり、生まれた世界が世界ならば優秀な魔導士に慣れる可能性があっただろう

(まあ、素質が有ろうと関係ないか……)

少女は人間だ。俺とは違うし、素質が有っても使う機会が無いのならそれは一般人となんら変わりない

だからこそ、あまり長く関わるべきではないのだろう

俺はそれを使う機会と成り得る存在だ。いつそれが訪れてしまうか分かったものではない

日常から非日常へ……魔法という言葉に年頃の子供は心踊らされるかもしれないが、実際にはそんな良いモノなどではない

(……しかし、今のこいつの生活も一般的とは言えないのだろうか)

意識を少女へと向ける。俯き加減に座るその姿。その原因は分かっている

思い出すのは今日の高町家での出来事

遡ること約3時間程前

寝起きの場面等で一騒動あったものの、少女の腹が鳴るという事態によりとりあえず朝食を食べる事になった

その間待機モードになって大人しくしている……つもりだったのだが、なぜか俺は“人型で”朝食に同伴させられる羽目となった

現在のリビングでは、一人分の朝食をもそもそと食べつつも、こちらをちらちら見てくる少女の視線。それを意識しないよう新聞海鳴新聞　を読んでいる俺という状況である

リビングにある音は少女が食事をしている音と、新聞をめくる音、後は互いの息遣いくらい

「……………」

「……………あう」

訂正、時折漏れる呻き声みたいなものも追加か

気まずそうにするくらいなら俺を同伴させるなど言いたい

朝はこちらの事情の説明等、色々理由があつたため我慢していたが、

人とのコミュニケーションあまり得意ではないのだ。会話を求めているのなら俺ではなく、道場の方に居る奴にしてくれ

(…：そういうば、何故道場にいる奴はこいつを起こしに来なかったんだ?)

今現在の時間は8時を周り、長針が6の数字を指そうかといった時間だ。朝には若干遅い時間だが、まあ別にそれはいい

問題は別…：何故道場に居る、おそらくは少女の家族であろう奴は一緒に食事を取らなかったのか

ああ、この家の間取りは下りて来た際に一通り確認した。道場があった事に軽く驚いたが…：まあいい、話を戻そう

6時前に出ていったの二人 同じ家に住んでいるのだから、こちらも家族なのだろう は、まあ仕方ないのだろう。急いでいる様子だったし、おそらくは仕事等の事情があるのだろうと思う

少女はまだ幼い。あまり早くに起こすのは良くないとも考えたが、気遣ったとしても考えれば、まあ辻褄が合わないこともないと思う

しかし道場に居る奴 面倒なので以下は奴と略す は違う

起きた時間は4時とかなり早かったものの、それから7時頃までずっと道場に籠っていた。その後7時半頃までリビングにいた事から、おそらくは奴も朝食を食べていたのだろう

7時半なら別に早い時間帯でも無いはずだ。なら少女を起こしに来て一緒に食事してもおかしくはない。家族ならば

それとも奴は家族ではない？

そうだとしても同居人なら一緒に食事くらい

もしかして奴と少女は余り仲が良くないとか

そんなことを黙々と考えていると沈黙に耐えられなかったのか、少女から俺に話しかけてくる

「…ギン君はご飯食べなくてもだいじょうぶなの？」

そんな事を聞いてどうするつもりだ？

それがお前に関係あるのか？

食事する事のメリットもあるが、別にしなくても死にはしねえよ。構うんじゃないねえ

反射的に質問に対する答えがうつほど浮かんできたが、全て酷い内容だったので即座にその考えを消して新聞に意識を戻

「……つく……つ」

押し殺したような泣き声。視線をずらせば目の端に涙を浮かべつつある少女が見えた

(~~~~~っ!~)

思わず胸中で悶える。無視されたくらいで泣くくらいなら最初から話しかけるなど、やはり声に出さずに文句言いつつ

「……食べなくても平気だ」

どうにもぶっきらぼうな口調の上、抑揚の無い声になってしまったが何とかそう返す。ついでにすぐへタれた自分に対し罵詈雑言の嵐を心の中で送っておく

「…! そ、そっか…」

返事が来たことがよほど嬉しかったのだろうか。顔を綻ばせつつ食事に戻る少女。よくもまあ、あんな答えでそこまで喜べるものだと逆に感心する。“あんな答え”を返したのは他ならぬ自分自身だが

さて、食事を再開しつつも再び思案顔に戻る少女が見えるわけだが、まさか再び話しかけてくる気なのだろうか

(……勘弁してくれ)

とやはり声に出さず嘆きつつ、せめて現実から意識を逸らすために先程まで考えていた奴と少女の事について

(いや、待て)

待て、待とうか俺。何故俺はそんな事を考えている？

何故俺が“高町家の家庭の事情”について考えなければならぬのだ

俺はたまたま目の前の少女に拾われてしまって、現在は事情により共にいるわけだが、ある程度自身の修復が終わればすぐこの家から居なくなる予定の存在だ

そもそも俺は新聞を読んでいたはずだ。この世界の情報を少しでも集めるために新聞を読み、更にはテレビも付けてもらってニュース番組が垂れ流している情報を集めていたはずだ

そう、付けてもらうために我が身に起こる拒絶反応を無理矢理押さえて、話しかけてお願いしたというのに俺は

(なんで、何故俺は必要な情報ではなく不要な情報の整理をしている)

別にニュースや新聞の情報を取得出来ない訳ではない。マルチタスク…所謂並行思考とでも言うのだろうか。まあ簡単に言えば“同時に複数の事柄を考える”という技術

それのおかげで少女との会話、新聞からの情報、ニュースからの情報、そして高町家の事情。4つの事を並行して思案することくらいなんら問題無いのだが…問題無いのではあるが……

（しつかりしろ……余計な事を考えるな。素数だ、素数を数えて落ち着け……いやしかし素数を数えたところで落ち着く奴っているのだろうか」

「え？ な、なにギン君っ！」

ジーザス。どうやら無意識の内に考えが声となって漏れていたらしい。不幸中の幸いなのか、小声だったため内容まではつきりと聞こえてないみたいだが

しかし少女はまるで花咲くかのように思案顔から笑顔になるとこちらに続きを促してくる。たたり、と冷や汗が流れ…た気がした。実際に流れるわけがないのだが

不幸中の幸いなんて考えたのは誰だ。俺か。いや突っ込んでる場合じゃない。これならまだ内容が聞こえていたほうがマシだった。適当に独り言だと言って誤魔化せば、変には思われるかもだがこんな状況にはならなかった

少女はニコニコ、いやへニヤへニヤ？とでもいった感じの締まりのない緩い笑顔を浮かべつつスタンバイしている

こうなってしまうた以上黙り込んでるわけにもいかない。そんなことをすれば今度はあの締まりのない笑顔が泣き顔になり、更に面倒な事態になるのは間違いない。それは先程実証済みだ

だが経験は活かすもの。マルチタスクを無駄に駆使し、数十にも及ぶ並行思考を持ってすればこのような問題など

(……………なにも浮かばない……………)

^{アラート}警報が鳴っている(気がする)。目の前の少女の顔が緩い笑顔からだんだんと怪訝顔になる

^{アラート}警報が激しくなった(気がry)。目の前の少女の顔が怪訝顔から段々と不安げな

「あ、ああ!」

「ふえっ!?!」

瞬間、頭に天啓とでも言うべき話題が浮かんできたため思わず大きい声が出た。少女が驚いているがそんなことは関係ない。取り敢えず先程浮かんだ手札(話題)を迷わず投下する。というかこの話題

しか無い

「お前、俺を公園で拾ったと言っていたが……その公園はどこだ？」

「え？ 海鳴公園のこと？」

海鳴公園と言うのか。いやまあ名称も大事だが、俺が知りたいのは場所な訳で。その旨をなんとか伝えたと彼女は顔を再び綻ばせ

「うん！ じゃあわたしが案内するの！」

と、素敵な笑顔付きで元気よくほざきやが……失礼。のたま宣った

(…まあ、ある程度予想はできていたさ……はあ)

それから十分程立った。今少女は無事朝食を終わらせ、鼻歌を歌いながら食器を洗っている。あれからも色々会話（試練）が襲いかかってきたため、俺は既に大分疲れている。元々本調子では無い訳だし

かなり気分的にだらけながらも新聞を読んでいると、台所からの水音が止まるのが聞こえた。無事食器洗浄を終えた少女が手を拭きな

がら話しかけてくる

「それじゃあ、準備してくるからちょっと待っててなの！」

「……………」

もはや色々諦めたが、最後の抵抗として無言のまま「さっさと行つてこい」と手でジェスチャーのみの返事をする

だがそんな抵抗も少女の前には無意味。少女は反応が帰ってくるだけで嬉しいのか、にへらーと笑うとそのまま二階に上がっていった

「……………最近の子供は^{ガキ}どうなってるんだ」

思わず愚痴が漏れる。普通これだけ邪険に扱えば、あそこまで無邪気に居られないと思うのだが

(場所さえ教えてもらえば、一人で勝手に行くんだがな……………)

そっちのほうが気楽で手早く済むから俺としてはそっちのほうがいや、そうなると魔力を分けて貰えないから無理か

結局選択肢など無いのか……………そんな事を考えているとセンサーに反

応が有った。何か、というよりも誰かが近づいてくる……さっきまで道場に居た奴か

俺の姿を見られるとおそらく色々面倒な事になるので、待機モードに戻っておく。勿論その時に俺が居たという痕跡を消すのを忘れないう。まあ元々消すような痕跡もあまりないのだが……それでもなかなか際どいタイミングで、リビングと廊下を繋ぐ扉が開かれると一人の青年が入ってくる

年齢はおそらく15〜17歳ぐらいか。髪の色は黒。背は高く、体躯も余計な肉がついてない引き締まった体……そう、まるでその道の人のような鍛えられた体をしている

だが何よりも気になるのはその目。まるで周りが見えていないかのようななどんよりとした目をしている癖、異様なほどギラギラとしていて……鬼気迫るような、まるで追い詰められているような印象を受ける

足取り荒く奴（青年）は冷蔵庫へ向かうと、中から飲料水を取り出して飲み始める。そこへ準備を終えた少女がリビングへと戻ってきた笑顔でスキップでもしそうなほどテンションが高かった少女が、冷蔵庫の前に居る青年の姿を見て体を強張らせる。それと同時に青年も少女を認識したのか、そちらに視線を向けると

「……なのはか。俺はこれから外出するが、ちゃんと留守番してるんだぞ」

「…え？ あ、お、お兄」

そんな事を一方的に告げ、リビングから出て行った

しん、と静まり返るリビングに、玄関の扉の開閉音がやたらと響く
とりあえず待機モードを解除して人型に戻り、固まったままの少女
に視線を向けてみる……先ほどまでとは打って変わり、重い空気を
纏い顔を伏せたまま動かない少女がそこにいた

(………思ってたより“高町家の家庭の事情”ってのは複雑なのかも
な)

思わず溜息が出る。面倒だという事と、相変わらず関係ない事柄を
考えてしまったという二重の意味の溜息

(まあとりあえず、だ……こいつ、どうすればいいんだ?)

動かない少女を前に、俺は途方に暮れるのだった

第四話 『昔の記憶と家庭の事情』前編』 (後書き)

後編へ続きます

第五話 『昔の記憶と家庭の事情』後編』 (前書き)

後編になります

それではどうぞ

第五話 『昔の記憶と家庭の事情』後編』

あれから、少女をなんとか再起動させて公園に案内してもらいベンチに座ったのはいいのだが、特に何もすることが無かった為時間だけが過ぎて行き

(で、現在に至る……と)

回想が終わり、改めて現状を再確認……俺としてはこのままでも魔力供給という目的は果たせるわけだが

しかし、つい3時間程前まではへらへらしていた少女がこうも沈んでいるというのはなんといいのか…そう、居心地が悪いというか

辺りは冬特有の寒気に包まれてはいるものの、雲一つない快晴で太陽の直射日光が降り注いでいるためそこまで体感温度は寒くない

空気も澄んでいて、近くに海でもあるのか、独特の匂いが風と一緒に流れてくる

とても恵まれた条件、なのだが。少女が暗めのオーラを発しているため安らいでいるとは言い難い状況である

(それにしても、奴……こいつの兄はなんのつもりだ?)

少女が兄と言いつけていたからおそらくはそうなのだろう。だが少なくともあれは家族間で交わされる会話ではなかったように感じた少女に一方的に告げ、少女が話そうとしているのを聞こうともせず

(いや、あれは“聞こえてなかった”のか?)

ふと、そんな考えが浮かんできた。だが確かに、思い出してみれば奴の様子はどこがおかしかった様にも思う。特にあの目が

あの妙にギラついた目が平常だというならそれまでだが……いや、それはそれで危ない人になるわけだが

それに奴ばかりに気を取られてはいたが、少女の様子もおかしかったと思う

兄を見て体を強張らせるといふのは一般的な反応とは言えないまさか奴にナニカされたのか?

そんな変な方向に思考が向かいかけた時、今までほとんど動きがなかった少女が身動きをしたのを感じ意識が少女へと向かう

少女の目が、膝の上にある俺をじっと見ていた。暫くの間そのままの時間が過ぎて、少女が口を開く

「家に居た男の人……わたしのお兄ちゃんだけだね。ほんとはすっごく優しいの」

唐突に喋り始める少女に驚くが、それ以上にその言葉に驚きを感じる

「昔は、わたしが何かしようとする度に「大丈夫か？」」「無茶はするなよ。なのは」っていつつも気に掛けてくれて」

どんくさいからわたし 少女が苦笑しながら語る。今朝見た様子からでは想像できない、少女の兄の姿を

「結局何か失敗しちゃっても、何よりも先にわたしの事を心配してくれて……その後、「仕方が無いな」って言いつつ、手伝ってくれるの」

少女の指が俺の身体 その中心にある銀色の球体 に触れ、そのまま優しく撫でる様に動かしてくる

「わたしが無茶しちゃったら凄く怒るの。怖いけど、でもその後優しく抱きしめてくれるの……」「心配したんだぞ」って」

聞いている。と返事をする代わりに少女が触れる球体を発光させる。

それを見て少女は嬉しそうに目を細める

「お兄ちゃんだけじゃない……お父さんも、お母さんも、お姉ちゃんも……みんな、いつもわたしのこと……」

家族のことが大好きなのだろう。兄をはじめ、家族のことを語る少女の様子は自慢げであり、誇らしげでもあった

いい家族なんだな　その言葉は声に発する事なく胸中に消える。
もしかしたら俺は、少女に嫉妬していたのかもしれない

(子供ガキに嫉妬する　か、俺もまだまだ子供ガキってことか)

嫉妬をしてももうどうにもならない。どうにかなる事でもない

確かに俺の家族、と呼ぶべき者は少女のそれと比べるまでもなく歪で、冷たく……最低の部類なのかも知れない。いや、家族と表現するのがそもそも間違っているのか

それでも俺は、あの頃は幸せだったと思う。少なくとも四六時中誰かに、何かに襲われる心配などせず、与えられるままに、求められるままに、ただ日々を過ごしていたあの頃は幸せだったと、思う

だが、こうやって比較対象があるとどうしても

少女が話す、家族の自慢は止まる事は無い。それだけでこの少女が

どれだけ愛されているのかが分かる、気がする

親の愛、というものがどういうものなのか。知識としてはあっても実感したことは無いため、あくまでも予想に過ぎないが

ふと、聞こえていた声が止まる。再びその顔が沈んだものになり、俯く少女

「……でも、お父さんが倒れて全部変わっちゃった」

口から飛び出てきたのはそんな言葉。悲しそうな、辛そうなそんな声

「最初はみんないつも通りに……完全には無理だけど、それでもいつも通りに過ごそうとしてたの。過ごそうと、頑張ってたの」

「……」

「でも無理だったの。当たり前だよね……大好きな家族が、一人居なくなっちゃったんだもん」

『死んだ、というわけじゃないのだから』

「そう、だね……そうだけど……」

思いのほか冷たい声が出た。それを感じ取ったのか少女は少し驚くように体を震わせる

(嫉妬の次は八つ当たりか？情けないにもほどがあるな………本当に)

そんな自分を情けなく思うと同時に違和感を感じる……俺はこんな風に感情を出す様な性格だっただろうか、と

自分自身に戸惑っていると、少女が再び喋りだす。先程よりゆっくりと

「…それでも、そこ居るのが当たり前で、居て欲しいと思う大切な人……そんな人と喋れないのはとても悲しいの。抱きついたりできないのは、とても、寂しいの……」

最後の方は絞り出す様な声で。少女は手で撫でていた“俺”を顔の近くに持つてくると

「ギン君も…大切な人が喋れなかったり、触れることができなくなったりしたら……寂しいと思わない？」

「……」

そう、語りかけてくる少女に対して俺は何も答えられない

大切だった人は、もう居ない。大切だと思っていた人も、もう居ない。それに対して俺は悲しいと、寂しいと思ったことはあるだろうか？

ある、とは思う。でも今はもう

(兄ちゃん！)

久しぶりに思い出すその声。それはとても懐かしくて、とても

「ギン君？」

『…そうだな、きっと……』

そうだと、思う

それから少女は暫く喋り続けた。母と、姉と段々会話する機会が無くなっていった事。兄の態度が段々変わっていった事。家族の顔を見る事すら無くなっていった事。一人に、なった事

それは少女が受け入れるにはあまりにも辛い日常

「辛いのは、悲しいのはみんな同じ。だから我慢してたの。ほんとはお店のお手伝いとかしたかったけど、わたしが居ても邪魔になるだけだから」

撫でる手が止まる

「わたしにできるのは、手の掛らない様、誰にも迷惑かけないように、いい子でいる事」

それは少女の年齢からすればあまりにも大人びた 大人び過ぎた
考え方で

「それでもね。やっぱり辛くて」

手が震える

「どっつしても、悲しくて」

滴が落ちて、弾ける。銀色の球体が濡れて、光る

「どっしりよつもなく……寂しいの」

小さい、本当に小さい嗚咽が聞こえる。それは少女がするには悲しすぎる泣き方だった

「やっぱり、我慢、できないよ……辛くて、悲しくて……寂しいのはいやだよお……っ」

『……そうか』

やっと理解する。少女が俺を受け入れた理由

ただ、寂しかったのだろう

それは少女の年齢を考えれば仕方ない事だ

誰も居ない家で一人過ごす

誰とも会えない、誰とも喋る事は無い

そんな日々が嫌で、異端の得体の知れない俺を受け入れた……それは、藁

にも縋るといった気分だったのだろう

(だが、俺は藁にはなれない)

俺に縋らせる訳にはいかない。俺は遠くない日に、ここから居なくなる予定のモノだ

それに俺は藁ではない……少女がきつと求めている家族との平和な日々を壊す可能性のある爆弾

爆発すれば最後、少女が望むものは壊れて、無くなってしまうかもしれない。そんな事になれば少女がどれだけ

(いや、違う)

違う……そう、違う。俺は、俺が心配なのは、俺が嫌なのは

実際にそうなる事で、少女に嫌われる事。俺を見る、その優しい目が憎悪に染まる事に耐えられないだけ

ただ、俺が怖いだけ

現在時刻は正午過ぎ。あの後泣き止み、落ち着いた少女が恥ずかしげに謝ってきた直後の事

少女のお腹がくうーっと可愛らしくもよく響く音を立ててなっため、昼ご飯にしようとの事で公園を出ることになった

真っ直ぐ延びる道路、その脇にある歩道を真っ赤になりつつも歩きながら少女は目的地を目指している。俺はそんな彼女の胸ポケットに入れられているわけだが……

「うゝ……あつ　にやぶいつ!？」

ああまたか。ビターン、と痛そうな音と珍妙な悲鳴発しつつ少女が倒れる。これで通算5回目といった所か

これはもう運動神経が悪いというレベルでは無いような。そんな事を思いつつ、周囲の様子を伺う。レーダーによる探敵辺りに人が居ない事を確認してから人型に戻ると

「掴まれ」

そう言って少女に手を差し出す。少女はその手を暫くの間ぽけーっと見た後

「あ、ありがとう……」

そう言っ**て**ぶっつけて赤くな**った**顔を更**に**赤くしながら差し出した手を取る。恥**ず**かしいのは分かるが、我慢して**もら**うしかない

「ううー」

そう唸り**つつ**顔を擦**っ**ているが、括**つ**た髪**の**先**に**付いたゴミ**が**取れていない。溜息を吐き**つつ**それを摘み、たまたま近く**にあ**ったゴミ箱：ゴミ箱？**に**捨てる。ちなみにやけ**に**でかくて曜日**が**どうだの、分別**が**どうの**こ**うの**と**書いてあ**っ**た**が**それはスルー**し**た

「あ、ありがとうギン君」

どういた**し**まして。と言**う**代わり**に**手をひらひらさせ、そのままその手を少女へ**と**差し出**す**。暫く意味**が**解ら**な**かった**の**か、首を傾**げ**て見て**い**た**が**

「……え？ えええっ!？」

理解**し**た**の**か、再び顔を赤く**し**て驚いた声**を**出**す**

「「」でもしないと何時まで経っても目的地に付かないだろうからな。さっさと行くぞ」

「あう……え、えーっと、じゃあ……」

恐る恐るといった感じで手を重ねてくる少女。そのままゆっくり、できるだけしっかりと握り歩き出す

「わっ、わっ！ い、いきなり歩き出すとびっくりするの！-」

「そうか」

「むー！ ……でも、えへへ……」

顔を後に向けず歩き続ける俺と、後ろから少し嬉しそうな声を出しつつ付いてくる少女

相変わらず単純というのか、何というのか……

そのまま歩き始めて5分くらい経った。辺りの景色から今歩いているところはおそらく住宅街か

様々な家が立ち並んでいる景色はある意味壮観とでも言うのだろうか。よくもまあここまで密集するものだ。といった気持ちの方が大きい気もする

(…ん?)

ふと視線を感じ、辺りを確認…判明

主婦然とした女性達のグループ。恐らく立ち話でもしていたのだろうか？ それがこちらに視線を向けている

それはまるで微笑ましいものを見るような、そんな視線。「若いっていいわねー」なんて声も聞こえてくる

少女の手から伝わる体温が若干上昇、おそらくは恥ずかしいのだろう。とりあえず……

「……」

そのグループの方向を見る、戸惑う雰囲気が伝わる。目を細めこちらに向けていた視線が別方向へと散る

先程とは違い、こちらを見る事なくグループが縮こまってひそひそ喋っている。「最近の若い子って怖いよねー」なんて声が聞こえたが無視。そのままグループの横を通り過ぎて行く

「あ、ありがとなの……」

暫くした後、後ろの少女が何か言っていた気もするが、よく聞こえなかった。気がする。

「あ、ここだよ！」

更に歩くこと4分39秒29……無駄に細かく数えていた自分の頭を左右に軽く振ることです。まあともかくとして、少女の声が聞こえたので足を止め、その目的地を

「……………なんだここ？」

「あれ？ ギン君コンビニ知らないの？」

コンビニ？ ここがああコンビニ？

遠目に見ても分かる豊富な品揃え。雑誌、飲料水に弁当、後は文房具……は、まあ解るのだが。何か、見たことないような物が沢山ある様に見えるのだが……気のせいだろうか？

そう考えつつも店内に入ると来客を知らせるチャイムと同時に、やる気があるような無いような声で「いらっしやいませー」と声が聞こえる

「じゃあわたし選んでくるの。　ギン君も何か欲しい物あったら言
ってね」

お金は余裕あるから。と言って少女が歩いて　行く途中こけそう
になりつつ食料品が置いてあるコーナーに消える

(……まあ、大丈夫だろ)

そう思うことにして、改めて辺りを見回す……やはり前に見た時と
大分変わっている気がする

少なくとも、俺が今立っている場所に置いてある、これは……裏面
を見ると、トレーディングカードゲームと小さく書いてある。何だ
それは…交換するためのカード？　こういった物はおいてなかった
気がするのだが

(ふむ、まあ世界が違うからそういう事もあるか)

そう結論付け、自分用の食糧を探すために先程少女が消えたコーナ

ーに足を向ける

朝は一人分しか無かった為遠慮したが、食べることにより多少なりともエネルギーの足しにはできる。まあ、食べないよりはマシ、程度ではあるが

まず目に映るのはオニギリなどの軽食、横に視線をずらせば各種弁当。更に横にはデザート…デザート？

(ケーキもあるのか…？この世界のコンビニは品揃え豊富だな)

感心しつつも目の前に置かれた苺のショートケーキをじつと見る。

正直甘い物は嫌いではないが…値段を見る。二つ入りで約350円か

量、質に対して値段が釣り合っているのかいないのか。それすら解らないがとりあえずそれを手に取る。それと同時に少女が俺の姿を見つ駆け寄って　こけそうになるので支える

「あう……重ね重ねありがとなの…」

人目がある所なので余計に恥ずかしいのか、微妙におかしいお礼をしてくるので、さっさと離れる

「どつも。ところでコレが欲しいのだが」

「ほえ？ あ、ショートケーキ！」

目がキラキラ光っているが……やはり少女も世の例に漏れず甘い物が好きなのだろう。まあ予想はできていたので、予め用意していた答えを返す

「俺は一つで十分だ。残りはお前が食うと良い」

「えっ！ ほ、ほんとに？」

無言で頷くと嬉しそうな顔をする少女　　なのだが、すぐ顔を不機嫌そうに膨らませる

「…………むっ」

「…………」

原因はなんとなく解る。名前で呼ばないのが不服なのだろう……これについては、朝食の席にて散々こねた際に言っても無駄だと理解しただろう。と勝手に解決したことにする

「お前はそれだけでいいのか？」

「え？ う、うん。あんまりお腹空いてないから」

少女の手に握られているのはサンドイッチ。野菜とチーズが挟んである簡素な物……値段を確認、125円か

お腹が空いていないというのは嘘だろう。公園ではあれだけ豪快に……は違うか。盛大に？ まあはつきりと鳴っていたのだ。となると

(気分的な問題か？)

しかしここで問い詰める必要も無いし、ショートケーキを1個あげるから問題は……無いことはないか。栄養とか足りてるのだろうか
こいつ

少し気になったのでさり気なく、あくまで自分的にさり気なく聞いてみる

「そうか……好きなのか？」

「えっと、好きと言うより食べやすいの」

「……………毎日それなのか？」

「ううん。ちゃんと種類変えたりしてるの」

「……………夜は？」

「サンドイッチかな……………お腹減ってない時は何にも食べないで寝ちやうの」

栄養足りてないのではないか？ これは

盛大に溜息を吐きそうになったが、なんとか我慢した

昼ご飯を無事購入し、高町家に戻ってくる。その途中で少女の両親が経営しているというお店 翠屋 に案内してもらい、そのまま帰ってきた

「ギン君翠屋に入らなくてもよかったの？」

「まあ、何処にあるのか確認したかっただけ……だからな」

買ってきた昼ご飯をパクつきつつ、自然に返事してしまった自分に呆れ半分驚き半分といった気持ちになる

そっか。と言いつつ、早々に食べてしまったサンドイッチのゴミを捨てた後、ショートケーキを切り取り口に運ぶ少女。その顔が幸せそうに綻ぶ

「ん〜…美味しいの！でも、お母さんが作った方がもっと美味しいの……」

最初は嬉しそうに、最後は少し悲しげに感想を言う少女

その評価を聞いて少しだけ翠屋に入らなかった事を惜しく思ったが、とりあえずその気持ちは仕舞っておく

「お前の母親は料理が上手いのか？」

「うん！すっごく上手だよ……はふう」

思い出したのか、遠い目になりつつもふやける…いや、ふにゃける顔

「その割には、朝はここまでテンションが高くなかった様に感じたが」

「え？……えーっと、それは……」

ぼそぼそと呟く様に　いや、言葉にならない言葉を発する少女。
……朝との相違点を確認　終了

1・母の手作りご飯と、コンビニ弁当)というよりは軽食)

2・一緒に食事を食べる人の有無

3・デザートの有無

4・寝起きでテンション低かった

(……まあ、こいつの性格からして2が妥当か)

正確には食事の際の同席者及び会話の有無、と言った方がいいのだからだろうか

俺はもう慣れているが、一人で食べるという行為は多少なりとも寂しいものがある。目の前の少女なら尚の事だろう……だから、今の生活が例え仮初の物だとしても、嬉しいのだろう

そんな風に思いつつも、ショートケーキを咀嚼しつつ、思い出す一つの事

「ああ、後でPCを借りたいのだが大丈夫か？」

「ほえ？ う、うん。大丈夫だけど、何か調べるの？」

ちよつとな。と適当に返事をしつつショートケーキを食べ終わる。量産品であるうそれは、不味くはなかったとだけ言っておく

程なくして少女も食べ終わり、現在は少女の部屋で俺はPCを操作、少女は机に向かっている。おそらくは勉強か？

PCの画面が立ち上がるのを眺めつつ、調べる候補を改めて頭に思い浮かべ……どうでもいいがやけに立ち上がり早い

いや、俺が知っているそれに比べれば月とスッポンレベルくらいの差があるものの、割と色々な世界を旅した俺から見るとかなり早い部類に見えた

この世界の化学技術は結構発展してるのだろうか。そんな事を考えつつゲストのアカウントでログイン……デスクトップが表示されるインターネットに繋がっていることを確認し、目的の事柄についての検索を開始した

(まあ、こんなものか)

約20分後に検索を終了。PCをシャットダウンしつつ、少女の様子を見る　まだ勉強していたのか

集中しているのだろうか。邪魔をしては悪いので音を立てない様に部屋を出て階段を下り、リビングへと入る

とりあえず少女に飲み物でも持っていこうか？しかし人の家を勝手に探るのも……だが少女は大丈夫だよ〜って言っていたし

そうだな、とりあえずこのオレンジジュースでも持って　待てい

ああ、とりあえず待とうか俺、落ち着こう。深呼吸だ　よし、落ち着いた

(何を馴染んでるんだ俺はっ！！！)

声に出さず叫ぶ。何だ今の一連の思考は。すっかり少女の家族とまでは行かなくとも、同居人的な感じかどうかそうなんというかどうと言えはいいのか

再びこんがらがってきた頭を振り思考をリセット……完了。大丈夫

か？問題ない

微妙に大丈夫では無い気がしたが、それはこの際無視する

誰かと……他人と一緒に居るのは苦手だ。というより怖い。俺と言
う存在がどういうモノなのか、知れば恐怖か拒絶か

だが、俺と言う存在の、ほんの一端だけとはいえ、知っても受け入
れてくれる 正しくは絶えるのだろうか 少女

ああ、解ってはいるんだ

ここは、居心地がいいのだ

久しぶりの、誰かとの食事

久しぶりの、誰かとのまともな会話

久しぶりの、誰かと過ごす日は

頭を振る。これ以上考えるなと強く言い聞かせる

どうせ長くても数日の日常。馴れてしまえば辛くなるのは自分だと

そう考えながらも冷蔵庫を背に、思わず座り込んでしまう

「ああ……くそっ」

悪態が声となって出るが、気にする余裕もない

頭を掻き篁り、俯き、呟く

「俺はこんなにも……弱かったのか」

出てきた声は、自分では信じられないほど掠れて、聞こえた

第五話 『昔の記憶と家庭の事情』後編』（後書き）

この前後で皆様の主人公へのイメージが変わるのではないかと思います…多分

さて、そろそろ始まりの章も終わりを迎え……おそらく、終わりを迎えます。ええ

予定は未定というよりは不安定なれど、最後までしっかりと書いていきたいと思しますので、よろしく願います

感想、ご意見お待ちしております。それではまた次回で

第六話 『善行と偽善と』金髪少女・前編』（前書き）

私はただの子供ではない。それは私が一番分かっていることだ

だから私は我儘を言わないようにしている。それが今の私にできる事の一つ

パパに言われるままに、習い事をした。でも言いなりだったと言うわけではない

それらは将来、自分のためになると……そう思ったから積極的にした

むやみに外に出ると、色んな人に迷惑がかかることを。そして色々な面倒事が起こる事を知っている。だから私は我慢する

時折、同じくらいの年代の子と一緒に走っていくのが見える時がある。でも私はそれを見て羨ましいとは思わない。多分、私がそこに交じっても面白くないだろうし、向こうもそれは同じだろう

我儘なんて言わない。だけど、一つだけ我慢できないことがある

何度も、何度も本気で嫌がっても、パパは諦めず何度も言うてくる

ついには向こうだけで話を進めている。そんな事を聞いてしまった時、私は初めて外に飛び出した……いつも傍にいる執事に酷い事をして

ごめんね 声に出さず謝って私は逃げ出す。本当に嫌なんだと、訴えるように

(その結果が、これかぁ……)

現在私は黒服の二人組に追われている……とても分かり易い状況だ
おそらくは私を誘拐でもして、パパになんらかの要求でもするのだ
ろう

ちゃんと予想できていたのに、いざとなると混乱してしまって、道の確認すら忘れて闇雲に逃げてしまう。勿論逃げ切れるわけもなく、何処かの路地裏に追い詰められてしまう

もう、逃げられない

そんな考えが私に恐怖を思い出させる……でも醜態を晒すわけには
いかない

私はアリサ・バニングス。私にだらしなくて、無茶苦茶な事を言う
てくることもあるけど

とても誇りに思える両親の、パパとママの娘なのだから

でも、これだけは許してほしい

今から零れ落ちる、言葉だけは、どうか……

「誰か……」

助けて

声が届いたのか、そうでないのか

私の目の前、黒服の一人の上に

男の子が、降って来た

第六話 『善行と偽善と』金髪少女・前編』

「……………」

現在俺は駅前商店街、その一角に存在する喫茶『翠屋』を見ている

中の様子を詳しく伺うことはできないが、時折少女の家族と思わしき人影が見える……というよりまだ

(どちらが母親だ?)

おそらく家族だと思われる候補は二人。一人は黒の いや、あれは黒に近い茶か? 長い髪を一本の三つ編みにして垂らし、その根本をリボンで結んでいる……三つ編みおさげとでも言えばいいのか

そんな風体の、少女の兄に似た雰囲気を持つ女性。まだ若い…はつきりとは解らないが、おそらく年齢は10代か

視線を横にずらす。候補のもう一人、こちらは少女と同じく栗色の髪の長髪と紫の瞳が特徴的な、まるで少女をそのまま大きくしたかのような容姿を持つ女性

こちらも若い、前者よりも年上に見える事からどちらかと言えばこちらが母親だと

(……だが、若すぎないか?)

そう、遠目に見ても若い……というか若すぎる。見た目は20代に見えないことも無いが、10代と言われても違和感が無い気がする

暫くじっと見ていたが、この場で判断する事を諦める。そもそもどちらが母親だろうがこの場で無理に知る必要はない……問題は別にある

(相当疲れてるな。あれは)

全体的にどことなく動きが鈍いのもあるが、見ているとおさげの女性にふらついたりと危なげな場面も見られる

現在の時間は2時過ぎ。ピーク時は過ぎたのかどうかは分からないが、それでも時期故か忙しそうに動いているおさげの女性

もう一人、栗色の髪の女性は基本奥の方に居るのか、あまり姿を見る機会はない……おそらくは調理担当なのだろう。だが時々窓から見える姿は同じく忙しそうだった

あまりのんびりする時間は無いか。その結論を出すと立っていたビルの屋上、そこにあるフェンスの上から跳ぶ

眼下に広がる海鳴市の街並み。都会とまではいかない華やかさと、田舎程ではない自然、その両方が在る景色。少し視線をずらせば見

えるのは蒼く輝く海　美しいと、本心から思う

暫くその景色に見惚れながら、重力に身を任せて落ちていく

地上まで20m……15、14、13　そろそろか。視線の先に
見えるのは所謂路地裏いわけと呼ばれる場所

近づいてきた地上に叩きつけられる訳にもいかないので、空中を蹴り跳びながら勢いを殺し、着地

「ぐげえっ!?!」

「なっ!?!」

「…えっ!?!」

少女から魔力を貰い機能回復に努めたおかげで、全機能の約2割程度回復している。2割と表すとまだまだな気もするが、最初が酷かったのだから仕方ない

だがまあ、先程みたいな無駄にエネルギーを消費する行為は避けるべきか。色々あってむしゃくしゃしてたため、思わず現実逃避を兼ねてやってしまったが

(……………ふむ)

人目がなるべく無い場所を事前に確認してから飛び降りたため問題ないと思うが、それでも念のため辺りを確認　問題無しと判断。
おそらく飛び降り中の目撃者は無い

まあ見られたとしても大抵は錯覚だと思うか、周りに言っても信じて貰えないかのどちらかなのであまり気にすることでもない

例え目の前に見知らぬ金髪少女と、それを連れ去ろうとしている黒いスーツを着た如何いかにも怪しげな人物がいようと、だ

どうせ子供が何を言っても大人は信じないはしない。それが「人が空から降ってきた」という突拍子とつぽしも無い内容なら尚更の事

もう一方の黒スーツはそもそも、人前に堂々と出れるような人種では無いだろうし、その道のプロなら俺みたいな異常に関わろうとはしないだろう

それにしても何時までこちらを見ているのだろうか。金髪は金髪で、連れ去られるのが嫌ならば今の内にさっさと逃げれば良いものを

黒スーツも今ならば、金髪は茫然ぼうぜんとしているのだから絶好の機会だろうに……いや、俺を見ているのではなく……俺の足元？

ああ、先程の声は連れ去ろうとしていた一人の上に着地したからか。運が悪かったなこいつ。一応すまんと謝っておこう……これでよかったか？

手で十字を切り軽く祈るような仕草をした後、念のため意識を刈り取る為に蹴りつけ、頭の中から足元の黒スーツ2号の存在を消去

(さて、次は……)

未だ茫然とこちらを見る黒スーツと金髪の視線をザツクリ無視して、次の目的地に行くため歩き出す。時間的にはまだ余裕があるだろうが、あまり遅くなるわけにも行かない

その後にも一応やろうと思ってる事があるので、時間に余裕があることに越したことは無い

「だからそこ、どいてくれないか？」

「……見られたからには、このまま帰すわけにはいかん」

運が悪かったな　と捻りも何もないお決まりのセリフを言いつつ懐から取り出す…拳銃か。この世界にもあつたんだな。おお、ちゃんとサイレンサーが付いてるなどの感想が湧いて出る

それにしても目撃者の消去を躊躇ためらわずにやろうとする辺り、確かにその道のプロなのだろうが……世の中には放っておいた方がいい場合もある事を知らないのだろうか

「ちょ、ちょっと！ そいつは関係ないでしょっ！」

「……」

金髪が黒スーツに向かってまたもやお決まりのセリフを吐いているが、そんな事黒スーツが聞くはずもなく　　とうかさっさと逃げると言いたい

面倒事に巻き込まれたか？ いや、まだ諦めない。黒スーツがこちらに銃を向けようと　　しているその横を歩いて通り過ぎる

「ちょ…あんだ危な　　」

「…逃げられるとでも　　」

二人の人間が何か言っている。それとほぼ同時に金属音、横目で確認。拳銃がこちらへと向けられ、引き金を引くために指を

その様子を確認しつつ、歩いている方向にある手頃なサイズの石を左足の踵で左後方　　黒スーツへ向かって蹴りあげる。蹴った足はそのままに身体を後方に倒していき、その勢いに乗せるように右足を使って跳ぶ

「づうっ！ き、きさ　　！？」

拳銃を持っていた手に直撃、凶器を落としながらこちらを見る黒ス
ーツ。サングラスの向こう 見え難いが、俺を見て驚愕に染まる
目が見えた。逆さまの俺の目と目が合い

「ぐあ……っ」

体を捻りつつ放った左足が、相手の首に吸い込まれる様に命中。キ
レイに意識を刈り取られ、そのまま崩れ落ちる男

「……っ」

一方俺は蹴った反動を利用して、無事地面に着地する事に成功する
そのまま手足をぶらぶらさせ、最後に首を回して状態を確認 う
ん、問題ない……この程度の運動ならもう大丈夫か

しかし気分が優れなかったとはいえ確認不足が仇となった。今度か
らはちゃんと着地点の確認を怠らない様にしないと。飛び降り
る度に厄介事に巻き込まれては堪ったもんじゃない

そんな事を考えつつも、今度こそ目的地に向かって歩き出す。時間
を喰ってしまった ああいや、それでもないか？ とにかく目指
すは海鳴大学病院。少女の話によればそこに

「……はっ！？　ちょ、ちょっとあんた、待ちなさいよ！」

まだ居たのか？　まあいいか。邪魔敵対してきた黒スーティンズ（複数形）を倒す行為が結果的に金髪を助ける結果となっただし、これで無事逃げる事ができるだろう

（…ああ、こついつのを一石二鳥と言ったりするのか）

未だにぎゃあぎゃあ騒いでいる少女を無視しつつも、無駄に納得をしながら歩く

さて、ここからなら徒歩何分くらいだろうか？　頭の中に地図を思い浮かべ海鳴大学病院までかかる時間を

「待ちなさいってえ……言ってるでしょうがあああああ……！」

首を左に傾けると、その横を結構なスピードで通り過ぎる小さな物体……石か？　危ないな、あの大きさとはいえ、人に当たると下手すれば血が出るぞ

「避けるんじゃないわよ！　というか無視するなあ……こつち向きなさいよっ……！」

「せめて要求は一つに絞ろう。話はそれからだ」

「えっ？　ちょ、ちょっと待ってなさい。今考え……って逃げようとするな！」

そう言っただけで誤魔化したと思ったのだが、金髪も思ったよりしつこいな。面倒だが、ここで無視する　石を投げつけられるなんてループはごめんだ

「わかった解った。逃げはしない、歩いているだけだから気にするな」

「え？……えっ！？　ちょ、まっ、今の違う、今のはなしよ！……って、しかもそれ単なる屁理屈じゃない！」

よく屁理屈なんて言葉知ってたな。そんな風に感心しつつも俺の足は止まらず、そのまま金髪を置き去りに……いや、足音が近づいてくる。追っかけて来たのか？　面倒な……

「……分かったわ。歩いててもいいから質問に答えなさい」

「一つだけのはずだったが」

「要求を一つに絞ろう」よ。一つ“だけ”とは言っていなかったはずだけど？」

「……………」

睨むような視線だけそちらを向けると、得意げに「ふふんっ！」と胸を反らしながら誇る？金髪娘の姿が

しかし、俺の目付きの悪さは自分でも解っている。それを受けて物怖じしないこいつは相当胆が据わってるのか、怖いもの知らずなのか
やれやれ、なんでこの世界の子供は面倒な奴ばかりなんだ……普通あんなもの見たら近づかず、逃げるなり避けるなりするのが常識だろう

俺は何か間違った事を言っているだろうか？

そんな事を考えていると後ろから何か気付いたような「あっ」という声が聞こえた

「そ、そういえば……えと、その……………」

先程とは打って変わってハッキリしない物言い。まあ何を言いたいのかは大体予想が付くが

「た……た、助けて、くれてあ、あり………ありがとう」

最後の方はかなり、というか聞こえるか聞こえないかの音量だったが、無駄に高性能は聴覚はそれを聞き取る。聞き取ってしまう

「進行方向に邪魔なのが居て、それを蹴り飛ばしただけで礼を言われてもな」

「……そういう事は真実でも言わずに、黙って礼を受け取るのが社交辞令だと思っわよ……」

どこか呆れたような声を聴きつつ歩いていく。そろそろ路地裏を抜け表通りに出るのか、人がちらほら見え始める

「俺に社交辞令を期待されても」

「…ええ、そうだったわ。そういうのができるなら最初から無視したりしないわよね……はあ」

溜息を吐かれてもな。金髪から見えない様に苦笑する

「まあいいわ。それより質問に答えなさい！　まず一つ目、あなた

何者よ？」

「拒否権は「無いわよ」……無職で浮浪者だったが最近ヒモになった」

「うっわ最悪ねそれ……で、本当は？」

「自分でも解らん」

「何それ？ そんなに本当の事言いたくないの？」

それ以上は喋らず歩く。喋っている間に路地裏を抜けたようだ

人や自転車、車等が行き交う交差点。俺の目の前の信号が赤となったので立ち止まると、金髪も隣で立ち止まる

「……ならいいわ。次、二つ目。なんで空から落ちてきたのよ？」

「雨や雪、槍だつて普通に降るんだ。人間が一人二人落ちたところで別に不思議じゃないだろ」

「雨や雪と一緒にするなっ！ 普通槍や人間は降ってきたりしない

わよー！」

「じゃあ人間じゃなかったんだろ」

「はあ？ …… あんた、真面目に答える気ある？」

ある意味では真面目に答えたんだがな。さっきのは

「俺が知るか」

「あんた以外知ってるわけないでしょうが！」

「我儘わがままだなあ」

「~~~~~っ！！！！」

さすがに往来の場で叫ぶのはマズイと思ったのか、必死に我慢している様子が見える。今更な気もするがな…… 信号が青になったし渡るか

金髪は冗談と取ったようだが、文字通り槍が降ってくるのは見た事がある

何百、何千という数の槍が降ってくる光景は正直ぞつとするものではあるが、同時に一種の芸術性を感じるものがあつた……あれは壮観だつたな

「……ふう、よし。三つ目の質問よ。あんた何処に向かつてるの？」

まだ質問続ける気なのか……というか、そんなこと聞いてどうするつもりなんだか。まあ隠すような事でもない、はずなので普通に答える

「海鳴大学病院」

「へえ？ どんな用があるのよ。見たところ怪我なんてしてない様に見えるけど」

「そう見えるだけで、俺の体はポトポトホロホロなんだ」

「へえ、ぜんっぜんそうは見えないけど？ というか体ぼろぼろの奴があんなオーバーヘッドキックみたいなのでできるかあ！」

「火事場の馬鹿力って奴があるだろ。多分あれだ」

「多分って何よ多分ってっ！ ……というかあんたぼろぼろって言う時発音悪かったけど外人？」

「超局所的な外人も居たもんだな」

「……ああ言えばこう言うってこういう事なのかしらね……」

知らんよ。何でかボドボドって言わなければならぬ気がしたただ。そんな事を思いつつ横を見ると微妙に疲れた様子の金髪

(疲れるなら喋らなければいいと思うんだが……まあ、原因の俺が言うのもあれだな)

そんな意味のあるのかなのか解らない問答を続けつつ、目的地に向かって俺達は歩いていく

こんなに騒がしいのはいつ以来だろうか

さて、目的地に着いた訳だが……ここが海鳴大学病院か。高町家を始め

「海鳴市に住む者の大半、更には市外からも掛かり付けにする者も多く、丁寧なサービスや対応、整った環境など、様々な部分にて優良だと評価されている場所……それがここ、海鳴大学病院よ」

「見事な解説だことで」

「ふんつ。こんなの海鳴に住む人にとっては常識よ」

そうかもしれないが、それを小さい子供がそこまで詳しく言えるってのは中々無いと思うんだが。隣を車椅子に乗って通り過ぎて行った爺さんびつくりしていたぞ。後それを押してた看護婦も

まあいいか。ここで立ち止まっただけだしさっそく病院に向かって歩き出す

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさいよ」

まだ付いて来るのか……。何度目になるか分からないが、そんな思いを持ちつつも中に入ると清潔な空間と僅かな消毒液の匂いが迎えてくれる

ここまで大きい病院に入るのは初めてかも知れない　そんな事を
思い、辺りを見渡したくなる欲求を抑え真っ直ぐ受付へと向かう

「すみません、少しいいでしょうか」

「…はい、どうぞ。本日は海鳴大学病院へどのようなご用件でし
ょうか」

一瞬怪訝な顔　おそらくは俺が子供だからだろう　をしたもの
の、営業スマイルを浮かべ受付が用件を聞いてくる

「こちらに高町士郎という男性が入院していると思うのですが、何
号室が分かりますか？」

「……え？」

「……失礼ですが、高町様へどのようなご用件でしょうか」

「お見舞いです」

「高町様とどのような関係でしょうか？」

「私の父の知り合いです。前々からお世話になってたとの事で、お見舞いに行っておけと常々言われてまして。ああ、それと最近高町さんのご息女とお友達になりました、この機会に一度挨拶でもしておこうかと」

ぺらぺらと嘘の中に真実？を織り交せて喋る。誰かが言っていた気がするが、上手い嘘というのは、何割かの真実を混ぜて言うモノだとかなんとか

ちなみに金髪は最初に何か驚いた様子ではあったが、今は喋る俺を見て啞然としている

「有り得ない……」とか言っているが……まあ先程までの対応を顧みれば分からないでもないが、失礼だと思っぞ

「……お客様のお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

……あ

「ちょっと、どうしたのよ？」

急に黙った俺を不自然に思ったのか、後ろから金髪が突っついてくる。まあ不自然に思ってるのは受付もだろうが

しかし不味いな。名前なんて考えてなかったぞ……さすがに銀だけで通じないだろうし、ましてや高町なんて名乗ったら先程までの説明に矛盾が生じる

やはり昔見て覚えただけの対応の仕方だと穴があるな……その事実を確認しつつも何か無いかと考えるが思い浮かばない

適当な名前で誤魔化すか？　しかし名前なんてどんなのが普通なのか知らないし解らない。適当に言ったのが珍妙な名前だったとしたら……

いや、そもそもこれだけセキュリティの整った所なんだ。名前から間柄等を調べる事もできるのでは

そんなどこまで本当か解らない様な事まで考える。簡単に言えば焦っている。しまったな、どうすれば

「……お客さ」

「バニングスよ」

「……は？」

思わず間抜けな声が出てしまった。いや、意外なところから助け舟が来たというか、なんとというか。思わず金髪、もといバニングスと名

乗った娘を見てしまう

「私はアリサ・バニングス。で、こっちが……ほらっ」

「あ、ああ。ギン・バニングスだ」

つい促されるままに答えてしまう。だが効果は凄まじかった

「バニングス……！ し、失礼しました」

「いいえ、非があるのはこっちよ。私と違ってこいつ、変なところで遠慮深いというか……まあ誤解させるような態度取ってごめんなさい」

「い、いえ、滅相もございません……ええと、高町士郎様ですね。お調べ致しますので、あちらに御掛けして少々お待ちください」

「分かったわ。ほら、行くわよ」

「……ああ」

案内されて金髪　アリサ・バニングス　と一緒に待合用のソファに座り、息を吐く。無駄に疲れたが……それはそうと

ちらりと目で横を見る

……癩しやくだが礼を言わないといけないだろう。というか、さっきから横でオーラ出ているからな。「ほら、さっさとお礼言いなさいよ」
的な

「すまない、助かった」

「心が籠こもってないし、何より土下座どげざが足りないわ」

「調子のんなよテメエ」

「冗談よ。ふふっ」

さっきまでの仕返し、という事だろうか。思わず別の“外交用”の言葉使いが出てしまったが、金髪は気にした様子は無い。間違いない、こいつ大物だ。色んな意味で

「……何故、助けた？」

「私の質問には真面目に答えなかったのに私には聞いてくるわけ？」

「ならいい」

「冗談よ……さっきの借り、返しただけよ」

さっきの……？ ああ、路地裏でのアレか。説明したはずだがな…

「律儀な事で」

「ふんっ……まあ、それもあるけど。高町って言ったわよね？ あんたが会いたい人の名前」

そういえば、先のやり取りで反応してたな……ということは

「知ってるのか？」

「私は直接は知らないわ。でもあんたがさっき言ってた嘘がそれよ」

「父親の、知り合いか。しかし、嘘だと解ってたのか」

「まあ、怪しかったけど最後のアレが無ければ確信はしなかったでしょうね」

ニヤニヤとしながら「まだまだね」などと言ってくる金髪。何がまだまだなのかは知らないが

「仕方がないだろう。ああいった嘘を吐くのは初めてなんだ」

「初めてでアレ……？」

あんた、いいペテン師になれるわよなんて言ってくるが、俺はそんなものなるつもりは無い。まあそれはいい

「だが、それなら判る筈だがな。俺がどれだけ胡散臭うさんくさいいか」

なのに何故助けるような真似をした？ と視線で問いかける

その視線を受け 込められた意味を理解したのか 金髪娘は横に流れた髪を手で後ろへと流すと、こちらを向き口を開く

「そうね。まあ、女の勘って所ね」

「ハッ」

「……助けて貰ってその態度取れるあんたも相当なもんよね……ま、それは私もか」

そう呟いて正面を向き、遠くを見るような、そんな目をしつつ

「まあ、私も気になったのよ」

そう、言ってくる

「それならまだ女の勘……ハッ。の方がマトモな答えだった気がするハッ」

「喧嘩売ってるの？ 喧嘩売ってるのよねあんた」

至近距離で見つめあう。いや、睨み合う俺と金髪。その空気の悪さに周りに座ってる客が引いた 気がする

「……はあ。まあでも、さっきのが本心よ。自分の親がお世話になった人なら気になっても当然でしょ？」

「……そうだとしたら尚更だな。世話になった人に胡散臭い奴を会わせようとするか？」

「ふん……確かに胡散臭いし、愛想は無いし、いい加減だし、腹立つし」

つらつらと罵詈雑言を並べる金髪。よくそこまで罵倒の言葉が湧いて出るもんだ

半分程聞き流しつつ正面に見える景色　ガラス越しの手入れされた自然を眺める

「ちょっと、聞いてるの？」

「ああ聞いている。枕はやっぱり低反発だな」

「……ええ、判ってたわ。あんたがそういう奴だったことは」

「理解してくれる人が居て嬉しい限りだ」

これはある意味本心。まあ俺の实体を知れば金髪でも無理だろうが

「バニングス様。高町士郎様の部屋が判りました。こちらになります」

そう言つて紙を差し出してくる看護婦、もとい受付。最近は口伝じやないのか？ と思いつつも受け取る

……ああ、全体見取り図に印付けてくれるのか。なるほど、これは判りやすい

「有難うございます」

礼を言いつつ立ち上がり、さっそく向かおうと歩き出し

「例え胡散臭くても、愛想悪くても、いい加減でも、腹が立つ性格でも」

金髪が何かを喋っているが、あまり気に留めず歩いていく

「それでも 悪い奴じゃないってことくらい判るわよ」

足が止まる。口元に皮肉気な笑みが浮かび、そのまま振り返ると

「お前、馬鹿だろ」

と、毒を吐く。それを

「ええそつね。私も今気付いたわ」

何故か、それを笑いながら受け取る金髪

ふん。やっぱり馬鹿だなこいつ。相変わらず毒を吐く俺

今度こそ歩いていく。あまりこの雰囲気は得意ではない……………ああ、
本当に馬鹿だな

（俺が）

こつこつ事しか言えない。素直に受け取れない

どうしても警戒してしまう、臆病な、俺が

第六話 『善行と偽善と』金髪少女・前編』 (後書き)

後編へ、続きます

第七話 『善行と偽善と』金髪少女・後編』

高町士郎の病室、その場所に印が書かれた見取り図の、おそらくコピーを見ながら歩くこと5〜6分

俺は目的の部屋のドア前に付いた。全体見取り図があるおかげで迷うことも無く、正直凄く助かった

(……金髪は帰ったか)

付いて来なかったという事はそういう事なのだろう。まあ借りは返したと言っていたし当たり前か。俺と一緒に居ても面白くないだろうし

……余計な事を考えた。さて、ご対面といこうか

静かな音を立てて扉をスライドさせ、室内に入る。簡素ながら清潔な造りの室内には、カーテンが引かれたベッドと、逆にカーテンが開かれた窓

僅かな駆動音、これはエアコンだろうか。室内は暖かくも無く寒くも無い、そんな空気に包まれている

入口の近くにある棚の上には花瓶が置かれ、その中に活けられた花

はまだ新しい。おそらくはこまめに見舞いに来ているのだろう

静かに扉を閉め、ベッドへと近づいていく。静かな寝息が聞こえる

……

「失礼」

聞こえてないだろうが、一応そう断っておいてからカーテンを引く

ベッドに横たわっている男性の姿が見えた

年齢は……解らん。若々しい外見は20代にも見えるし、どこことなく落ち着いた雰囲気は30代にも見える。あの（おそらくは）母親もそうだが、どうなってるんだろつな高町家は。まさか不老なのだろうか？

つまらない事を考えた頭をリセット、気分を落ち着かせ、左手で男性の体に触れる

（解析機能スキャン 正常稼働確認。これより男性、高町士郎の身体情報データの記録を開始する）

途端、アタマに流れてくるのは膨大なデータ。高町士郎という人物の情報。それを全て記録、整理して必要な情報を割り出していく

（ 終了、全行程異常無し。男性への影響も皆無。解析結果……

体に異常は見られず。再度解析開始、並びに並行しての比較作業開始)

再び解析しつつも、別の男性、おそらくは同じくらいの年代である人物の正常時のデータと、高町士郎のデータの比較も開始する

勿論、比べるまでも無く骨格や筋肉の付き方等、違うのは当たり前だが俺が知りたいのはそういう事ではない

高町士郎を解析したが、目に付くような異常は見られなかった、と思う。だが異常がないならばもう起きていていいはずだ

だが彼はまだ目を覚まさない。それならば別のどこか、一見では判らないようなナニカが

(……………あつた)

あつた、確かにあつた。脳の裏側。おそらくはこの世界の医療技術では見つけられなかった部分。そこにある小さな、小さな傷……………とも呼べないようなナニカ

これが原因とは限らない。まだ別の、俺にも解らない何かかも知れないが。だがもし、これが原因だとすれば

(こんな事で、人は目を覚ませなくなる……………なんて脆い)

俺みたいなモノと比べるのは間違っていると解ってはいるが……それでも、どうしてもそう思ってしまう

しかし、困ったことになった。ここまでデリケートな部分に原因があったとは

（これは、俺の力だと……リスクが高いか）

俺が使えるのは治癒ではない。例えるなら……そう、生命力の直接照射とでも言うのか

簡単に言えば出力が強すぎる。まだ別の所ならまだしも、脳みみたいなデリケートな部分だとどんな影響があるか判ったものではない

こついう場合は魔導師が使う治癒の方が、調整しやすい分適任だろう

残念ながら基本的に俺は、“俺一人”では魔法を使うことはできない

俺は使われるモノ。魔法という技術を使うには魔導師という担い手が必要になる。まあ俺の場合は別の理由もあり、一人では魔法が使えないのだが……

（魔導師 か）

俺が知る限り適任が一人、だがそれでは意味が無い

それでは本末転倒もいいところだ……いや、ミイラ取りがミイラになる、だろつか？ 上手い例えが見つからないが、言葉遊びしている場合でも

「あんだ、何してんの？」

「！」

そんな声が聞こえた。いつの間にか金髪がこの部屋に入ってきていたらしい。やれやれ、作業に集中しすぎて気づけなかったか？

迂闊だった そう思いつつ機能停止。それと同時に淡く白銀に光っていた目が元の鈍い銀色に戻る

背を向けている形なので、金髪には見えていないだろう

「いや……特には何も」

「ふーん？ 変なの……あ、はい、これ」

そう言って金髪が何かを手渡してくる。なんだこれは……って

「いいのか、これは？」

「権力つて有っても面倒なだけだと思ってたけど、今日初めて便利
つて思えたわ」

質問の答えになってないような答え。今俺の手元にあるのは資料
高町士郎のカルテ

「まあ見てもいいと言っなら見るか」

「そうそう、人の好意は素直に受け取っておくものよ」

深く突っ込むのも面倒なので、色々とスルーしながら備え付けの椅
子に座り、カルテを

「……何故隣に来る」

「私もまだ見てないのよ」

ここに来るまでに見れた筈だが……ああ、うんもつ何でもいいさ

意識を無理矢理手元のカルテに向ける。一枚目、特に変わったこと

は書いてないか……二枚目、三枚目……は？

「うわぁ……なにこれ、何やったらこんな事になるの？」

俺の気持ちを金髪が代弁してくれた。三枚目に書かれていた事柄

高町士郎がここに入院した直後の記録

頭部裂傷多数、並びに骨にひび有り。首の骨にひび二ヶ所。除骨、肋骨の骨折多数、胸部から腹部にかけて深い切り傷、及び腹部に深い刺し傷が複数。右腕の至る所に切り傷、及び骨折。左腕の肘から先が複雑骨折。足に いや、もういい

「満身創痍って奴か」

「……そういうレベルなのかしら、これ」

確かに、普通ではない。この傷つき方も異常だが、何より

「何でこいつ生きてるんだ……？」

「ちよっ……さすがにその物言いは失礼よっ！ ……確かに私もそう思ったけど」

後半部分は囁くような声だったが、聞こえてるぞ。お前もそう思ってる時点で同罪だ

しかしあれだ。これを見てると本当にお前は人間かと言いたくなる。先程解析した結果だが、“高町士郎の身体に特に異常は見られない”と出た

つまり……俺から見る限り、脳の裏側のアレ以外、全部完治してるという事で

「人体の神秘、ここに極まれり……とでも言えればいいのか？」

啞然としながらもそう呟き、カルテの四枚目を見る　そこには、
7ヶ月後の高町士郎のデータ……ほぼ全快状態の

(うわーないわー)

思わず突っ込む、心の中で。横を見ると金髪もおそらく同じ感想を抱いているであろう顔をしている。こちらの視線に気づいたのか、顔を向けてくる金髪

目と目が合う。互いの視線だけで意思疎通をするかのように。同じタイミングでカルテに戻し、一言

「ありえん／ありえないわ」

今、この瞬間（だけ）俺と金髪は心から通じ合った
気がする

「で？」

「……何が、“で？”なんだ？」

あの後落ち着くまで10分程の時間を要したが、どうにか平静を取り戻した俺達は病院を出てすぐの場所に立っている

現時刻は16時前後。遠くの空は若干オレンジ色になっているのが見える……さすが季節が冬だけあって、日が落ちるのが早いな
高町士郎の現在の状況の確認と、その状況の原因であろうモノ。知りたかった情報は手に入ったものの、それを解決する手段が思い浮かばない

どうしたものか、と悩んでいると金髪が話しかけてきた。そんな現在の状況

「結局、何がしたかったのよ？ 嘘までついて高町さんに会って。おまけにカルテまで持ち出すし」

「カルテを持ち出したのはお前だった気がするが」

そうだったっけ？ なんてとぼける金髪はほっというて考える……

別の魔導師を探す？ そんなもの、この世界で見つかる可能性がどれだけあるというのか。そもそも居たとしても、探すのにどれだけ時間が掛るか分かったものではない

「ちょっと、質問に答えなさいよ。私に恩あるでしょうがっ！」

「名前の事は路地裏の借りを返すためとか言っただけだった？」

「名前の事じゃないわよ！ カルテの事よカ・ル・テ！」

「勝手に持ってきて恩きせるのか……？」

「何よー！ あんたも見てたじゃないっ！」

ぎゃあぎゃあとかましいが、適当にあしらいつつ考える……

駄目だ。どれも現実味を帯びない。最終手段として俺がやる、というはあるが……失敗した時は

(ギン君……)

憎しみに染まった少女の目、それが俺を貫く光景を幻視する。それだけで俺は……

「……？　ちよ、ちよっとあんた。なんて顔してんのよ！？」

「なんでも、ない」

「何でも無いって顔じゃないわよ……ってこら！　何処行くつもりよー！」

今は考えない。逃げだとは解っている。方法もおそらく一つしか無いという事も解っている。だから今は考えない

歩き出す……次の目的地に向かって。逃げるように、現実から目を逸らす様に

「もっつ！ いきなり歩き出さないでよ……」

「……お前、何時まで付いて来るきだ？」

「うっ……だ、だって」

何か事情でもあるのかもしれないが、俺には関係ないし、興味も無い。色々助けてもらった分もあるが、路地裏の事で借りは±0

(名前の事じゃないわよ！ カルテの事よカ・ル・テ！)

……チッ

「チッ」

「いきなり舌打ち!？」

ああ、どうやら思考だけでなく行動でも表れていたのか。面倒だ……感情制御も身体制御も上手くできない

「さっさと用件をどうぞ。俺はまだ忙しいんだ」

「う…えっと…その」

無駄に？もじもじしつつ金髪娘が放った言葉は、ある意味予想の範疇を越えていた…いや、予想より低すぎたのか？

「道に迷った…？」

「そ、そうよ！ 悪いの！？」

突っかかってくるのを適当に受け流しつつ理由を聞けば、どうやら普段は車で移動しているらしく歩いてこの辺りに来るのは初めての事
何でまたそんな無計画な行動を…見たところ、この金髪は頭は悪くなさそうだが

そんな思いが視線に表れていたのか、慌てたように金髪は喋りだす

「し、仕方ないじゃない！ パパが悪いのよ、パパが！」

「なんだ、ただの親子喧嘩か」

「ただのって何よ！ 私に無理矢理お見合いしろーって言うてくるのよ！？」

後はもう、壊れた機関銃のごとく喋り続ける金髪娘。まあそのほとんどは父親への悪口だが。しかし、お見合いねえ……

「お見合いとは何だ？」

「お見合いってのは結婚を希望する者同士が、実際に会って話をしたりするのよ。要は結婚を前提にデートしましょうってことよ、多分。あんた知らないの？」

だからそんなことをお前みたいな子供が知ってる方がうんぬん。しかし人間にはそういう風習があるのか……まあそれはどうでもいい

「ところでこれ、お前の知り合いか？」

「……お嬢様、お迎えに上がりました」

「げえ！？ さ、鮫島……？」

先程から2m程離れたところに止まったリムジン……リムジンだよな。実際に見たのは初めてなので確証は持てないが、その傍に佇んで油断なくこちらを見つつ……いや、睨みつつ話しかけてくる老紳士

(いや、執事か?)

確かあの服はそう呼ばれる類のものだった筈。しかし凄く睨んでるが……ああ、俺を警戒してるのか？

「……鮫島、こいつは一応、一応私の恩人だから」

そんな態度は失礼よ。なんて言ってるがお前が一番失礼だと言いたい。まあ面倒な事になるのが目に見えているので言いはしないが

「……失礼致しました。私^{わたくし}、バニングス家にお仕えしております、執事の鮫島と言います。鮫島とお呼びください」

「……銀、です」

丁寧な言葉使いに思わず名乗りつつ、鮫島という名前らしい執事を見る

白髪を丁寧にオールバックにしており、口元に蓄えられたお洒落なひげと相まってどこことなくダンディズムを感じる

目元に刻まれた皺等からそれなりの年なのだと思うが、その立ち姿に隙は無い。まあお嬢様の執事だ、只者ではないのだろう

そんな風に思っていると、金髪が小声で話しかけてくる

「へえ、ギンって本名だったのね」

「それがどうかしたか？」

別に〜と返しながらも執事の方へと向かう金髪

まあ本名と言ってもソレ、今日の朝に付けられた名前だがな
う思いつつ声に出さずくっくっくと笑う
そ

ああ、それにしてもやっと解放されるのか

「それにしても鮫島、よく抜け出せたわね？」

「お嬢様、さすがにワイヤーや虎ばさみ、トリモチはやり過ぎかと」

……何やってんだこいつ。まあこの執事の追跡を許さないため、もしくは逃げるための時間稼ぎだったのだろうか

しかしその結果が路地裏のアレとは……頭良いと思っていたが、本当は馬鹿なのかもしれない

「それではギン様、失礼致します」

「……まあ一応、お礼だけ言っとくわ」

そんな声を聴きながら歩いていき、二人の傍を通り過ぎ様

「それはどうも……今度は護衛の一人や二人、付けとくことをお勧めするぞ」

最後の方は金髪だけに聞こえるように、小声で忠告しておく。後ろから「う、うるさいわよ馬鹿っ！」なんて声が聞こえたがもう振り向かない

なんだかんだで結局時間を喰ってしまったか。そんな事を思いつつ目的地に向かう。それにしても

(……喋ったなあ)

あの少女、高町なのはとの会話でも同じような事を思ったが、あの金髪少女……確かアリサ・バニングスだったか。あいつとはそれ以上だ

あの性格故か、はたまた別の理由か。余計な気を使わないでいい分気が緩んで

(ああ、本当にもう時間が無い)

ここは、この世界は居心地が良い。高町なのはに、アリサ・バニングス。俺の異常性の一端を知りつつも拒絶しない人間

そういう人間が今までに居なかった訳では無い。だが結局は だからこそ余計に、全てを知られたときに拒絶されるのがたまらなく、恐ろしい

そうと分かっているのに、何度も、もしかしたら……なんて思ってしまう俺の弱さに苦笑いしか出ないにかわら

(俺がもし普通の人間だったなら……あいつとはいい“友達”という奴になれたかも、なあ)

ほら、まただ。そんな、どうしようもない事を考えてしまう。それほどまでに“楽しかった”のかもしれない……誰かと会話するといふ事が

何で俺は……こんなに中途半端なのだろうか。デバイスとして生きれたのなら。人として生きていたのならどれだけ

(幸せだった……のだろうか)

夕日が目に染みる。思わず目を瞑るが、涙が出ることは無い。人間ではないから

夕日に染まる美しい街並み。そこを歩いていく人の波に紛れて、歩いていく

そこに居る俺は、周りから見れば 人間に見えるのだろうか？

第七話 『善行と偽善と』金髪少女・後編』（後書き）

車の振動が心地よい。もしかしたら私は疲れているのかもしれない……ちよつとだけうつらうつらとしてしまつ

「お嬢様、遠慮なさらずお眠り下さい……着きましたらお伝え致します故」

鮫島がそう言ってくるが、私は今は眠りたくない気分なので、遠慮しておこう

「大丈夫よ……」

「左様で御座いますか」

「ええ……それにしても」

声に出さずふふつと笑ってしまう。思い出すのはあいつの事

空から降って来た男の子……というよりも変人

無愛想なのだか律儀なのだか。こっちが勝手に質問してるのだから、あんな嫌そうな顔するくらいなら無視してしまえばいいのに……

目付き悪いし、無表情だから無駄に怖い印象を受けるけど、嘘に失敗した時のあの慌てた顔見たら、怖いというよりも背伸びしている子供って印象を受けた

(背伸びしている子供…か。私も人の事言えないのかな)

無理をしているという訳ではないけど、それが本当の私という訳でもない

それが私の一面であるし、隙を見せないため大人びた対応を取ることが多い

ああ、そう考えるとあいつと話してた時は久々にソレが無かった…気がする。まあ、完全に、という訳でもないが

ああ、そうか……

(楽しかった、なあ)

楽しかったんだ、私

久々に、割と本音で話したからかな？

まあでも、あんな対応されたら、態々大人びた対応をするのも馬鹿らしい

（それが吉と出た　　ってことなのかしらね？）

答えは返ってこない。あいつならどう返してくるだろうか？

あの変な奴……確か名前は

ギン

第八話 『善行と偽善と心と料理』 (前書き)

いつもより短めですがどうぞ

相変わらず展開はゆっくりですが、お付き合い頂けると幸いです

第八話 『善行と偽善と心と料理』

辺りはすっかり夕暮れに包まれており、どこからともなく美味しそうな匂いが漂ってくる

思ったより時間が掛ってしまったが、なんとか無事済ませる事ができた

そんな思いを抱きつつ高町家のドアを開け、家の中へと入っていく

「あ、おかえりギン君」

「ああ」

ただいま、と言いきりになった自分に諦め半分と情けなさ半分と言った所か

そんな事を思いつつ買ってきた物をリビングの机の上に並べていく

「ベーコン、白ねぎ、玉ねぎ、人参、卵、……残りの材料と調味料はここにあるものを使わせてもらおうか」

「…ギン君、欲しい物があるって言ってたけど、食材が欲しかったの？」

「ああ。ロクな物食ってないせいで倒れられても困るからな」

「へっ……」

他人事のように感心している少女だが、自分の事だと解っているのだろうか？

いや、この顔は解ってないな。まあほっといたら気付くだろう。そう結論付けてゴソゴソと下準備を始める

暫くして少女が不意に怪訝顔になり、時間と共に徐々に思案気な顔になっていく様が見えた

「……あれ？」

（まだ気づいてないのか？）

年齢の割に大人びているし、結構聡い所もありそうなのだが……。そういえば今日会った少女もそうだった気が……？

(最近の子供はそれが普通なのだろうか?.....あんな子供がうじゃうじゃと...?)

ああいった性格は嫌いではないが、さすがに嫌すぎる。そんな感想が出てきた

だが直後に、こいつはそこまででもなかったと思ひ直す

(まあ、なにせ.....知り合って1日の他人にお金を渡すぐらいだからなあ)

思い返すのは今日の昼過ぎの事

冷蔵庫の前で色々あったものの、その事を深く考えない様にしつつオレンジジュースが入ったコップを持って少女の部屋に戻る

ドアの開いた音で気づいたのか、机に向かっていた少女がこちらに振り向いてくる

「あれ、ギン君? いつの間にも外に出てたの?」

「約……5分程前だ。ほら」

時計を確認しつつそう答えながら、コップを差し出す。笑顔になりつつそれを受け取る少女

「あつ。ありがとうなの……はふう」

そんな年寄りみたいな声を出しつつジュースを飲んでいる少女。ああ、そうだ。こいつに頼む事があったんだな……しかし、果たして上手くいくだろうか？

「……少し頼みがあるのだが」

「ん〜？」

ジュースを飲みつつ少女が返事をする。それを見つつ

「お金、貸してくれないか」

「うん、いいよ」

……はい？

(……思い出したら頭痛くなってきた)

俺の頼み方もそうだが、少女の即答はどうかと思うんだが。まあその少女曰く

「いつも置いてくれてるお金が余ってるから貯金してるのがあるの。本当はわたしのお金じゃないけど……人助けの為だったらきつと許してくれるの！」

だそうだが……ああ、なんとというかあれだ

(あいつは少し人を疑う事を覚えた方がいい……その優しさは美德かもだが)

せめて用途だけでも聞くべきだろう。そう思う俺は間違って「えええ！？」……っと、危うく指を切る所だった

それにしても先程の声は……やっと気づいたって所だろうか？ あれから既に10分近く経ってるが

「ギ、ギン君ギン君ギン君！… つうにやあ！？」

「慌てるな走るなこけるぞ。 ああ遅かったか」

お約束という奴だろうか。ズベンツ！と微妙な音を出しつつこけた少女を見つつ溜息を一つ

「大丈夫か？」

「ううー……だ、だいじょうぶ……そ、そうじゃなくて！」

がばりと、少女にしては機敏な動作で立ち上がりつつこけそうになるが、今度はこける前に支えることに成功する

だから慌てるなど言っているだろうに……そこまで慌てるような事だったろうか？

「うう……助けて貰ってばかりで申し訳ないの……」

「気にするな。大した労力じゃない」

そう言いつつ少女から手を離し作業に戻る。その様子を見て、思い出したかのように少女が再び声を発する

「ギ、ギン君？ あの、あの…さっきの言葉の意味って……」

「多分お前が予想している通りじゃないか？」

さっきと言つには遅い気もするが 声には出さずにその心の中で付け加える

「え、ええ！？ で、でも悪いよ！ そんな、料理作ってくれるなんて……」

ただでさえ迷惑掛けてるのに。そんな言葉が聞こえた

迷惑ねえ？ どちらかと言えば掛けてるのはこちらの方な気もするが。こいつは自分の為に誰かが何かする事〓迷惑かける事とでも思ってるのだろうか？

再び溜息を吐きつつ、言葉を選びながら喋る

「料理と言つても手間が掛らない簡単な物だ。それにお前から魔力を貰っている以上、できるだけ健康で居て貰った方がこちらとしても都合がいい。それだけだ」

ああ、選びながらこれか。もはや自分に対して呆れしか湧いて出ないが……

「…そ、そっか。 その方がギン君の為にもなるんだね」

にやはは。と笑いつつ少女は納得したように呟く

（ 俺の為、か ）

魔力云々は確かにそうだが、本当の理由はそれではない

少女の父、高町士郎の治療を行うなら魔力を……魔法を使ってもらう事になる

体調や精神状態は勿論良い方がいい。その方が余計な負担も少女に掛らず、少女の父親にも掛けない

（まあしかし、それを本当に行くかはまだ決めかねているが）

……もう色々とぶっちゃけてしまいが、あの人間ならほっといても明日明後日にも勝手に目覚めそうだ

それなら余計なリスクを負うのは得策ではない。というかアホらしい。だが気になる事もある

（カルテでは7ヶ月後にはほとんど完治していたが、ならなぜ今まで目覚めない？ 少女の話だと入院したのは1年程前なのだから、約5ヶ月余計に眠ってる事になる…）

やはりあの脳の傷が原因なのだろうか？

何度も“あの状態から7ヶ月後にはほぼ完治とかないわー”という思いのせいで、考えるのを放棄しそうになる思考を無理矢理稼働させつつそう考える

だがそれもあくまで推測でしかない。あの傷が原因と決まってる訳では

（……………キリが無い）

その事を考えると本当にキリがない。今はとにかく、料理を作る事に専念すべきだろう。何せまともな料理なんぞ作るのは初めてなのだ

(レシピ、手順等はネットで病院の位置を調べるついでに覚えておいたから、できないという事は無いだろうが)

味の保証は、無い

少年？料理「ふえ〜……包丁が凄く速さで動いているの……」
中……

「…これで完成、か？」

とりあえず全行程を終了。全て覚えた通りにできたはずだが……まあネットに乗ってる物だ。不味いという事は無いだろう

そう思いつつできた料理を運ぶ。向かった先には少女が布巾を使って机を拭いている光景があった

こちらに気づいた少女が、俺を 正しくは手に持っている料理を見て感嘆の声を上げる

「わ〜……お、美味しそうなの……！」

「まあ、見た目はな」

「……え？」

どことなく不安気な声を上げる少女だが、気を取り直したように準備を進めていく

「きっと大丈夫なの！ 凄く美味しそうな匂いがしてるの」

そう言いつつ持ってくるのは箸とスプーン……2セット？

「俺も、食べるのか？」

「え？ 食べないの……？」

いやまあ、昼は確かに食べたが……別に空腹を感じる訳では無いから無理に食べる必要はないぞ

そう言おうとして、止める。少女の目がとても不満気に、かつ寂しそうにこちらを見ている

「……」

(……)

「……」

(……)

選択肢なんて最初から無かった。らしい

そんなこんなで現在、俺と少女は向かいの席に座っている

目の前には料理　ベーコンと人参に白ねぎを炒め、最後に卵を全体に絡ませるようにした炒飯。黄金炒飯チャーハンと呼ばれているらしい。それにベーコンと玉ねぎのコンソメスープにパセリを浮かべた物、後レタスとキャベツを適当に千切り& a m p ;ちぎったサラダ。以上
それらを前に視線の先の少女はごくりと喉を鳴らす

「い、いただきます…なの」

「……どうぞ」

何なのだろう、この無駄な緊張感は。「いただきます」と言った後、少女が何かをためらう様な感じで何時まで経っても食べようとしない事が原因か、それとも別の何かか

面倒だ。そう思いつつ俺は目の前にある炒飯をスプーンですくい、

一口

(……………不味く、はない)

だが美味くも無い。そんな味……つまりは普通、どこまで行っても普通。ネタにもならず、かといって話題にもならない様な、普通の味

「……あむ」

俺が反応に困っていると、少女が料理を口に運ぶ音が聞こえたので思わずそちらを見てしまう

むぐむぐと無言で咀嚼そしゃくしている様子を見て、溜息を吐きつつ言葉を

漏らす

「微妙だな…すまない、これなら適当に冷凍食品でも買った方が無駄に「おいしい…」…ん？」

何故か、有り得ない感想が聞こえたような。幻聴か？ 俺はそこまですで壊れていたのだろうか？

「ギン君！ やっぱりこれ美味しいの 最初に変な事言うから無駄に緊張しちゃって損したの」

そう言いつつ満面の笑みで料理を食べ始める少女 その顔にお世辞や嘘を付いている様な様子は見られない

(…何故だ？)

俺の勘違いだったかと、もう一度炒飯を口に運ぶ…普通。続いてスープ…うん、普通だな。サラダは…これは食べるまでも無い。斬…切ってちぎっただけだ

その間にも美味しそうに料理を次々と口に運んでいく少女。もしかして聴覚ではなく味覚の方が壊れて

(……ああ)

ふと、思い出す。それは朝と昼のご飯の事

朝の“黙々と母の手料理を食べている様子”

昼の“気分的な問題”そして“一緒に食事を食べる人の有無”

昼のはどちらも俺の推測でしかないが、少女の様子からしておそらく間違いではないと思う

(本当に単純で、子供だな……お前は)

そう、視線の先の笑う少女を見ながら思う

だがそれは少女の年齢なら別段おかしくは無い、むしろ今現在の少女の状態が自然であり、現在の少女を取り巻く状況こそが不自然

そして、状況シチュエーションの原因は……“高町 士郎”

(選択肢なんて、最初からなかった)

その通りだったのだろう。結局のところ、少女の父が目覚めない限り“この生活が終わる”ことは無い

ならばやるべきだ。确实ではなくても、確証がなくとも

魔法を使うリスクも、“俺がこのまま此処に居続ける”リスクと比べれば、きつと

ならばやるしかない。これ以上リスクが増えない内に。これ以上

(……ふん、しかし随分身勝手な考えだな。我ながら)

現在の生活環境せいごうけいじょうを変えるために高町士郎を目覚めさせる。そのために、異端おしの存在を持って非日常りすくの伴う魔法ほうほうを取る

一見すれば少女の為の善行ぜんこう。お世話になったお礼として、少女の為に起こす奇跡まほう

だがそれは自分の為の偽善いつはり。恩を仇で返す様な、リスクの含んだ自分の為の我儘まぼう

(…偽善者、いや、独善者か?)

どちらも変わらない。同じなのは、結局自分勝手だという事

(なるほどな……それならば、俺が“化け物”呼ばわりされる筈だ)

拒絶されるのは、畏怖されるのは。この身体のせいだと思っていた。
いや、おそらく最初はそれが原因だったのだろう

だがいつの間にか心もそうなっていたとは。これでは受け入れられるはずがない、受け入れて、貰えるはずがない

そんな俺が恐怖を抱く。人に拒絶される事に

そして俺は諦める。誰かと共に居る事を

(滑稽こっけいだな……本当に)

「…？ ギン君？」

「いや、なんでもない。 気に入ってもらえたなら嬉しいよ」

「……。うん、とっても美味しいよ？」

「そうか、それは良かった」

そう、自分の為だ

高町家の事情を考えるのも、少女の為に色々するのも、翠屋に様子を確かめに行ったのも

慣れない嘘を吐いたのも、金髪を無理矢理追い払わなかったのも、結構なエネルギーを使って高町士郎の原因を探ったのも

全部、ぜんぶ

俺の　　為、なのだ

その夜食べた料理の味は、覚えていない

第八話 『善行と偽善と心と料理』 (後書き)

おそらく次はなのはSIDEかな？

もしかしたら挟まず本編か、それとも外伝かもしれませんね

では、お疲れ様でした

第九話 『少女く非日常からの誘い』 (前書き)

第九話です。今回もまた短めですね

第八話のなのはSIDE+となっております

それでは、どうぞ

第九話 『少女く非日常からの誘い』

部屋には時計の音と、紙と鉛筆が擦れる音、そしてわたしの息遣いの音が響いている、様に感じる

実際には響いている訳ではないけれど、今この家にはわたししか居ないからそう感じるのだと思う

「ギン君、どんな用事だったのかな…?」

ソレを…寂しさを紛らわす様に独り言を呟きつつ考える

今から10分程前にギン君がお金を貸して欲しいと言ってきた

断る理由はなかったから、すぐ返事を返したのだけれど……何故かその時呆れた様な顔してたような?

その後、わたしも付いて行きたいって言ったけど断られた

「はあ…」

そんな事を思い、溜息を吐きつつも鉛筆を動かす。問題集に書かれた問題…今は簡単な漢字の練習をしている

ほんと勉強をする必要はないのかもしれない。わたしは既に聖祥の入学試験で合格を貰ったから

入学試験を受けに行ったときは久しぶりにお母さんと話せたし、一緒にいる事もできた……あまり、素直に喜べなかつたけど

「お母さん、凄く疲れてた……よね」

お化粧で誤魔化してたけど、よく見たら目の下にクマができていた……やっぱり翠屋の事とか、お父さんの事とかで忙しいんだ

こういう時程わたしの運動神経が疎ましい事はない。人一倍と行かなくてもいい。人並みに動ければ手伝う事もできるのに……できる筈なのに

それに、翠屋の手伝いができれば……話す事はあまりできないかもだけど、一緒に居る事はできる

お母さんやお姉ちゃんの負担も和らげる事ができると思う。お兄ちゃんもきつと元に戻ってくれると思うのに……

(他に何か、わたしが家族のためにできる事ってないのかな……?)

「……はあ……」

さつきよりも深い溜息が出る。一人で居ると気分がどんどん落ち込んで行く

「ギン君、早く帰ってこないかなあ……」

そう思いつつ時計を見る。まだ3時前……ギン君が出掛けちゃったのが2時前くらいだから……まだ1時間ほどしか経ってない事になる

ギン君……ううん、銀。わたしがあの子にあげた名前……あ。あのデバイスだったっけ？

正直人とは違うと言われても実感が湧かない……コインになったり人になったりするの少しビックリするけど

話したり、一緒にご飯を食べたりしていると、ギン君が人じゃないって事をすっかり忘れてしまう

人の姿のギン君は、少し変わった色の髪と目をしている人にしか見えない

「……人じゃなくてもギン君はギン君だよね……」

そう思う、思うことができる

ギン君はあんまり喋ろうとしない。もしかしたら人と話す事があま

り得意ではないのかもしれない

でもわたしが話しかけると、反応が鈍かったり色々あるけど、最後には答えてくれる。時には言葉でなかった事もあるけど

ギン君は外見とはちょっと怖いけど、でも優しい人だと感じる時がある

公園からコンビニに行く時…ギン君が手を繋いでくれた時も。好奇の視線から守ってくれた時も

他にも色々、細かい事を上げていけばキリが無いような気がする……

まだ一緒にいる時間は一日も満たないけれど

それでも、例え人じゃなくても、わたしはギン君の事“良い人”だと思える

わたしの“人を見る目”は昔お父さんに褒められた事があるから自信がある

お兄ちゃんには、まるで本能で危険等を察知する小動物のようだって言われたけど

(…………お父さん…お兄ちゃん)

二人の事を考えてしまったからか、現在の状況を思い出して気持ち
が落ち込んでくるのを感じる

「……………はあ……。勉強、今日はもういいよね……………」

あまり頭に入ってる気がしなかったけれど、とてもそんな気分にはなれなかった

電気スタンドのスイッチを切って、椅子から立ち上がり……………そのまま
まふらふらとベッドへ倒れこむ

枕に顔を埋めながらちらりと時計を見る   3時51分くらいかな

考え事をしてたからかな、思ってたより時間経ってる気がする

……………

そんな事を考えつつ、わたしの意識はだんだんと闇に落ちて

「……………はっ」

思わずそんな声を上げちゃったけど、それに構わず頭を振る

(あ、危なかったの……………思わず寝ちゃいそうになったの)

別に寝ても問題はないとは思っけれど……なんとなくそんな気にはなれなか

「……あれ？」

ふと辺りを見回す……暗い

まだ真っ暗という訳じゃないけど……さっきまで明るかったのに？
疑問に思いつつ時計を見る……短針は5を過ぎており、長針は2を刺していて……

「5時……10分？」

そう呟いてしまう……もしかしてあの一瞬で寝ちゃってた？

その事実の認識して、何故だか気恥ずかしくなってしまうと同時に驚いている

（今まで……家で一人の時は寝れなかったのになあ……あ！ギン君帰ってきてるかな？）

ふとそんな考えが浮かんで来てベッドから起き上がると、1階へと下りていく

でも残念な事に誰も居ないみたい。電気も付いていなければ他に心配を感じることもないから

その事実には落ち込むけど、気を取り直してリビングの電気を付ける。ついでに気を紛らわすため、テレビでも見ようかな…？

そんな事を考えていると玄関が開く音…：あ、ギン君かな？

若干軽い足取りになりつつも、玄関の方に歩いていくとそこには予想通りに

「あ、おかえりギン君」

「ああ」

返事が返ってくる。それだけで少し暖かい気持ちになれた

それから一騒動あったけど、今わたしはギン君の作ったご飯を食べ
ている

ギン君が作ってくれたそれは、お母さんの料理の味と比べるとさす

がに負けてる気がするけど

それでも、とても美味しく感じた……ううん、美味しかった

「ギン君！ やっぱりこれ美味しいの　最初に変な事言うから無駄に緊張しちゃって損したの」

そうギン君に言うと、ギン君の驚いた顔が見えた……でもあまり気にする余裕は無い

自分でも顔が綻んでいるのが分かる。けどそれを止める気は無く、次々と目の前に並べられた料理を食べていく

(ギン君料理作れるんだ……凄いなあ)

そんな事を思いつつしばらく料理を堪能する……ふと、ギン君の方を見ると動きが止まっていた

「……？　ギン君？」

思わずそう、話しかけてしまう

何か考え事してたのかな？　そんな風に思い、邪魔しちゃったのかなと少し後悔している

「いや、なんでもない。　気に入ってもらえたなら嬉しいよ」

その言葉に、思わず今度はわたしが動きを止めてしまう

ううん、言葉もだけどその顔……“笑顔”を見て

「……。うん、とっても美味しいよ?」

わたしの、偽りない本心からの言葉を、ギン君に向けて言う

そうするとやはりギン君は“笑顔”のまま、わたしに言葉を返して
くれる……でも

「そうか、それは良かった」

それならなんで、そんなに辛そうなの…?」

「ご飯を食べ終わる。　食事中に見せたギン君の様子が気になったけど、

「もう終わったぞ?」

「あれ? あ、あはははは……」

洗われた食器を探すためにぶんぶんと振っていた腕を引っ込めつつ苦笑い……うう、気付かなかった

そんなわたしの様子を見るギン君。その半分閉じられた目がまるで呆れている様にも見える

(さ、さすがに被害妄想すぎるの……ひ、被害妄想だよね?)

少し自信が無いけど、そう思う事にして水道で手を洗うギン君を見つめる

さっきはいつも通りって思ったけど、やっぱりどこか様子がおかしい気がする

(どいごが……と言われると、困っちゃうけど)

さっき食事中に見たイメージに引きずられているだけかも……と、確証も持たず、ギン君に聞く勇氣も出ない

(もしかしたらさっきの食事中の事もわたしの勘違い……ううん、
じゃないよね。アレは)

そんな弱気な思いが出始めるけど、すぐ否定する

少なくともアレだけはわたしの勘違いではないと言える

うん、やっぱり聞いてみよう。そう決意してわたしがギン君に
話しかけようとした時…

「高町なのは。お前は父を……高町士郎を助けたいか？」

そんな声が聞こえてきて、わたしの開かれようとしていた口、もと
い体が停止する

(……今、ギン君が名前を……？ 違う、今はそっちじゃない……さ
つき、ギン君は何て言った？)

高町なのは

お前は父を

高町士郎を助けたいか？

「でき…るの？」

震えている声が出た。原因は役に立てる事への歓喜か、未知なるものへの恐怖か

口の中も乾いていて、喉が貼り付くように痛い

「ほんとに……助けることができるの？」

1年前倒れたまま、今だ目を覚まさない父を

手術室から出てきた時、全身が傷だらけで死んでいるように眠っていたあの父を

「確実に、とは言えないが……」

ギン君が、目の前に居る男の子が、その銀の目がわたしを見る

「わたしに……できるの？」

その目に縫い付けられるように視線を動かせないまま、わたしは三度問いかける

向こうもまた、こちらから目を逸らさず

「今、助けられる可能性があるのは お前だけだ。高町なのは」

そう、告げる彼の目が、怪しく輝いた様に見えた

その時初めて、その姿の彼が人間^{ひと}ではない別のナニカに見えた

そんな……気がした

第九話 『少女の非日常からの誘い』 (後書き)

おそらくは後1〜2話で第一章が終わる…のではないかと

もしかしたら閑話を挟むかもしれないし、そうでないかもしれない

それはともかく、お読みいただきありがとうございました

また次回、よろしく願います

第十話 『願いの言葉』（前書き）

遅くなり申し訳ありませんでした。第十話、十一話を投稿します。

今回はどちらも一万文字くらいありますので、少し長いかもしれませんが、お気を付け下さい

それではごつごつ

第十話 『願いの言葉』

新暦61年12月23日 AM 00:25

夜も更けて時刻は深夜12時過ぎ、辺りはすっかり闇に包まれている

少女の部屋、そのベッドに横たわっているのは少女と俺

相変わらずそうしていると落ち着くのか、腕をしっかりと掴んでいて離してくれそうにない

最初は待機状態で居たのだが、少女は寝苦しいのか、落ち着かないのか。唸るような声を上げていた

それを真横で聞かされるこっちも落ち着く事ができず、こつやって人型に戻っている

(そういえば、昨日はこれで心底驚いたんだっただな)

とは言っても今は平気、という訳でもない

体全体が強張った感覚…おそらく顔は微妙に引きつっているのではないだろうか

(それにしても……たった一日前の事…なんだよな)

たった一日前、なのに心情的にはかなり前の事のように感じた

時間の流れが遅く感じた一日だった。本当に長く感じた

(こうやって人と過ごすのは本当に久しぶりだった…)

まあとにかくにも、今は回復する事に専念する

今の状態でも、魔法…少なくとも、治療用の魔法を使う分には問題はないと思われる

だが、確実に事を進めるならば少しでも万全に近い状態の方が好ましい。どんなトラブルがあるか分からないのだ。油断はできない

静かな夜。昨日は聞こえていた蟲や鳥達の声も聞こえない。聞こえるのは時計の音。隣で眠る少女の寝息、そして心音

トクン、トクン　　そう、一定のリズムで刻まれる音。俺には無い音

何故か、その音を聞いていると気分が落ち着く気がする。命の音だからだろうか？

(命、か)

世界に溢れる様々な命。それは数えればキリがない

一例を挙げるならば、蟲に動物に自然、そして人間……隣にいる少女の様な

それら生命の輝きは時には神々しくて、時には暖かくて、時に…眩しくて

歪んだ俺、自然ではない命を持つ者としては、それらは直視出来ない様な光を放っている様に感じる

俺が人を求めるのもしかしてそこに理由があるのだろうか。そんな考えが浮かび、笑う

(つまりは無い物強請りか？ いつまで子供ガキのままで居る気なんだか)

既にこの身は人の一生の、おそらくは数倍の時間を過ごしている。

いい加減大人になってもいい…というより、なっついておかしくない

それでも未だに俺は…

考えない様にしても思考は止まってくれない

そうして時間は過ぎていく

眠れないまま終わっていく

聞こえるのは、時計と寝息、そして心音の音

眠れぬまま、朝を迎える

いつまで経っても起きない寝坊助ねぼうすけを起こす。時刻は8時過ぎ

少女はご飯を食べ、それに俺は新聞を読みつつ付き合う

勉強をしている少女の様子を見つつ、適当な雑誌を読む

昼ご飯はまた俺が作る事になって、それを一緒に食べた

お腹が一杯になった事で眠くなったのか、少女はソファに座ったまま寝てしまう

溜息を吐きつつ抱き上げ、少女の部屋、ベッドへと運ぶ

ゆっくりと、起こさない様に慎重に降ろし、布団をかける

近くにあった雑誌を拾い、椅子に座って読む

穏やかな日常。いつも望み、手に入れる事が出来なかったもの

偽りの日常。今あるこの時、遠くない未来に終わりを迎えるもの

雑誌から時計へと視線を移す。時刻は既に17時近く

視線を移す。時計からベッドの上、眠る少女へと

(こいつは……迷わなかったな)

少女を見ていると、昨日の夜の事を思い出す

問いかけた。父親を助けたいか。と

突然そう言われれば、普通は迷うか、もしくは信じないか

魔法と言う存在を知っていたとしても、直ぐに答えが出るのは稀だ
……だが、少女は違った

でき…るの？

小さい声だった。震えていたし、詰まりながらもあった

だが少女の意思は決まっていた。その目が、いつもと違っていた

(意外な一面とでも言うのか…)

少女の、あの目を思い出す。強い意志の宿った、決意した者の、目あんな目をできる者がどれだけいるだろうか。それも、こんなに若い者で

(優しく、鈍臭くて、甘えん坊な、人を疑う事を知らないお人好しの、年の割に思慮深い子供)

それが昨日までの少女のイメージ

それに“強い意志”が加わった……年齢に不釣り合いな程の

きつとそれ程までに家族が好きなのだろう

(羨ましい、な)

羨ましい。それ程までに誰かを、好きでいれる事が。知り合っていない日も経ってない俺にそんな笑顔を向けれる少女が

(きつとお前は、愛されてる)

知りはしない。解りもしない。だが

(愛されているんだな。家族に)

きつとこの少女は、愛された故にこうなったのだ

眠る少女を見て、思う

近いうちに、この生活は終わる

そしてきつと、いつもの生活が戻ってくる

少女はもう、一人泣く必要はなく

少女はもう、俺に縋りつく必要は無い

(……あの人間なら、きつと治療すれば直ぐにでも動き出すさ)

それはもう人間というカテゴリーに分類して良いものかどうかは不明だが……まあ、それはともかく

そうして、いつもの日々に戻るだけ。少女は家族と笑い、俺は

(……どうしようかね?)

やるべき…もとい、殺るべきことはやった

もはや戻る故郷（よこしま）は無く、戻れる場所も無い

(まあいいか。その辺は追々考えよう)

時間は腐るほどあるのだ。終わればいくらでも……

いや、今はそれより明日の事だろう

(ああ、そうか)

カレンダーを見て思い出す。明日は……

12月24日……クリスマス前夜

(……いい前夜祭になりそうじゃないか)

柄にもなく、そんな事を思った

新暦12月24日 PM 16:30 海鳴大学病院前、バス停

近くのバス停で降りた後、そのまま真っ直ぐ病院へと向かう

中に入り、受付に座る女性に向かって少女は軽く会釈をする

向こうはこちらに気づいた後、親しげな様子で話しかけてきた

「あら？　なのはちゃん、お久しぶりね」

「こ、こんにちは看護婦さん」

「今日はお父さんのお見舞い？」

「あ、はい。えっと……」

少女と受付の女性、もとい看護婦が話をしている……どうやら前に居た人間とは違うようだ

少女と女性は顔見知りらしく、とんとん拍子で話が進んでいく

(……これなら前の時も付いて来てもらった方が良かったか?)

思わずそんな事を思ってしまうが……これが後の祭り、という事なのだろうか

(そういえば……あの金髪は今頃どうしてるのやら)

偶然だが助け、助けられた関係の金髪娘……名前はアリサ・バニン
グスだったか

そんな事を考えていると話が終わったのか、少女が歩きはじめる

病室に向かって廊下を歩いていく少女と、その胸ポケットに入れた俺

辺りに人の気配が無くなった事を確認しつつ、話しかける

『随分あっさりと入れるものなんだな』

てつきり子供だけだと色々言われるものだと思っていたのだが…

「うん。あの人凄く優しい人なんだ」

話を聞くところによれば、どうやら泣き崩れる母や姉共々、少女の事を慰め、励ましてくれたそうなの

(……母親、と言えどやはり人の子か)

本来は子供が泣けばどうにかするのは親の仕事だと思っが

しかし自分の伴侶がああなったのだ、無理はないだろう……あくまで想像でしかないが

伴侶なんて生憎あいにくと持った事もなければ、考えた事も無い。おそらくは特に大事な人でも考えれば間違っではないだろうか

(…しかし、少女の母親とやらも相当強い人物なのだろうな)

伴侶が倒れた後もお店が潰れない様にはほ一人で切り盛り。姉も時間の限り手伝っているらしい

それに入院中の身の回りの世話もしているらしい。加えて少女の朝ご飯も作っている、と

(疲れる筈だ……人間はそこまで丈夫ではないと思うのだが)

体も、心も

「……………着いたね」

『そうだな』

そう、短く言葉を交わしてドアを横にスライドさせる

相変わらず質素ながら清潔なイメージの病室、その中心にあるカーテンに覆われたベッド

そこに眠るのは、少女の父

「…お父さん…」

ベッドを覆うカーテンを捲ると見えるのは父親の寝顔

その光景を見て、少女が継る様にそっと父の手を握る

感触を確かめるように触り、ゆっくりと離していく

「……あんなにごっごっしていたのになあ」

昔を思い出す様に目を閉じ、その言葉を漏らす少女

『…すぐ元通りになるよ』

「…そうかな？」

『高町士郎の肉体スペックは人外レベルだ。明日明後日辺りには元気に飛び跳ねているんじゃないか？』

「…プッ」

堪えきれない様にクスクスと笑う少女

「ギン君でも、冗談言うんだね？」

涙目になりながらそう問いかけてくる少女を

『半分は冗談ではないが……まあ、緊張しすぎだったものだな』

「そっか……ありがとう、ギン君」

手で目に浮かぶ涙を拭くと、そこにあるのはさっきまでの少女ではなく、その目に強い意志を宿した高町なのは

「助けよう……。わたしにできる、わたしにしかできない魔法で」
ほうほう

『了解した。俺も最善を尽くそう』

高町なのはが俺を、眼前に掲げる様に持ち上げ目を閉じる……そして

「……………そういえば魔法ってどう使えばいいの？」

『……………はあ』

「え、ええっ！？ なんてため息吐くのギン君！」

『お前は決まらないな』

「う、う……」

（まあ、この方が少女らしいのかね）

そんな事を思いつつも、少女に言うべき言葉を考え

『願え』

「え？」

『魔法発動に必要な魔力……それは精神エネルギーとも言える』

「せい……しん」

『お前は願うだけでいい。必要な制御等は俺の仕事だ』

「願う……」

目を瞑り、考える少女。辺りを静寂が包み、どことなく神秘的な雰

困気が漂い始めるこの空間くわんきゆう

1分程その状態のまま考え続け、少女が紡いだ言葉は……

「……いたいの、いたいの、とんでけ〜！」

『なめてんのかテメエは』

「うにゃ！？　そ、そんな事ないの………というかギン君なんか言葉が……？」

『……ごほんつ。気にするな。で、他にはないのか』

もっと思いを込めたもので。と付け加えておく。なんとというか脱力感が半端ないのだが

あまり緊張しすぎないのも駄目なのだが……こいつに緊張感を求めるのが間違っているのだろうか

うんうん唸る少女と、聞こえない様な溜息を吐く俺……とても今から大事を始める様な雰囲気ではない

「……願い。わたしの、ねがい……」

唐突に、少女がその言葉を発する……と同時に、高まる十二力を感じる

『…今度は当たりか。その調子だ』

そう少女に話しかけるが、聞こえていないのかぶつぶつと呟き続ける少女

(…大した集中力だな)

集中できているならそれで問題ない。と結論付け、こちらも発動の為の準備を進めていく

(術式読み込み開始……完了。術式発動に必要な魔力 十分だ。
術式制御…問題なし。対象固定……完了)

治療用、あまり複雑なモノではないとはいえ制御に失敗すれば何があるか解らない。故に入念に、慎重に設定していく

「……また」

高まる十二力、もとい精神エネルギーまじょく。それはやはり少女が持つに

は不釣り合いな程大きくて

それに呼応するかのように、俺が光を放ち始める……その色は優しい感じのする、桜色

(…………綺麗だな。お前は魔力光まで……)

思わずその魔力光に見惚れる。だがそれも束の間、すぐに意識を切り替える

『充分だ。後は願いを、言葉に』

俺の声が届いたのかそうでないのか、閉じていた目をわずかに開き、紡ぎ出す言葉は

「……また、みんなで、いつしよに……!!」

少女らしい言葉ねがい

瞬間、俺と少女を中心に桜色の魔力光が波紋の様に広がり、溢れる桜色の光が病室を余す所なく照らし、続いて少女の父、高町士郎からも波紋が広がり始める

少女から出る波紋と、父親から出る波紋。それがぶつかり合い、絡み合う様に崩れ、淡い粒子となって弾ける

そんな幻想的な光景が暫く続き　唐突に終わりを迎える

まるで先程の光景が夢か幻であったかのように

「　　っはぁ……うにゃ……」

緊張が解けたのか、へたり込みつつそんな声を発する少女。その額には汗の粒が浮かんでいる

『とりあえずは、お疲れ様だな』

「……うん。お父さん、これで良くなったのかな？」

『まだ何とも言えん。傷は消したが、これが原因でなかった場合は……』

「…そっか。うん、でも」

そう言いつつ少女は立ち上がり、父親の顔……穏やかな顔を見つめる

「傷だけでも、消えたならよかったよ……」

呟く少女。その顔は少しの喜びと、達成感。そして 涙

（強がりか……まあ、これで目を覚まさなかった場合、現状の俺にはもはや手の打ち様がないのは事実だ）

人間 高町士郎の方へと意識を向ける

その眠る顔は先程よりも、少し安らんでいるようにも見える

『…さて、ではお前は先に部屋の外に出てくれ』

「？ ギン君はどうするの？」

『最終確認……といった所だな。一応魔力残滓が無いか確認しておく』

そう言いつつ人型に戻り、高町士郎の傍に立ち、その額に手を乗せる

「できれば魔力を持つ者が近くに居ない方がいい。感知できない可能性もあるからな」

「あつ……もうちょっとお父さんの顔、見てたかったな……」

「これからいつでも見れるさ……きつとな」

「……うん。そうだよね……！」

俺の慣れない慰めの言葉。それを聞いてか、少し嬉しさを滲み出しつつ少女は部屋の外へと出て行く……ドアが閉まるその間際

「ギン君、頑張ってね」

そんな言葉を残して

「……勘も、鋭いのかもな」

思わずそう呟いてしまう。お見通しだったのか、それともただ、確認する事に対してか

(…まあ、どちらでもいいわ)

意識を高町士郎へと集中させ、目を閉じる

これから行つのは……例えるなら目覚ましみたいなもの

(どうせなら早く目を覚ましてくれよな……)

そう思いつつ、体内に残る少女の魔力を使って術を行使。微弱な電気が流れた様な、そんな感覚が一瞬だけ走り 終わる

さて、これでやれるだけの事はやった。後は

「お前次第だ、高町士郎……。お前の家族が心配してるぞ？」

目を開けつつ、聞こえている筈はない声をかけてしまう

「お前の伴侶は頑張っている……お前が居なくて一番辛いのは彼女だろうな」

額から手を離しつつ言葉を吐き出し続ける

「長女はその母親の手伝いをしているみたいだな。大分疲れてるみたいだったぞ？ 長男は……俺にはよく解らんがきつと頑張っている

るんじゃないか？」

少しだけ、間を置いて話し続ける

「少女……高町なのはが寂しい思いをしている。あの年頃なら特に甘えたい時期だろうに……まあ、俺に言われなくても知っているか」

未だ眠り続ける高町士郎に背を向け、扉に向け歩き始める

「……お前はきつと“良い父親”なのだろう？　なら、何時までも寝てないで……家族を安心させてやってくれ」

そう言いつつ、扉を開く

「願わくば、これからは俺みたいなモノに縋る様な事が無い様にしてくれよ」

最後に吐き捨てる様に呟いて、外に出る

「あ、ギン君！」

近くにある、備え付けの長い椅子に座っていた少女が俺を見つけ、
駆け寄って……こけそうになる

苦笑しか湧いてこない。倒れる前になんとか支える事に成功した俺
は少女に向かって告げる

「やれるだけのことはやった。後は本人次第だな」

「……うん」

やはり少し悲しそうに、それでもしつかり頷く少女

支えるために掴んでいた腕を離しつつ、俺は待機状態に戻る

『帰ろう。あまり遅くなるとダメなのだろう?』

「うん、そうだね…この時間なら誰も居ないと思うから」

『……そうか』

そんな話を話しつつ外へと向かって歩いていく

受付に座る、少女の顔見知りの看護婦と少女は挨拶した後、ドアを

潜り外へと出る

辺り一面、深いオレンジに照らされた街の光景
時刻は既に17時近い。もうすぐ夕闇が訪れるだろう

帰りもまた、近くのバス停からバスへ乗る

適当に空いていた座席に座り、溜息を吐くと少女は視線を窓の外へと向ける

そのまま流れゆく窓の外の景色を気だるげに眺めている

……その顔はどことなく憂鬱うつろそう

『……公園にでも、寄っていくか？』

不意に、そんな言葉が出てきた

「……。うん、ギン君！」

その俺の言葉に、少し悩むような、躊躇ためらう様な顔をした後、嬉しそ

うに返事を返してくる少女

途中でバスを降りると、長い影が伸びる歩道を歩きはじめる

目指す場所は、海鳴臨海公園

歩く事10分程。公園の入り口が見えてくる

少女の手を引きながら、意外と時間掛らなかつたなと思う

まあ、途中から俺が手を引いている事もその原因だと思うが

(ほんとにこいつは…危なっかしくて見てられん)

少女から聞いた話の中の兄、高町恭也を過保護だと思ったこともあったがとんでもない

あの兄の過保護っぷり。その理由が今なら解る

こいつから目を離すのはある意味危険だ。気が付くとこけそうになっている&mp;こけているというのはもはや一種の才能か

手に持った俺を見ながら話していれば電柱にぶつかりそうになるといった事もあった

…色々思い出すとまた頭が痛くなってきた。少女の家族、特に兄には早く元に戻って欲しいものである

(ああ、そういえば前にコンビニ行く時もそうだったな……)

あの時も同じような理由で、こうして少女の手を引いて歩いたとても懐かしい記憶、そんな風を感じる。少し前の事なのだが

「うう、何度もごめんねギン君…」

同じ事を思い出して言ったのか、それとも今日だけの事を言ってるのかは俺には解らない

「ああ」

なのでそうとだけ言っておく。肯定されたからか、微妙に落ち込んでいる様にも見える少女

(かといって、気にするなと言っててもこいつは気にするだろっし…
…やれやれ)

会話と言つのは本当に難しい

そんな事を考えつつも、公園に入って割と近くにあるベンチに辿り着く俺と少女

とりあえず突っ立っているのもあれなので適当にベンチに座り、背もたれにもたれ掛る

横目で様子を伺つと、少女も同じようにベンチに座ろうとしているのが見えた

「……………」

「……………」

お互い無言のまま、正面の景色を見つめる

水平線の向こう、夕日が完全に落ちようとしている光景が見える

薄暗いオレンジに染まった空と海、日を反射してオレンジ色の光を散らす海面

(中々いい景色だな……………ん?)

ふと気付く。少女の様子がおかしい。俯いてふらふらと……

「おおっ!?!」

ぐらり。と俺が居る方向とは反対に向かって倒れそうになる少女。
その先には固い地面しか無い

反射的に手が伸び、少女の腕を掴んで支え 力余って引っ張って
しまう

すると今度はこちらに向かって倒れてくるわけで

ぽすっ

そんな軽い音と共に少女の頭が膝の上に直撃、もとい乗る

「……」

視線を下にずらすと見えるのは、少女の寝顔

「……まあ、魔法使ったからな」

勿論それだけでなく、あれだけの大事をやったのけたのだ。色々な精神的疲れもあるだろう

そう考えると起こすのもしのびない……まあ、会話しなくて済むと少しほっとしたのも確かだが

しかし今度は別の問題が浮上する

今は12月で季節は冬。更に時間的にも太陽は沈んだ後で……いつの間にか空は暗くなっていた

公園に備え付けられた街灯があるため、公園まで暗い訳では無い。いや、むしろ今はとある理由でいつも以上に明るいのではないだろうか

ただ、明るくても気温が上がる訳ではない。このまま眠り続ければ、おそらく少女は風邪を引くだろう

辺りを確認……何人か人の気配がするが、遠い。これなら大丈夫か

「……やれやれ」

溜息を一つ、と同時に手を虚空にやり　黒い布を手取る

少しの間、その布……特に裾すその辺りがぼろぼろに擦り切れたマントを感慨深げに見て、少女を外気から守る様に掛ける

少女に対してサイズが大きいソレは、大して苦も無く体全体を覆う

事ができた

(まさか、こんな使い方をする日が来るとはな…)

とは言っても、このマントは別に大した物ではない

“バリアジャケット”一概的にそう言われている代物だ

身につける者を外部の攻撃等から守るための衣。魔法を扱う者達の
戦闘衣

人によって千差万別な見た目があるバリアジャケットだが俺の場合
は単なるマント

顔から下をすっぽりと覆い隠すようなデザインの、深い、殆ど黒に
近い紺色のマント

(まあ、これで大丈夫だろ)

ぼろぼろだが、機能的にはまったく問題ない。保温機能もばっちり
である

あまり見た目はよろしくないが、まあ眠るだけなら問題ないと判断
する

「すー……すー……」

聞こえてくる少女の安らかな寝息。とりあえずはこれで一安心

(さて……俺はどうするかね?)

適当に景色でも眺めてみようか

少女を膝に乗せたまま、視線を空へと向ける

空に浮かぶ幾つかの白い光と金色の球体。星と月

それらを眺めつつ、自身の内から湧き出てくる欲求

のんびりしたいという気持ちに身を任せ、体から力を抜いた

そうして、どれだけ時間が過ぎただろうか

一時間か、二時間か。ここからでは時計が見えないため解らないが、そのくらい過ぎたと思う

時折もぞもぞと体を揺する少女が落ちない様に、膝の位置を調整し

ながらの月見

そんなのんびりとした時間も、そろそろ終わりを迎えようとしていた

「……………んじや……………?」

少女が寝ぼけながらも、目を薄く開ける

暫くの間、放心しているかの様に微動だにしなかった少女だが、ゆつくりと、周りの状況を確認するかの様に顔を巡らせ始める

やがて少女から右方向、俺から見れば上方方向へと顔を向けて、俺と目が合う

「……………」

「……………んじ……………?」

未だに意識がはっきりとしていないのか、そのまま見詰め合う事およそ十秒

「……………ギン君おはよ……………お……………?」

「おはよう。で正しいのかどうか」

呆けた挨拶をしながら徐々に覚醒しつつある少女に一応返事をしつつも、来るべき事に対して構えておく

「……………つにゃああ!?!」

(解りやすい事で)

飛び起きる様に体を起こし、そのままバランスを崩してベンチから落ちかける少女の背中に支える様にして腕を差し入れる

そのまま上体を起こしてやると、顔を赤くしながらも何か言いたげな少女の姿が

「なんだ?」

「うう…何だか全部見透かされてるみたいで恥ずかしいの」

「解りやすいからな、お前」

「あつ」

そんな一悶着がありながらも、改めてベンチに座りなおす少女

不意に、自分に掛っているマントの存在に気づいた少女がこちらへ顔を向ける

「そついえばギン君。これ、ギン君のなの？」

「ん、ああ。まあ一応」

そっかー。と返事をしつつマントを手に取り、しげしげと眺めている少女

「ありがとねギン君。これ返しておくの」

少女からマントを受け取りつつも、思っていた事を言うため口を開く

「それはいいんだが…時間大丈夫か？」

「え？…えーつと……にゃっ?!」

携帯を開いて時間を確認し、体を強張らせる少女

マントを霧散させつつ携帯を覗き見ると 19時48分

(結構時間経っていたんだな)

「ど、どうしよ…! 時間凄く遅くなってるよ!? もしかしたら誰か帰ってきて……」

意外と時間が過ぎていた事に驚きつつ、慌て始める少女を横目に一言

「そうかもな」

「ギン君ひどい! そんな他人事みたいに〜!」

他人事だからな。と返すと今度はふて腐れそうな気がしたので、話題を逸らすための言葉を言っておく

「まあ周りを見ながら落ち着け」

「むー！ そんな誤魔化しは通用しない……の……？」

そう言いつつも素直に周りを見る少女、俺もその景色を眺める

夜の公園。空はすっかり闇に染まり、星と月が光っているだけ

だが公園内は夜とは思えない程明るい。それは何故か

「…きれいなの…」

ライトアップされた木々に絡みつくように巻かれた様々な飾り

園内の適当な場所に配置されている多種多様なオブジェ

公園の全てが。海の手前にある手すりや、街灯、よく見れば椅子に至るまでがクリスマス色に染まっていた

（こづいつのは当日のみだと思っていたが……この世界では違ってみ
たいだな）

その光景に見入っている少女を横目にそんな事を思う。こづいつのをサービス精神旺盛とでも言うのだろうか？

まあそれはそれとして、少女よ。時間は大丈夫なのか？

「時間」

「……はっ!？」

ぽつりと呟いた言葉にビクッと反応する少女。慌ててこちらを見て急かしてくる

「そ、そうだったの! 早く帰らないと…」

「走るとこけるがな」

「……ギン君がさっきから苛めてくるの」

(事実を言っているだけだが)

そんな会話をしつつ公園を後にしようとして、入り口付近で少女が後ろを振り返る

「……どうせなら、ゆっくり見たかったなあ」

そんな眩きを漏らす少女に俺は

「なら明日も来るといいさ。今度は家族でも誘ってな」

そんな言葉を返し、歩き出す

「……来てくれるかなあ……って！ ギン君置いてかないで欲しいの！」

公園を後にする俺と、その後を慌てて追う様にして歩く少女。どうやらこけるという言葉覚えていたらしい

まあ、それでもこけそうになりかけているのはご愛嬌といった所か
苦笑を浮かべつつ視線を空へ。いや、正しくは落ちてきた物へ

「あ……雪なの……！」

少女の発した声と同じ事を思いつつも、真白の雪を目で追う

「公園のイルミネーションといい、雪といい。随分豪華なクリスマス前夜な事で」

そう呟き、笑みを浮かべる

ふわふわと落ちてくる雪を見て、少しだけ気分が踊る

俺はこの時、浮かれていたのだろう

少女の父親の事が無事に終わった、その安堵感故に

第十話 『願いの言葉』 (後書き)

第十一話に続きます

さて、前回後1〜2話で終わるんじゃないかな？なんて言ってますが

すいません。もう1話増えます。もしかしたらまだ増えるかも…いや、でもそれはさすがに……云々

時間的に次の投稿はおそらく日曜日か、それ以降という事になりそうです

第十一話 『終わる時』(前書き)

その姿を見て、わたしはどう思ったのか

幻想的？ ううんそれもあるけど違う

怖い？ ううん、きつとそれとも違う

ただ、見惚れていたんだ

銀色の粒子を纏い、わたしの前に佇むその姿

体の所々が傷だらけで、片腕が無かったりするけど

そこから出ている銀色の粒子は、人間ではあり得ない光景だけど

怖い、という感情は……正直、少しあるけど

でも、彼は ギン君は

わたしが思わず名前を読んだ時

わたしの目を見て、必死な顔で呼んでくれた

“なのは” わたしの、名前を

それが、何故だかとても嬉しかった

第十一話 『終わる時』

(……何をしゃいでいるんだか)

暫くして冷静さを取り戻した俺は、言葉には出さず自分の心の中で激しく落ち込んでいる

先程はらしくなかった。意味も無く少女を気遣ったり……いや、それを言えばバスで余計な一言を言ったのが始まりか

過去の自分を激しく詰る^{なじ}。無駄に親切心を出してどうするといふのだ
そうなれば別れる時、無駄な情が出てくるかもしれない

(高町士郎に對しやれるだけの事はやった……もう、俺がここにいる理由は無い)

俺がここから居なくなる時、取り巻く環境が変わっていなければ少女は再び元の状況に戻ってしまう

だが、そこに高町士郎が居れば……少なくとも、元より酷い事にはならないだろう

上手くいえば少女は一人でなくなり、俺も無駄な気を使わずに去ることができる

(結局は、自分の為)

無駄な罪悪感を抱きたくないから。だから少女の父親を助ける為行動した

そこに少女への恩返しのないかと言われれば……

(さて、どうなんだろうな)

良く解らない。そうとしか言えない

俺は既に心までも、化け物なのだから

(……)

そう、俺は化け物

だから思っではいけない

誰かと一緒に居たいと。この世界で、少女と

(そうしてまた巻き込むか?)

湧き出てくるのは、深い呆れと激しい嫌悪の感情

(まだ懲りないのか、お前は)

自分で自分を責める。それはなんと滑稽な状況であろうか

(余計な情は出すな。縋らせるな。……縋ろうとするな)

縋る……縋っていたのは少女だけではなく……?

( )

何も、考えない

考えない様に、した

「後一日遅ければ、ホワイトクリスマスだったのになあ」

不意に聞こえてくる声。俺を手に持ち、歩いている少女の声

「ん〜……明日も雪降ってくれるといいな〜」

少女の声は、暖かく優しい

「ねえ、ギン君は明日も雪降ると思う?」

『……どうだろうな。神にでも祈ってみるか?』

「神様にお祈りするようなお願いごとじゃないよ〜……ふふっ」

冷たくなっていた俺の心が、ほんのりと暖かくなっていく気がした

(俺は……こんなにも……)

自分自身の単純さに、言葉も出ない

先程あれだけ、自分を戒めた……戒めたつもりだったのに
これではもはや

「…………え？」

急に、小さく声を漏らしながら立ち止まった少女。視線は前方……
深い暗闇に包まれた道路の先

それと同時に俺も気付く……反応が二つ、おそらくは人。しかし少
女より気付くのが遅れるとは

なんとも情けない気持ちになりつつ、意識を集中させる

『…………人の声？ いや、この声は……』

一つは聞き覚えのない女性の声……もう一つは

「お兄……ちゃん？」

そう少女が呟くと同時に見えてくる二つ人影……少女の兄、高町恭
也と

「……あつ！ な、なのは！」

「お姉ちゃん！？」

少女の姉……確か名前は高町美由希だったか？

（ああ、やはりこっちが姉だったか）

三つ編みのおさげ、その根本をリボンで括った髪型と、メガネをか
けた女性

そうなる母親なのはおそらくあの……

（……ああ、高町家の親はどうなってるんだ）

その事実にはげんなりしつつも二人の様子を伺う

おそらく二人共少女を探していたのだろう。姉の方は安堵の表情を
浮かべ、携帯を取り出している……おそらくは母親に連絡するのだろ
うか

（そうになると少女の家族は全員早目に帰ってきていたという事にな
るのだろうか）

そう思いつつも問題の……少女の兄の方を見る

「……………」

「……………あう」

先程姉の事と呼んだきり、少女が喋らない、いや、喋れない理由がここにある

全身から威圧感を出している少女の兄。それだけでなく目線も鋭く、少女は完全に気圧されている

（心配をかけたことに対して怒っている………にしては、少々大げさじゃないかね？）

思わず思考で問いかけてしまう。まあ、聞こえている筈も無いのだが姉の方も、兄の様子に気づいているのか、電話で話しつつもちらちらと様子を伺う様にこちらを見ている

そう、意識を姉の方に移した瞬間だった

「なのは」

「……え？ あうっ！？」

パンっ！

弾けるような音がした。少女の手にあつた俺が空中へ投げ出され

「恭ちゃん！？ なのは！」

少女の姉の悲鳴に近い声が聞こえる。意識を姉から少女へ……地面に横向きに倒れている

（ あ？ ）

思考が止まる。先程まで自身を苛んでいた冷たさも、自身を包んでいた暖かさも消える

甲高い音を立てて、歩道…コンクリートを転がる俺

少女の兄の視線が、一瞬こちらへと向き、少女へと戻る

「なのは、今まで何をしていた」

「…あ…う」

「答えろ、なのは」

答えられる状況ではないことぐらい、何故解らない

「恭ちゃん！ 何してるの！？ ……え？ う、ううん何でもないよお母さん」

「なのは……何故、答えない？」

「恭ちゃん！ そんな言い方無いでしょ?!」

それが、家族に向ける言葉なのか？

「う…う。 し、しごめんなさ」

「理由を聞いているんだ。なのは」

「……あ」

ふらふらと、手を地面に付き立ち上がるようにする少女

それを冷たい目で見下ろす兄

その状況を止めようとする姉。だが携帯の向こうの相手の対応をしながらでは……

「家族に、心配をかけて……その理由はなんだと聞いているんだ」

お前が……言うのか

少女に向かって歩き出す兄。それを見て、体を強張らせる少女と

「恭ちゃん……！ お母さん、ちょっとごめ……うっん、何でもないから……」

混乱しているのか、携帯を切るという判断すらできない姉

少女の目の前で止まる兄。見上げる少女

「なのは」

「いっ、いっめ」

怯える少女に兄は再び手を

「恭ちや　　!?!」

「なっ!?!」

ドンッ!

兄が後ろへ跳ぶ、先程まで居た地点に突き刺さる何か

「……………」

いや、それは……………“人型”の俺の足

「貴様…誰だ?　いや、どこから……………」

警戒しながら俺に話しかけてくる兄。だが俺はそれに応える余裕は無い

少女へと視線を移す。茫然とこちらを見上げてる少女の顔。目尻には涙と 赤い右頬

(……くくっ)

笑う。嗤う。なんだこれは。なんだ、この状況は

少女は確かに遅くなった。その事で兄は 家族は心配したのだから。それはいい

悪い事をしたら叱るのは当然だ。そうでなければ学習しないし、悪い事だと認識できない。それはいい

では何故話を聞こうとしない？何故聞こうとする前に殴った？何故お前はそんなに

「お前が、言うのか」

「……何？」

胸の中で疼き、暴れるこの感情は何だ？ いや、今そんな事はどうでもいい

「お前が言うのか、と言ったのだ高町恭也」

「…何故名前を……いや、それより質問しているのはこちらだ。答えろ」

「え……え？」

睨んでくる兄、混乱している姉、そして

「……っ」

後ろから地面を蹴る音が聞こえた。どうやら少女がこの場から逃げ出したようだ

「ま、待てなの」

「家族に心配をかけて……ねえ？」

少女を追おうとした兄の前に立ち塞がる

質問に答えないのはお互い様、無視して感情が赴くままに言葉を吐き出す

「そんな台詞、よく吐けたものだなあ？」

何故か気圧される様に後ろへ一歩、後退おちする兄

「な、何…？」

「……あ、あ」

よく見ると姉の方も顔を青ざめさせている。だがそんな事はどうでもいい

続きを言おうと口を開き

「……あ？」

反応が一つ消える。いや、範囲外に出たのか

突然話すのをやめた俺を、困惑の表情で兄の方が見ているが無視して、知覚範囲の拡大

……再び反応。どうやらまっすぐ走っている様だが……その先は丁字の交差点か

(それにしても、こつこつという時はこけないんだな)

そんな場違いな事を考えてしまい、さっきまで渦巻いていた感情が霧散してしまう

「……ちっ、面倒な」

「おい、さっきから何を」

「かといってこのまま放っておく訳にもいかんか……やれやれ」

何やら話しかけてくるのを無視して二人に背を向けると、少女を追って走り出す

(……こけてはいないようだが……そこまで早くないな、これならすぐに)

「おい！ 貴様無視するな！」

そんな声が聞こえて横を見ると、並走する少女の兄が

後方からもう一つの反応も付いて来る……どうやら姉も追って来たらしい

(……………まあいいか)

別に追ってきてても何も問題は無い。何やら色々と話しかけてくる声
を無視して走っていると、前方に少女の姿

(よし、もうすぐ追いつけるか)

幸いにも信号は青から赤へ変わるうとしていて、これなら止まった
際に追いつくことが

「……………は？ いや待て待て」

少女は信号を見てないのか、そのまま交差点へ突っ込んでいく

(しまった、よく考えれば今のあいつは……………)

そんな事を考えてももう遅い。少女はやたら長い横断歩道の四分の一まで行っている。運がいいのか現在道路を走る車の姿は確認できない

「なのは!？」

「なっ……くっ!」

少女の置かれている状況に気づいたのか、姉の叫び声が聞こえ、兄は走る速度を上げ……いや、そんな生易しいものではない

いきなりその姿が霞んだかと思うと、気付けば5m程先にその姿があった

(……なんだ、今のは?)

いや、そんな事は今はいい。とにかくこれならすぐに追いつく事ができるだろう

既に兄の姿は俺から約15m離れており、少女まで後20mといった距離まで近づいている

どんな方法を使っているのかは知らないが、任せても大丈夫か

そう油断した瞬間だった。少女の兄がいきなり体勢を崩したかと思

うと、走る速度が急激に減速し始めた

「恭ちゃん!?!」

後ろからの叫び。叫びたいのは俺も一緒だが今はそんな事よりも……

「おい！ 何をしている!」

「はあっ……はあっ……げほっ!」

走りながら咳き込む兄。それと同時に地面に広がるのは……赤い液体

(……血？ おいおい、何でこの場面で！?)

いきなりの状況に混乱するが、事態はもっと悪くなっていた

少女が走る交差点に突っ込んでくる反応が一つ　これは…

「おい！ 戻れ!!!」

なりふり構わず叫ぶ。声が聞こえたのか体を震わせこちらを向こう

とする少女

だが

「　　っ!？」

いきなり止まるうとしたからか、こけてしまう少女

「しま　　」

自分の失策に苛立つが、今は後回しだ。それよりまずい、あの位置は　　!

遠くから何かが聞こえる。いや、クラクション。反応の質量確認
大型、トラック?

少女の顔が横を向き、驚愕に染まる。その体を照らす光。鳴り響く
クラクションとブレーキ音

反応が遅い　　居眠りでもしていた　　どうでもいい　　少女までの距離約20m　　再び加速する兄

だんだんと景色がスローモーションになっていく感覚。知っている、この感覚は知っている

まずい

少女の顔がこちらを向く

兄と少女との距離 15 m

後ろから

悲鳴

まずい…

少女が口を開く

兄と少女の距離 10 m

再び崩れるその体

まずい…！

少女の口が動く

兄と少女の距離 9 m

トラックとの距離 9 m

まずい！

少女の目が俺を見る

何？

(違うだろう)

そこは兄を見るべきだろう。今は少しおかしいのかもしれないが、お前は言っていたじゃないか。凄く便りになると

少女の目に涙が溜まる   トラックとの距離 7 m

兄が駄目なら姉を頼れよ。家族に助けを求めろ。何故俺を見る！

少女が口を動かしている   兄と少女の距離 8 m   トラックとの距離 6 m   後ろからの反応が加速   俺を追い越していく姉

駄目だ、今更遅すぎる、間に合わない

少女が口を動かし続ける   トラックとの距離 5 m   姉と少女の距離 19 m   俺との距離 22 m

目から涙が流れる   少女の口が

ギ
ン
く
ん

それを見て、止まる

息が止まり、思考が止まり、音が消え、流れていた光景が止まり、
体が止まり、核が轟いた

起動

体が止まった事により倒れる様に前のめりになる俺の体勢

全システム強制起動

それでも顔だけは前を 少女を見て

エネルギーを脚部に集中

身体からナニカが溢れる、同時に全身に走るのは身を裂く様な衝撃

目標地点までのルート設定 完了

こちらに向けて手を伸ばす少女と、地面に手を付きまるでクラウチ
ングスタートの様な恰好になる俺

点火
i g n i t i o n

「なのはあああああああああッ！！！」

叫ぶと同時に、右足元で爆発が起きる

爆音に衝撃波、砕けたコンクリートを撒き散らしこの身は加速

地上すれすれを飛行している状態で、再び左足で虚空を“蹴る”

更に加速。流れる景色はただのぼやけた線。だが少女の姿ははつきりと見える

少女とすれ違い様掴もうと腕を広げ 断念。この速度だと少女の体が持たない

別の方法を思索 決定。

少女まで4 m程離れた場所の虚空を右手で“掴む”と減速 無茶な行動により腕フレイムにひび、問題なし

少女から人二人分程前方に着地 衝撃。コンクリートが抉れ、破片が砕け散るが事前に張ったシールドにより少女は無傷 問題なし

少女から3 mの位置にトラック。予想通り大型。砂塵によって見えにくいがフロントガラスから見える運転手の驚愕の顔

俺から2 m 1 m横にトラック。現在位置に力場を形成。自身を

この場に固定。右手を向ける 衝撃、轟音

「グウツ!?!」

「ッ!?!」

少女が何か叫んでいるが聞こえない

右腕耐久度残り39% 力場残り53% 右手保護エネルギー
を力場に 完了

右手耐久残り11% 何か折れる感覚、問題有り 力場39%
%、予想より消耗が激しい

方法を思索 決断。受け止めるのを諦め、受け流す

トラックの進行方向をずらす 完了 右手耐久残り1 0%
何かが無くなる、無視 力場残り21%

トラックが少女の左方2mの地点を通過 音により何かに激突と
判断、減速 更に別の何かに衝突、停止。問題なしと判断

自身に掛る力を相殺 ^{エネルギー} 完了。力場残り9%

状況、終了

「ハア……………」

口からエネルギー残滓を排出し、各機能を順に停止……………完了

改めて周りの様子を見てみる

視界は砂塵と鈍い銀色の粒子に覆われており、2 m先になるとほとんど何も見えないぐらい視界が悪い

自身が立っている地面は足の形に添って抉れ、砕けている

視線を横へと向ける。ブレーキ跡が砂塵と粒子の先に続いているが、その終着点はぼんやりとしか見えない

(あの方向なら……………さっきの音はガードレールか……………?)

何かを引っ掻く様な……………まあそんな生易しい音でもなかったが、そんな音がしてたから多分そうだろうと予測

……………そのまま、視線を下へと移す

「……………あ」

少女の姿を確認。放心していた様な顔が、俺と視線が合わさる事に

よって驚きに染まる

目が見開かれ、口がただ開閉する……自身の状況を確認 完了

(なるほど、これはひどい)

コンクリートの欠片で切ったのか、頬と全身数力所に裂傷。足は右足の膝から下に所々ひび

そして右腕 肘から先が無い

(そりゃ、驚くよな)

酷い状態……人で言うなら怪我なのもそうだが、その怪我した場所から“銀色の粒子”が漏れているのだから

右腕に至っては漏れているというよりも吹き出ていると言った方が正しいか

(まあ、そのおかげで目くらましにはなっているか?)

辺り一帯には人の気配……時間の経過と共に徐々に増えてきているみたいだ。レーダーもショートしているため良く解らない

まあ今はとりあえず……

「……無事か？」

「ッ！」

返ってきた返事は、体の震えだった

（ああ、終わりか）

それを見た感想は、そんなものだった

まあそんな大げさな事でもない。少女との利用し、すがり利用される生活すがりが終わるだけの事だ

それだけの事だ

少女から視線を外す。何となく、見ていたくなかったからなのだが

「……な!？」

その逸らした視線の先、とんでもない光景が飛び込んでくる

こちら　正しくは少女に向かって倒れてくる電柱

トラックが止まる時に聞こえた衝突音、その正体を理解するが、遅すぎる　！

(ここまで来て……くそッ！)

咄嗟の事で体が思うように動いてくれない。少女が俺の声につられる様に左上を見て、固まる

駄目だ、かばう様な余裕は無い。少し乱暴だが突き飛ばそうと右腕を……

(　　まっすっ)

右腕は無くなっていた事を忘れていた。駄目だ、左腕が届くのが間に合わない

「きゃああああ　あにゃ!?!」

少女が悲鳴を上げ電柱がぶつかる瞬間、少女の姿がその場から忽然と消えうせ、電柱が地面とぶつかり破碎音を撒き散らす

辺りからは悲鳴、おそらくは野次馬のだろう……それよりさっきのはもしかして…

「あいたた……やれやれ、少し無茶してしまったかな？」

視界の先、粒子と砂塵に遮られた向こうに二人分の人影。そこから聞こえてきたのは優しいげな、男性の声

「え……お、父さん……？」

（ああ、本当ですか）

一瞬だけ視界に移った影、病室で見た高町士郎の姿に見えたのだがまさか本当にそうだったとは

全身から力が抜ける。なんとというか、色々と言いたいことはあるが

（確かにできるだけ早く……とは言ったが、当日に目覚めてくるとは思わなんだ）

それもこんな狙ったようなタイミングで

「……ハア……」

溜息を吐いて、座り込みそうになる体をなんとか気力だけで支える
その間にも少女の驚きの声と、父親の心配するような声が聞こえてくる

「なのはー！ー！」

「なのはあ！ 返事をしてっ！ー！」

兄と姉の、少女を呼ぶ声も聞こえてきた……ああ、そうか

(良かったじゃないか……これでハッピーエンドだ……)

思わず嬉しくなる。自分が誰かと関わって初めて何も失わずに済んだ終わり方だ

いや、むしろ誰かを救えた分もつといいだろうか

まだまだ家族間の事とか、色々問題はあろうが……その辺は俺が関わるようなことではない

(は……はははっ)

良かった。自分もまだ捨てたもんじゃないのかも知れない。やり方次第では誰かを救う事も出来ると知ることができたのだ

後はこのまま居なくなればいい。そうすれば俺の存在は時と共に忘れて、少女は平和な日常を

ズキッ

痛みが走る　ああ、体がぼろぼろだしな………なんというか外面もだが、内面も酷い有様だ

(ん？　もしかしてこれ駄目じゃないか？)

むしろ少女に拾われた時よりも酷くなっている気がするが………ああ、そうか。強制起動させたんだっただか

そりゃ直りきってないない物を無理矢理起動させれば壊れもするか、と納得しつつふらふらと一歩、後ろへ

(少女にはもう頼る訳にもいかないし………さて、誰か他に魔力保有者は　ああ、そうか)

レーダーも駄目になっていたんだっただな……そう思い出すと同時にふと思う

(何で、俺はここまで生きようとしてるんだ?)

そんな疑問が湧いて出る……が、どうやら深く考えている余裕は無いようだ

遠くから響くサイレンの音　おそらくは誰かが救急車か警察を呼んだのだろう

(見つければ面倒だな……そうと決めればとりあえず逃げるか)

黒いマントを取り出し纏う。見た目ぼろぼろで怪しさ満点だが、所々銀色の粒子が出ている体の方がよっぽどマズイ

粒子と砂塵に紛れる様に、後は勘で人が少なさそうな方向へと歩き出し

ズキンッ

思わず足が止まる。痛みはますます強くなり、感覚もどんどん短くなっていく

本格的にまずいかな？ そんな事を思いつつも前へ

ズグンツ

「ア グウツ…！」

思わず左手で胸を押さながら膝を吐く

息が荒い、手が震える、視界がぶれる……そこまで俺の体は

(……違う、よなあ)

ぼつりと、そんな言葉が浮かんで、消える

顔だけをなんとか後ろへと向ける 正しくはその先に居るであ
ろ、少女へと

利用し、利用された関係の少女

ただ、それだけの少女

会ったばかりの俺に笑顔を向けてくる、警戒心の無さすぎる少女

愛されて育ってきたのであろう、お人好しの性格の少女

嫉妬すら覚えるほどその存在は眩しくて

とても、疎ましい

(……いや)

やめよう

恐怖心故に嘘を纏うのはやめよう。今だけは

せめて、最後だけは

(……嬉しかった)

俺に、笑顔を向けてくれる事が

(…温かかった)

久しぶりに触れる人の、少女のぬくもりは

(満たされたんだ)

信用してくれた事が。料理を嬉しそうに食べてくれた事が……

ああ、そうだ

「楽しかったよ。高町なのは お前との生活は」

零れた、本音

少女には聞こえる筈もない、小さな声

今度こそ、歩き出す

見え辛い視界の先、紛れる様に歩き出す

今度は振り返らず、膝を付かず、まっすぐに

「世話に、なった」

最後にそう呟いて、粒子と砂塵の中に潜っていった

当たり前だが、返事は返ってこなかった

第十一話 『終わる時』（後書き）

今、目の前にお父さんが居る

それがどうしようもなく、嬉しかった

わたしとギン君がした事が無駄にならなかった事が

わたしがやっと、家族の役に立てた事が

とてもとても嬉しくて、泣いてしまった

お兄ちゃんと、お姉ちゃんの驚いた声が聞こえてくる

病院にいるはずのお父さんがここに居れば、驚くのも無理ないの

そういえば、ギン君は大丈夫かな？

さっき話しかけられた時、思わずびっくりしちゃったけど

体中傷だらけで、片腕なんか無くなっちゃってて

わたしのせいだよ

謝らなきゃ。沢山迷惑かけちゃった事

言わなきゃ。助けてくれてありがとうって

(きつと傷を治すために、またわたしの魔力が必要になるはずなの)

不意に、ギン君の声が聞こえた様な気がした

気のせいかもしれない　でも

「……ギン、君？」

その声は、凄く

第十二話 『デバイスは、夢を見た』（前書き）

1 2、1 3、1 4（終わり）の連続投稿と相成りました

それでは、お楽しみいただければ幸いです

第十二話 『デバイスは、夢を見た』

どこをどう歩いたのかは、覚えていない

ただ、人が居ない方向へひたすらと、ただひたすらと

そうしていた様な気もするし、何処かへ向かってひたすら歩いてい
た気もする

その果てに、気付いたら俺は公園に居た

海鳴臨海公園に

「……………ここは」

公園だろうか？ 何故俺はこんな所に……………解らないが丁度いい

人目が付かなさそうな場所であれば、どこでもいい

(何処か……どこかそんな場所は………ああ)

少女の言葉を思い出す。一人で泣く時に利用していた場所がある、と

(確か、こっちだったか…?)

どこまで頼りになるか解りはしないが、レーダーと視覚を頼りに人目を避けつつ、目的の場所へ歩く

(確か、俺を拾ったのも、そこ、だったか)

ふらふら、ふらふらと。頼りなく揺れるこの体が鬱陶うつとくしい

無駄に丈夫にできているのだ。こういう時に役立たないでどうする
というのか

揺れる体、上下左右に振れる視界。いくら力を入れようと思いつきに動いてくれない

苛立つ感情。ますます酷くなる………悪循環か

頭では解っていても体が制御できてくれない。諦め、ただ目的地に向かう事を考える

人目に付かぬよう、公園に生え並ぶ木々の合間を抜けて

「え？」

揺れが止まる。振れも止まる。目がその場所に固定される

目の前の光景が脳裏にある光景と被る

懐かしいあの故郷^{ふるさと}。そのお気に入りだった景色と

木々に囲まれた狭い広場、そこにぽつんとあるベンチ

細部まで似ているという訳ではない

辺りには自然の匂いが満ち、遠くからは潮の香りが漂ってくる

良く見たら相違点もいくつかある

木々の合間からは海が見え　今は真っ黒だが、日中であれば綺麗な蒼が見えるだろう

だが、似ている

空を見上げれば見える暗闇と、灰色の雲

雰囲気、似ている

視線を巡らせる……。「犬のフンはキッチンと飼い主が処理しましょう！」と書かれた立て看板

その先にある広い芝生とそれを囲うような茂み

「……に？」

俺が落ちていたのか？ 言葉の続きは声にならず、掠れた息が漏れた

茫然と、体の痛みも、気怠さも忘れて立ち尽くす

「は、はは……はははっ……」

声が漏れる

「ははははッ……くっはははっ……」

虚ろな嗤い声が、思わず出る

「　　なんだ」

なにも、変わっていない

あの日から。俺の日常が失われ、非日常が始まったあの日から

なにも、変われちゃいない

今まで生き続けてきた、数百年という時間の間

少しも、進めていない

あの場所から

「　　……なんだよ、それは……」

滑稽だとか、無様だとか、そんな言葉じゃ表せない

進んできたつもりだった。歪ながらも、まともでないにしても

自分なりに生きて、選んで進んで、成長してきた……つもりだった

「本当につもりだった……のだな」

非日常に身を置き、過去の日常と決別したあの日

そうしたと思っていた、あの日

でも変わっていない。進んですらいない

殺るべき事を終えて、おそらくその時ぼろぼろになった俺が何故この世界に居たのか

(これが、理由か)

目の前に広がる景色が。故郷と似た景色を持つこの場所が

(結局俺は、最後の最後まで)

意識がほとんど無い状態で、無意識に近い状態で求めたモノ(ばし
よ)

過去に捨て置いた、遠い日常に

「縫っていただけか……ッ！」

感情が赴くままに、足を地面に叩きつけ 折れる

バランスが取れなくなりそのまま草が生えた地面に正面から倒れるが、もうどうでも良かった

「
」

何か喋ろうとして、やめた

血が流れ出るかのように力が抜けていく

このまま倒れていたい そんな欲求が湧いてくる

「……………っ！…はあっ」

それは何かへの抵抗か、それとも悪あがきか。左腕を使い、うつ伏せになっていた体を仰向けにする

視界に広がるのは闇。夜の空の色と、暗い灰色の雲。いつの間に振り始めたのか、再び雪まで落ちてくる

黒と白のコントラスト。意味も無くその光景を見続ける

（ 疲れた ）

唐突に湧いて出た言葉。それと同時に睡眠への欲求

今この状態で寝れば人間なら凍死か……生憎と、俺にはそんな心配はない

だが、この体の状態ならばそう遠くない内に機能停止するかもしれない

(機能停止……か)

前にしていた機能停止とはおそらく違う。おそらくは完全なる機能
トダウン
停止

(そういえば、そうならどうなるんだろうな)

人間であればそれは即ち死と同義なのだが、俺の場合はどうなの
ろう

再起動すればまた元通りになるのか、それとも俺と言う存在は消え
てしまうのか

「それは……悪くない……？」

俺と言う意識が消える。単なる物へとなる

それが事実ならば、とても魅力的な事に思えた

ようやく完全な物へとなれるかもしれない。それは、者と物の間を
ふらふらしているよりかはずっと

(自然、だ)

そう思いつつ、意識を手放していく

視界が狭まる。黒と白の景色がだんだん見えなくなっていく

触覚が鈍っていく。自身の背中に感じていた地面の感触が消えていく

聴覚が失われていく。辺りから聞こえていた風の音、水の音、何か
の泣き声が聞こえなくなっていく

(……泣き…声…?)

ピクリと、目蓋まぶたが動いて少しだけ視界が回復する

栗色の何かが見えた

視界がずれていく

深いアメジストを思わせる様な、紫色にも見える黒色の……

「　　なの、は　　」

口が勝手に動いた。だがそれまで

今度こそ意識が落ちていく。抗い様のない速度で、強さで

落ちていく中、どこかから

温かい何かを感じた様な……そんな気がした

「　　し　　」

……？

「　　し　　はあ」

なにか、きこえる？

「　　とこ　　る　　ぜひ　　」

誰だ？

「　　？　　きろ　　お　　！」

五月蠅なまじい。眠らせて

ドスンッ！

「　　うあっ！？」

急に体に衝撃。強制的に意識が覚醒し、視界が回復　　金色？

視界いっぱい広がる金色。同時に何処からか、元気な声

「　　おーきーろー！　　死ぬぞー！　　寝るなあー！！　　」

それは雪山みたいな場所で寝た場合で、しかも対象が人とかの場合だ。俺の場合対象外なのだが

「……問題ない」

そう言っって意識を再び落として

「わたしが暇で死ぬー！ー！ー！」

「自分勝手だなあ！？」

思わずツッコミながら飛び起きた。上体を勢いよく起こすと同時に、上に乗っかっていた何かが転げ落ちる

「うひゃあ！？」

そんな悲鳴を発しつつつ転がる物体……少女を無視して辺りを見渡し

「…またここか……」

見える景色は思い出の場所、そのベンチの近くに広がる芝生の上に、俺は寝転がっていたらしい

「夢の中で。無意識で。終いには死後ですらここに縋るのか……はあ」

そんな風に呟き、溜息を溢しつつ倒れこむ……ん？死後？

（ああ……そうか）

公園で機能停止したんだって、と思いつく。直前に何かを見た様な気がするが

（……なんだったか？）

よく思い出せない。まあ思い出せないならきつと大した事では……大した、事では……

（……栗、色？ そうだ、確か栗色の何かが）

大した事ではないはずなのに、何故か必死になって思い出そうとしている自分がいた

思考をフル回転させ思い出そうと努力する。だんだんと記憶にかか
る霧きりが晴れて

「また寝ようとするなー！」

「グフウツ……！」

人体急所の一つ、鳩尾に直撃する物体、もとい少女の体

俺に人体急所は関係ないが、勢いが先程よりも段違いに強く思わず
そんな声が漏れ出てしまう

「ツ！ はあっ、はあっ つ！」

「え。あ、ちよ、ごめんっ！だいじょ」

ガシイッ！

「…………え？」

謝罪しようとしていた少女の言葉を遮る様に俺の手が空を切り、目の前の頭をホールドする

「二回に渡る妨害行動により、対象を敵と判断。
改良型圧力指アイアンクローにて
障害を排除する」

ギリギリギリギリイ……！

「え、え？ あ、待って痛い！ 痛いよなんかすごく痛いよこれえ
！？」

「エネルギーしちう私用 許可。術式構築、展開、点火あッ！！」

「みやああああああああアア！？」

少女の頭を掴んだ、否、噛む様に握り込んだ指から微弱なスパークが発生し、未知の感覚を送り込む

奇声を発しつつびくんびくんと悶える少女と、おそらく子供が見たらトラウマ物な形相をしているであろう俺

その俺の手は、まるで某光る指の如く輝いていたとかなんとか

「あうあうあうあうあ〜？」

「……………ふむ」

よく解らない声を発しつつお尻を突き出す様な、所謂プリケツ晒して倒れている少女と、どこことなくスッキリした感じがある俺という光景がそこにはある

少女の頭からは湯気が。俺の指からは煙が出ている様にも見えるが、大した問題ではない

「……………死んだ、にしてはおかしいな。それなら何故ここにあの子^{ガキ}がいるんだか」

意識を切り替えて思案モード

倒れている少女。綺麗な金の髪を左右で括って、残り^{ヘアスタイル}を背中へ流すような、ツインテールの亜種といった感じの髪型

前に見た夢の中に何故か居た、あの少女だろう。声にも覚えがある

しかしその子供が居て、場所も前と同じとなると

「……は……夢の中？　ということは俺はまだ死んでいないのか……？」

おまけにこの夢は二回目。ただの偶然という訳でも無い気がするが……

(……まあ、2、3回程度なら偶然で片づけられるか……)

そういう事にしておこう。今はそれよりも“夢”についてだ

夢は脳が記憶を整理じりするために見るものだと聞いたことがある
ならばこの少女の事も記憶にある。筈なのだが、まったくもってさ
っぱり覚えてない

(……ふむ)

倒れている少女の、正面へと回りこんで顔を覗き見る

整った眉に小ぶりの鼻。端正な顔と言っても過言ではないその容姿
目は……今は軽く白目を向いていて判別付かないが、前見た時に深
い赤の綺麗な瞳だったと記憶している

(これだけ派手な容姿ならば、覚えていてもおかしくは無いはずなのだが……)

別に俺なら、派手でなくても覚えていておかしくは無いが……まあ、そう思ったのは気分的な問題か

少しの間、そのままの姿勢で悩んでいると少女が意識を取り戻した

「はっ!?!?……え?」

「……」

少女と俺の視線がぶつかる。そのまま数秒経過した後

「……きゃー、おーそーわーねーるー……?」

「凄まじく棒読みな上、疑問形で言われてどう返せと?」

「ぬ〜…疑問に疑問で返すのは良くないよー?……よいつ…しよつとー!」

俺の返答にそんな評価を下しつつ立ち上がる少女。その動作一つ一つに無駄に元気が溢れている様に感じる

立ち上がると同時に左右に括った髪が跳ね、後ろに流した髪が揺れる

その光景は少女の容姿と相まってどこことなく神秘的で

「よしっ！ わたし復活！」

そう言いつつ両腕を空へ向かって振り上げ……ガッツポーズを決める少女

その言動は、先程まで感じていた神秘性を完膚なきまで破壊するほど活動的であった

「……………はあ」

「ええっ?! なんてため息吐くのよ!?!」

「いや、なんとなく気分的にそうしたくなっただ。すまなかった
ツインテール亜種娘」

「そ、そうなの? まあそれならしょうがないよね。誰でも落ち込む時くらい……………?」

そこまで言って何か引っかけたのか、訝いぶかしげに眉を歪ませる少女
その様子を見つつ、地面に座りなおしてくつろぎながら空を眺める

「何その変な名前!? この髪型にはちゃんとツーサイドアップって名前があるんだからね!」

「そうだったのか。勉強になったよ」

やがて気付いた少女が文句を言ってくるが、それに適当に返事を返しつつぼーっとする

色々考えようとしていたがなんだか馬鹿らしくなってしまった

(いや、そもそも考える必要は無いのか)

もう既に終わったのだ。例えここが夢の中であろうとなかろうと、遠くない内にこの身は停止する、その筈だ

返答が気に入らなかったのか、まだ何か言ってくる言葉を聞き流しながら、溜息を吐く

「はあ〜〜……」

自分でも驚くくらい深い溜息が出た。やはり疲れているのだろうか？

長い間息を出し続け、終わると同時に再び背中から倒れてしまう

そんな様子を見て、何か思う事があったのか

「……ため息ばかりついていると幸せが逃げてくからやめといたほうがいいよ〜？……それともそんなに疲れてるの？」

文句を止め、心配気な表情をしつつも、そう問いかけてくる

「……そう、なのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない」

「むー……はつきりしないなあ」

俺の答えに微妙に不満気な顔になりつつ、むーむー唸りながら何かを考えている様子の少女

その表情はとても豊かで、コロコロと変わる様は見ていて飽きないものがある

(まあ、このくらいの年頃ならこれが普通だよな)

あの少女、高町なのははちゃんとそうなっているだろうか？

今すぐは無理でも、表情豊かに笑ったり、泣いたり……子供らしく生きて行けるだろうか

(……大丈夫だよな)

少女の父は目を覚ました。後は時間が全てを解決してくれるだろう

また家族で一緒に暮らしていけるだろう……少女の話の通りの、温かい家族ならば

兄、高町恭也も元に戻るはずだ。少女を助ける時、血を吐きながらも必死になっていた様子を思い出す

(大丈夫だ、確かに様子がおかしかったが……少女を大切に思っているのは確かだろうさ)

そこまで考えて気付く。また自分に関係のない事を考えている

(……まあ、いい)

もう、どうでもいい

空を眺めつつそう思う

降り注ぐ日の光はとても気持ちがよくて、今までの事なんてどうでもよく思えてしまえるほど

ズキッ

(…そう、簡単には割り切れない、か)

面倒だな…本当に面倒だ

目を瞑り、体を投げ出す。何も考えない様に寝てしまっるのが一番だ
そうすればきつと。時間がきつと全てを

(…?)

不意に、何かの温もりを感じた

薄目を開けてみると目の前には金色……またか

「どっぴいっつもりだ？」

硬い声色で問いかける、ぴくりと少女の体が震える

「気分が落ち込んでる時とか……なんだかとっても疲れた時にね」

少女が腕に力を入れ、ぎゅっつと抱きしめてくる 俺の体を

「こっやって、お母さんにぎゅーっとしてもらうと凄く、安心するんだよ」

そう言いつつ、更に力を込めてくる少女。俺の胸に少女の上半身が押し付けられる

「凄く、元気になれるんだ…」

僅かに感じる少女の鼓動。体に染みわたってくる少女の温もり

「だから、おすそわけ」

そう言って、最後におまけとばかりにぎゅっつと力を入れると、俺の

背中に回していた腕を離す少女

目の前には笑顔の少女。眩しく、本当に元気を分けて貰える様な、そんな顔

「元気、でた？」

そう問いかけられ、なんとなく正面から見られなくなった俺は顔を逸らしつつ

「さあな」

と、どうしてもよさげな風を装いつつ言葉を返す

視界の横に見える少女の顔は、最初不思議そうにしていたものの、俺の様子に気付いてか

「……ニヤニヤ」

そんないやらしい笑顔を浮かべていく。なんとなく…じゃない。凄まじく不愉快だ

「そっかそっか　　こうかはばつぐんだ！って事だね」

そんな勝手な解釈をしつつ、照れちゃってカワイ〜 などとほざく少女に

「何時までも乗っかっているな。重いぞ」

などと憎まれ口を返してやると、ベシツと小気味のいい音をさせながら頭をはたかれた

「むうー！ あなた素直じゃないっ！」

「はっ。そいつはどうも」

「ほーめーてーなーいー！」

上体を起こしつつもぎゃーぎゃー喚く少女の脇に手を入れ、無理やりどかす

へんたーい！とか、やらしー！とか聞こえるが無視する

ゆっくりと、頭を振りながら立ち上がる

先程までの倦怠感けんたいかんはもはやあらず、どこかスッキリした気分だ

(単純だなあ)

そんな自分に苦笑。だが、なんとなくだが悪い気分ではなかった

この先どうなるか解らない。ここが夢の中なのか、そうでないのかも解らない。だが

「とりあえず寝る」

「結局それなの!？」

驚愕の表情を浮かべる少女を放ってベンチへと向かって歩いていく

「やる事も無ければ、する事もないんだ。なら寝るのが一番だろう」

寝るのは好きだ。色々あったからか、もうずっとまともに眠れることは無かったけど

いや、少女に拾われた時はどうやら熟睡していたようだ

自分の意志で寝る事と、気が付いた時に寝ているという事は、同じ様で、違うのだ

ベンチに辿り着く。一応手で軽く払ってみるが、汚れらしき物は確認できず

「 よっ…と」

深く、背もたれに全身を預ける様に座り、視線を上へ

快晴の澄みきつた青い空

漂う自然の香りはとても安らいだ気分になさせてくれる

全身を弛緩させていく。今なら、熟睡できそうな気が

「とやあー!」

………熟睡、できそうな気がしたんだけどなあ

顔を横へ向けると、そこには笑顔を浮かべる少女の姿

おそらくは先程感じた衝撃具合から、飛び乗ってきたのだろう……
本当に無駄に元気だな、こいつ

「で、まだ何か用か？」

「わたしも寝る！」

「…………ご勝手にどうぞ」

そう返し、顔を元に戻す

まあベンチは広いんだ。人ひとり増えたところで大して…たい、して……

「今度はなんだ…？」

「ひざまくら！」

ああ、まさかそのまま返してくるとは予想できなかった

「退いてく」「さっきのハグのお返しは？」「…………ご勝手に」

無駄な抵抗はやめた。こいつは何を言っても退いてくれそうにない気がする

色々諦めつつも空気を深く吸い込み、ゆっくりと吐き出す。つまりは深呼吸なのだが

(俺は、ずっとこの場所に縋っていた……)

気分を落ち着かせると同時、浮かび上がってくるそんな暗い思い

ネガティブ思考

その事実は変えようがないし、もしかしたら未来永劫変わる事も無いのかもしれないが

(まあ、しょうがないよな……ここは、こんなにも気持ちいいんだ)

そういう事にしておく

そうやって少しだけ、前向きに考えておく

いや、果たしてそれは前向きなのかどうかは解らないが

今まで進めていなかったというなら、何も変わっていなかったというなら

そう誤魔化しながらでも、前に進んでいこうと思う

もう先が無いというならば、今、この瞬間だけでも前に

そう、思う事ができた……きっと、その原因は

ゆっくりと流れる雲。風に流されていく葉。のんびりとした光景

ベンチに座りその光景を眺める俺と、その膝に頭を預ける、名前も知らぬ少女

「……………」

言葉の代わりに、行動で今の気持ちを表しておく

乗せられた手の感触を確かめるように、頭を動かしてくる少女

「……………やっぱりあなた、素直じゃないね」

どことなく嬉しそうな、そんな雰囲気滲ませつつもそんな事を言ってくる少女に対し

「…そうかい」

そう、短く返しつつ目を閉じた

意識が薄れていく。どんどんと落ちていく

ああ、今なら本当に

ゆっくりと

眠れそうな気がする

第十三話 『人と物とモノと 異常者と』

意識がゆっくりと覚醒していく

四肢に感触が戻っていく。それを認識しながら最初に思った事は

（なんだ、死ななかつたのか）

そんな、後ろ向きとも取れるものだった

実際の所、あのままあの場所で死んでしまったとしても後悔はしなかつた気がする

だが

（生き延びてしまったのなら仕方がない。これからも精々醜く足掻いてやるさ）

意地でも前に、進んでやる

新暦61年12月25日 PM 08:30

「……………」

ゆっくりと、目を開ける

視界に映るのは飛び込んでくるのは、ここ二日ほど見続けてきた景色

高町なのはの部屋。その天井

「……………は？」

思わず気持ちが声となって漏れ出る

ありえない光景が見えたのだ。それくらいは許して欲しいと思う

右横に気配　やはりレーザーはほとんど使い物にならないから、
勘みたいなものだ

(……………どうして)

顔を横に向けると見えた光景は予想通りでもあり、予想外でもあった

眠る少女……いや、高町なのはが居た

その顔の目元から頬にかけて、まるで先程まで泣いていたかの様に濡れており、シーツにはシミができていた

なのにその顔はどこか安らいであり、その両手は俺の右手に添えられている

(……右手が直っている)

その様子から、少女が俺を拾ってからそれなりの時間が流れている事が予想できる

最も、外観だけの中身スカスカ状態だったが

しかし腕が無くなっていった状態から、外観だけでもなんとか事になった事に感謝すべきだろう

(…最後の最後まで、迷惑かけっぱなしだな。お前には)

少女を起こさぬ様そつと腕を抜く。そのままベッドから降りると、眩暈によく似た感覚が俺を襲う

平衡感覚にも異常をきたしているのか。どうやら相当派手に壊れたようだ

(参ったな……まあ、それでも)

振り返り、少女の体に布団を掛け直した後、目元に溜まった涙を指で拭う

強張る体を無視してなんとかやり遂げる

(これにもいい加減慣れてきたな)

恐怖心から来るこの感覚。誰かに意識して触れると、触れているとどうしても強張ってしまう

時々平気な時もあるが、それは恐怖心よりも別の感情が上回っているだけに過ぎない

もはや直ることは無いのかもしれない。いや、そもそも慣れる機会すらも無いかもしれない

これから先、誰かと共に過ごす機会が果たして俺にあるのだろうか

(……ふう、駄目だな。やはりどうしても後ろ向きな考えになってしまうか)

そう直ぐには変わらない、変われない。解ってはいてももどかしい

だが、今はそれでもいい

行こう。前に進むと決めたのだから

「ありがとう」

その言葉は、何に対しての言葉だったのか　色々ありすぎて、
特定などきつとできはしないだろう

部屋を出て、今度は後ろを振り向かず扉を閉める

闇に包まれた廊下を歩き、突き当りの階段を下りていくと、段々と
明かりが見えてきた

(……少女の、家族か)

何か一言掛けていくべきか否か。だが世話になったのは事実であるし

(お宅の娘さんと一緒に居てごめんなさい。とでも謝ってみるか?)

謝罪はするべきなのかもしれないが、相手はこちらの事をほとんど
知りはない

ならばこのまま出て行った方が何の後腐れも無く

ガチャリ

そんな事を考えている俺の目の前、リビングの扉が開き誰かが出てくる　少女の姉か

「……あ」

「……げ」

何という事だ、向こうから接触して来るとは予想外だ

いや、よくよく考えれば今の俺は気配どころか、足音すら消していない。そもそもそんな余裕が無い

……気付かれる筈だ。それを少女が起きたのだと勘違いして出てきたのではなからうか？

俺と少女の姉は最初の一言以外、互いに無言で睨み合う……いや、ただ様子を伺っているだけか

(さて、どうしたものか)

このまま素通りするか、一言謝っていくか……それともジョークでも飛ばしてみるか？

(……進もうと決意したのはいいが、変な方向に向かっていている気がする)

自分自身の思考にそんな感想を抱く。ふらつく様に壁に手を付き、落ち込むかの様に頂垂れる

「え……つと、大丈夫？」

「……大丈夫だ」

心配されてどうする、俺

気を取り直して軽く会釈をすると、そのまま横を通り過ぎようとする

今の俺は不安定だ……自身でもはっきりと自覚できるくらいに。故にこれ以上余計な事を喋らずに出て行くこうと思ったのだが……

「あ、ちょ、ちょっと待って！ 話があるの」

(……本^{まじ}気?)

少女の姉に誘われるがままりビングへと連れ込まれた俺

正直な話逃げ出したかったが、向こうから話があると云われて逃げる訳にもいかないだろう

(こっちは迷惑掛けた側だからな……)

いつの間にか自分の大切な家族の傍にいた、正体不明の物

いや、あの現場を見ている姉からすれば、俺は化け物に見えている筈だ

有り得ないスピードで加速し、物理法則を無視した動きをした上、トラックを受け流すなんて真似をかましたのだ

おそらく現場も色々ひどい状況だったのではないだろうか……最初に踏み抜いた地点とか特に

まあそれらを見たと仮定すれば

(目の前の姉の様子も納得する……訳だが)

リビングにあるソファ。その一つに腰かけた俺の真正面に少女の母親、そしてその横に姉が座るといふ形だ

彼女はとにかく目を合わそうとしない。無駄にびくびくしているし、若干母親の陰に隠れる様にしている

そこまでの態度なら納得できるのだが……

「えー……っと、つ、つまりギン君を拾ったのが家の、その、なのは……だったんだよね？」

「……ああ」

「そ、それで今日まで……なのはとい、一緒に生活してた……って事で、いい……のかな？」

「……まあ、そうなのだが」

こんな風に、積極的に質問してくるのは姉の方なのだ

いや、少女から事前にある程度の事は聞いていたみたいなので質問よりは確認と言った方が適切か

そうして受け答えをしている内に気付く事が一つ。この姉、目線を合わせない割には……

(……そこまで、怖がっていない?)

俺を見る目に、恐怖心があまり含まれていない様に感じる……俺がそう感じているだけの可能性もあるが

そういった予想を含めた観点を踏まえて観ると、恐怖しているというか……

「……びびっている?」

「なあ!? 何かなあギン君!」

思わず声に出してしまい、それに過剰に反応しつつ裏返った声で反応する姉

なんでもない、と適当に誤魔化しつつ先程の反応について考える

……恐怖と言うほど強い感情ならここで聞いてこないと思う。まあ、あくまで自分の経験上でだが

大抵は悲鳴を上げてそのまま黙るか、意味も無く謝るか。いや、そもそもこうやって話そうと考えないか

(判らん……どういつつもりだこのメガネは)

判らないといえば母親、高町桃子の方もそうか

こちらは最初の自己紹介以外喋っていない。だが……目線を逸らさない

俗に言う静観状態か。俺を前にしても恐怖心も何も感じていないかのような振る舞いだ

現場を見てないからか？ いや、だが横に居る姉の様子から多少は警戒してもおかしくない筈だと思うのだが

(判らん……まったく解らん)

判断が付かなければ、理解もできない。かつて体験した事のないこの状況に、俺は困惑していた

正直言って居心地が悪い。さっさと謝罪でもなんでもして直ぐに出て行くつもりだったのに、かれこれ30分は経過している

長居しすぎだ……あまり遅くなると少女が目を覚まします厄介な状況になりかねない

(……そういえばあいつも、どういつつもりなんだか)

何故俺を、俺という存在(異端)を目の当たりにしても尚連れ帰ったのか

頭の中がグルグル回る。思考が煮詰まっている事は解っているが、こればかりは考える事を止めれない

そんな俺に声がかかる。自己紹介の後、静観していただだけの少女の母親からの声が

「ギンさん」

なんとなく、その呼び方はやめてくれと言いたくなった

その欲求をなんとか抑え、視線で先を促す

それを理解しているのか、返事の有無は気にしてなかったのか。高町桃子は不意に立ち上がり、深々と腰を　はい？

「なのはの事……夫の事。本当に、有難うございました……！」

理解の範疇はんちゆうを越えたその光景に固まる。そんな様子にはまるで気付いてないのか隣の姉も慌てて立ち上がり、母親に続くかの様に

「あ、ありがとございました！」

姉もまた、母と同じ様な姿勢になりつつそう言ってくる

「…はあ、それは、どうも…？」

思わずそんな気の抜けた返事しか出てこない。いや、こんな反応以外どうしろというのだろうか

本気で理解できないこの状況。その体勢のまま微動だにしない母と姉。座ったまま固まった俺

その状況を壊してくれたのは、リビングのドアを開けて入ってきた

「…おや？ もう起きたんだねギン君」

高町士郎。少女の、父親

それによって、深々と腰を折った 所謂お辞儀状態から元の姿勢に戻る母と姉

この状況から解放された。その事には感謝するが一つだけ言いたい

(それはこっちの台詞だ、高町士郎)

さて、高町士郎の乱入により場に漂っていた理解できない空気は消え去った　かに思えたのだが

「いやあ、あの時は参ったね。大切な事を言われた気がして目が覚めると今度は胸騒ぎ。そのまま飛び出す様に病院を抜け出して何かに突き動かされるかの様に走った先見えた物は、なのはに電柱が迫っている光景ときた。思わず神速を使っちゃったよ。おかげで体中が痛いなんの」

寧ろ、先程より悪化した気がする。いや、気がするではなく悪化している

しかしあれだ。ハツハツハ、なんて笑ってるがそれは笑い事にして良いものなのか？

「もうあなただったら……病み上がりの体でそんな無茶して」

もっともな意見だな。もっと言ってやってくれ

「でも、そついう所が……」

え、惚ノロケ気に繋がるのか？ そついう流れだったのか？

「もう！ お父さん。お母さんも！ ギン君すっかり置いてけぼりになっちゃってるよ？」

いつその事このまま遙か後方に置いていってくれないか。いや、そもそもお前、さっきまでの態度は何処行った

「いやあすまない。…ギン君、私が色々迷惑掛けたようですまなかつたね」

ありがとう。なんて言ってるが迷惑掛けたのは俺の方で

「でも良かったわ……なのはにギン君みたいなお友達ができて。ずっと、私の勝手に寂しい思いさせてしまったから」

暗い雰オーラ囲気を纏いつつそんな事を言ってくる少女の母

友達…？ 友達ってどういう意味だったか？ 俺は言葉の意味を覚え間違えていたのだろうか？

それと何時の間にギン君になったのだろうか？ 判らない

「お母さん……私もだよ。色々あって疲れてたのは確かだけど、話し相手ぐらいには……」

落ち込み、俯く姉。だがすぐに顔を上げると俺の方を見てくる

「ありがとねギン君。なのはと一緒に居てくれて。不甲斐ない私の代わって……」

よく見ると目尻に涙が溜まっている。自身が情けないのか、言葉の端々に後悔の念を滲ませて

（ ）

駄目だ。もう耐えれない

衝動に突き動かされるまま勢いよく立ち上がる。だがそれだけで体が悲鳴を上げ、軽くふらついてしまう

「ギンく」

「ッ！ 触るな！！」

心配気に手を伸ばし、俺を支えようとした少女の父の手を反射的に跳ね除け、そのままリビングから逃げ出す様に出ていく

いや、様ではなく実際に俺は逃げだした

「ギン君！？」

後ろから聞こえてくる姉の声。それを無視して逃げる、逃げる。逃げる

もっとも体がまともに動いてくれない為、機敏な動きとはほど遠いものだったが

おまけに錯乱していたのか、外に向かう訳ではなく何故か道場の方
向に走ってきてしまった

着いてから、気付いた

(なんなんだ……なんなんだよあいつらは!?)

分からない、判らない、解らない

何故ああも親しげに話しかけてくる？

何故俺がどういふものか知っていながら拒絶しない？ 恐怖しない？

何故あんな風に、普通の人に対して話しかけるかのような態度で

（ ツー！ ）

心の中で。声にならぬ声で叫ぶ

あらん限りの力を込めて手を握り 激痛に顔を歪ませる

「 ゲツ ウウウ……ッ！ 」

口から出てくるのは獣の唸り声のような、悲鳴

痛かった。ただ無性に、どうしようもなく、がむしゃらに痛かった。
腕が。足が。頭が。体全体が……心が

立っていられない。いる事が出来ない。そのまま倒れる様に道場へ
と転がり込んでしまう

「 ……！？ き、貴様は……！ 」

そんな声が聞こえてきて、倒れたままの姿勢で顔だけをそちらに向ける

道場の隅、そこに座り込む様に居る人影……高町恭也

「何故ここに　いや、そんな事より大丈夫なのか!？」

五月蠅なつかい。お前まで俺を、俺の事を心配そうな顔で見ってくるな

異常な雰囲気俺から感じ取ったのか、慌てて立ち上がり俺に近づいてくる少女の兄

「あれだけぼろぼろになってたんだ。無茶を　」

「五月蠅なつかいっ!！」

「っ!？」

怒声。叫ぶと同時に胸中に渦巻く“何か”も吐き出したのか、徐々に冷静になっていく頭と心

「…大丈夫だ、心配する必要は、ない…！」

そう平坦な声で言いながら、壁を背に立ち上がる

こちらを見る兄の顔……よく見ると右頬が赤くなって腫れている

思わずそこを凝視してしまう。その視線に気づいた兄は罰が悪そうな顔をして、手でその場所を押さると俯いてしまう

その様子を見て、何故最初から少女の父親がリビングに居なかったのか。その理由に大体の予想が付いた

「なるほどな……殴られて説教されて、少しは目が覚めたか？」

「ッ」

半分はカマ掛けだったのだが見事当たったようだ。顔が驚きと、悔しさと……残りは良く判らない色に染まる

兄は視線を下に向けたまま、俺は真正面に固定してお互い無言

時が止まったかのような静寂。お互い微動だにしない

……そんな時間がどれだけ続いただろうか

「俺は……護りたかった」

唐突に喋り始める兄。正直な話を聞く気は無いし、聞きたくもないが体がまとも動かないこの状況で、俺に選択肢は無い

「親父が倒れて……代わりに家族を守れるように、護るために……努力してきたつもりだった」

ぼつぼつと、小さな声で呟くというよりも、囁くささや様に喋っているが、道場はとても静かなためその声は良く聞こえた

「親父は俺より遙かに、強い。その代わりにする為には、生半可な努力ではとてもじゃないが追いつけそうになかった」

（ああ、知ってるさ。誰よりも遅くまで起きて、誰よりも早く起きてたよな、お前は）

夜中の2時に部屋に戻り、4時に起きる。いや、そもそもこいつはその2時間の間、本当に寝ていたのだろうか？

「必死になって……それこそ死ぬ様な思いで俺は自分を鍛えてた……なのにいざという時、俺は……っ！」

少女のいざという時、兄は助けようとして血を吐いた。今までの努^む力が仇^{ちや}となった

「それだけじゃない。俺は気付かなかった…気付けなかった。なのはの気持ちに…自分の事ばかりに目を向けて」

家族に、なのはの事をよろしくと頼まれていたのに

泣きそうな、そんな声が目の前の人間から零れる

精神的に追い詰められ、肉体的に追い詰め、余裕が無かった。だから気付けなかった。まあそういう事なのだろうか

「……………それが？」

「…なに？」

俺のそんな言葉に弾かれる様に、こちらに顔を向ける。その顔は憤怒に染まり、目は俺を射抜かんばかりに苛烈

「何かを護りたくて力を求め、手に入れ、護り抜いた者達なら見てきたさ。だからその行動は解らないでもない」

そんな人間は腐るほど見てきた、目の当たりにしてきた。その果てに、自滅していった者を見てきた

護りきつた者もいた。その信念を貫き通し、最後の最後まで護りぬいた者達もいた

「だが結局の所、そいつらの大半は最終的に護ることができていなかった。理由は……解るだろ？」

兄の行動と少女の置かれていた状況。それを知ったのなら解る筈だと、無言の内に問いかける

「ああ、護れたのは体で、心は護れてない……そういう事だな？」

「まあそうだな……で、それに気付いているお前はここで何をしている？ いや、そもそもだ」

目の前の人間、高町恭也の目を見る。先程までの苛烈さは無いが、厳しい視線を送ってきている事には変わらない

「お前の事情を俺に話して、何がしたい？ まさかお前の親父みた

く殴って叱って欲しいとでも抜かすつもりか？」

「ッ！」

「その反応は凶星と受け取っていいんだな……？　ハッ。　甘えるなよ子供ガキが」

「！　何だとッ！？」

馬鹿にする様に。いや、実際に馬鹿にしているニュアンスを含ませながら嗤う

「そうだな。確かに殴ってもらえれば、叱ってもらえれば心は軽くなるよな？」

「だ、黙れっ！」

「反省している時、後悔している時。何もされないってのは逆に辛いよなあ？」

「黙れと言って　」

「殴られて、叱られて。次からは気を付けようと思えることは、シ
アワセな事だよなあ？」

「ッー！」

高町恭也の手が霞む。高速　いや、神速の域で振られたその手に
持っているのは木刀

それが風切り音すらたてずに俺に迫り

「殴られなければ殴ればいい、か。そうだな、そうすれば少しはス
ツキリするからな」

その言葉を聞いて、止まる。目と鼻の先に突き付けられた木刀の向
こうから、悔しそうに、苦しそうな顔が見えた

「どうした、殴らないのか？」

その言葉を放ちつつ手を上げ、挑発するかのようにひらひらと振る

「お前の目の前に居るのは、ちょっとやさそつとじゃ死なない化け物。
サンドバックには丁度いいだろう？」

口元を釣り上げ、嘲笑うかのように続ける

「人間じゃないから、下手な罪悪感も湧かないしなあ？」

「くそおつ!!！」

目の前にあった木刀が消え、木張りの床に何かが叩きつけられる様な音が響く

高町恭也が木刀を叩きつけたままの姿勢で、震えていた。その姿は、まるで泣いている子供の様で

「なんだ、止めるのか つまらんな」

その様子を見つつ、先程で続けていた“演技”を止める。あの様子なら、途中から気付いていたのだろうか？

(やれやれ、子供に見破られるとは……まあ、俺も子供なんて人に言える程立派でもないか)

子供が子供に説教を垂れる……説教というよりも言葉攻めだろうか

？ どちらにしても滑稽な事には変わりない

嗤いが出る。ただし今度は演技ではなく本心から。高町恭也にはなく自分に対して

「俺は……どうすればいい」

「……………」

嗤いが止まる。目の前の人間……泣いている子供に視線を向ける

「俺は……俺は、どうすれば……いい？」

絶る様に、弱弱しい声で聞いてくる子供に対して、俺は

「あの少女の事で、お前が俺にかぞへ聞くのか？」

「……………！ だ、だがっ！」

「少女の事はお前の方がよく知っているだろうに……そんな事も忘れたか？」

「…会って……くれるだろうか？」

「だから、俺に聞いてどうする」

言い聞かせるように、強く言い返す。その目を見て言葉を放つ
だが踏ん切りが付かないのか、その場から未だに動けない子供

「……たくつ。あのお人好しがお前の話を聞かない訳無いだろうが
……」

思わずそう呟いてしまう。その声が聞こえたのか、ピクリと体を震
わせ、顔を上げる 兄

「……よく解っているんだな、なのはの事……ああ、そうだ。なん
でそんな事を忘れていたんだ、俺は……」

「解りやすいただけだと思うがね。あいつは特に」

「ああ。……そうだな」

顔を手で覆い、頭を振る。次に手を退けたその顔は、少女の大好きである顔

優しいさと、強い意志を秘めた兄の顔

「行ってくる」

「勝手に」

俺の返事を聞いているのかいないのか、飛び出していった少女の兄を尻目に天井を見上げ、ぼやく

「若いつてのはいいな……誰かの、人では無い者の言葉でも、踏み外してしまつた道へと戻る事ができる」

そんな事をぼやく。少女の兄の事を思い出しながら

「それにしてもなんて茶番だろうな。人外、おまけに道を踏み外したモノが誰かに説教もどきを垂れるなんて」

視線は天井に向けたまま、嗤いながら問いかける

「その辺どう思う？」

高町士郎

「そんな事は無いと思うけどね？ たまには他人ひとからのアドバイスが効果的って事もあるものだと思うよ。」

微妙に論点がずれた返答をしつつ、高町士郎が“天井”から降ってくる

人外じみた行動だ。とてもではないが病み上がりには見えない

「で、天井裏に隠れて盗み聞きと盗み見していた父親としての感想は？」

「そうだね……もう心配ないと思うよ。恭也は不器用なところがあるけど、馬鹿ではないからね。」

「父親からのお墨付きなら問題ないだろうな……まあ、これで借りは返したか？」

最後の方は少女へと向けて。おそらくは今頃兄と話している頃じゃないだろうか……まあ、起きていれば、だが

「……君は、これからどうするつもりなんだい？」

「知らん。まあお前達の前に現れる様な事はないだろうから安心してくれ」

手をぶらぶら振って、心配するなどジェスチャーも入れて伝える

荒れ狂っていた心は落ちつきを取り戻しつつある。体の痛みも、とりあえずは許容範囲内だ

「知らないってことは、特にやる事はないって事なのかい？」

「……まあ、殺^やるべき事は終えた後だからな。後は一人気ままな旅でもするぞ」

やるべき事、のニュアンスの意味に気づいたのか、顔を強張らせる高町士郎を見てニヤリと嗤う

「その演技、似合っていないからやめた方がいいと私は思うよ」

「さすが、人生経験豊富な大人を騙くらかすのは無理か。まあ子供にも見破られるぐらいだしな」

そう言いつつ表情を元に戻す

こちらをじっと見ている視線を感じるが、それと合わせない様に視線は天上に向けたまま黙り込む

そうして黙り込んだ俺を見て、高町士郎は放った言葉は、俺に少なからず衝撃を与えた

「私としては、君にはなのはの傍に居て欲しい。そう思っているんだけどね…なのはも懐いているようだし、君が居なくなってしまうばさぞ悲しむだろうからね」

ああ、勿論私以外の家族も同じ気持ちだと思っよ？ 笑いながらそう続けてくる高町士郎

「理解、できないな。やっぱり」

「ん？ 何がだい？」

「俺みたいなモノを大切な家族の傍に置く。そう言っのけるお前達がだよ」

吐き棄てる様に言葉を紡ぐ

「そう言ってくれた人達は今までにもいた。ただ、お前達みたいに俺がどういふ存在なのか知らずの発言だったが」

「……」

「まあそれでも若かった俺はその言葉が嬉しくてな？ ついついその言葉に甘えてしまう訳だ」

「今はもう、駄目なのかい？」

問いかけてくる高町士郎に対し、俺は疲れたような、諦めたような声を漏らす

「分かるだろ？ 俺みたいな異端は、居るだけで何らかの火種となる。それは争いだったり、厄災だったり。時には良い事があるかもしれないがな」

「私みたいに、だね」

治療の事だろうか。その質問に対してははっきりと返さず笑う。視線を天上から床へと移し、そこに映った俺の姿を見る

「異端だけならまだしも、それが何らかの特殊な力を持つていれば……正直、何が起こるか判ったもんじゃないさ」

「でもギン君。君は力の意味を知っている……そうでなければ、あんな事は言えないよ。それを判っている君が力を持つていたとしても、そのせいで起きてしまってもしょうもない“何か”を事前に防げらんじゃないかい？」

「……どうだか。まあ、殴っていればあんな茶番はせず済んだかもしれないな」

少女の兄を立ち直らすだけなら、あの場で殴れば良かった。何せあいつは馬鹿ではない

今回の反省を生かし、次からはこんな事が無いように自制する……あいつなら難しくはないはずだ

それをしなかったのは、俺が力の意味を知りっているから

(とでも、言いたいのか?)

「だがそれだと、殴ってしまったお前は力の意味を知らない事になるか?」

「ハツハツハ！ 参ったね。これは一本取られたかな？」

「冗談だ。お前は子供には甘いだけだ」

俺がやったのは相手に甘えを許さない言葉攻め

高町士郎がやったのは相手の負担を和らげる優しい暴力

まあそれも人それぞれだ

全ての人が殴られたからといって心が軽くなったりする訳じゃないし、逆もしかり

「冗談も言えるんだね」

「まあ、それなりには。だが、高町士郎」

頭を振りつつ、言う

「例え力の意味を知り、弁えていたとしても……必ず“何か”を防ぐ事など不可能だ」

「でもそれは力を持っている者だけに限った話じゃないさ。皆、その火種の可能性を持っている」

「それはそうだな。だが論点が微妙にずれていないか？」

「おや、そうかい？」

胡散臭^{うさんくさ}いやりとりだ。我ながらそう思う

「……ふう、これだけ言っても決意は変わらないかい？」

「ここまでしつこく粘られるのは予想外だったがな」

本当に予想外だ。何故、この男はここまで粘るのだろう

「やれやれ……あまり、こついつ言い方は好きじゃないのだがね」

高町士郎の雰囲気が変わり、顔が強張る

それは何かを抑えるような、我慢するような表情にも見えた

口が開いていく。喉仏が上下し、紡がれた言葉が

「君は責任を取るべきだ。なのはを魔法に関わらせた事を」

「　　な」

俺の余裕を、一瞬にして吹き飛ばした

「確かに一回きりだったのかもしれない。私の怪我を治療する為にそれしか方法がなかったのかもしれない」

静かに、こちらに近づいてくる高町士郎

その間にも喋る事を止めはしない

「だが、なのはは知ってしまった。自分に魔法の才能がある事に…
…あの子は優しいからね。それでどんな無茶をしてしまうやら」

「……………」

何も言えない

その言葉に対して俺は何も返すことができない

そう、そうだ。ただの一回。とても短い時間だったとはいえ関わった。関わってしまったのだ

それはもう、非日常の入り口を潜ってしまったという事

関わってしまったからには、もう完全に戻ることはできない。もう少女の日常は既に

「 済まない。さっきの言葉、取り消してもいいかな」

「……何？」

何時の間にか、目の前に居た男がそう言うてくる

(何を言っているんだ…?)

俺を少女の傍に置いておきたいというなら、あのまま言葉を重ねていれば良かった

そうすれば俺は言い訳もできなかった。非があるのは間違いなくこちらだったのだから

なのに何故

「やっぱりこういうやり方は向いてないのかもしれないね。君のそんな悲しそうな顔を見ていたら、どうしても我慢できなくなってる……」

「何を……馬鹿な事を……！」

俺が悲しい顔？ そんな理由でやめたというのか？

そんな、人間に対応しているかのような理由でやめたというのか？

再び心が沸き立つ感覚。思考が纏まらなくなる。心が、痛くなる

「ふざけるなよ……貴様は知っているだろうが！俺は人間じゃない。それを、“悲しそうな顔”をしているからやめただと？ そんな……人間みたいに俺を扱うのはやめろっ……！」

制御できない。声を抑えられない。次から次へと湧き出てくる感情は勝手に言葉となって、口から怒声となって漏れていく

「俺は化け物だ！人間でもない、物でもない！本来存在しているはずないモノ（異端）なんだよ……！」

驚いた様な高町士郎の顔が見える。だがそんな事は、今は関係ない。

気にする余裕などない

「だから…頼むからッ！ やめてくれ……俺にそんな気遣いをしないでくれ……！」

「ギン君……君は……」

「そういう風にされると忘れそうになるんだよ……俺がモノだと言
う事を」

顔を俯かせて、搾り出すように言葉を紡いでいく。言いたくはない。
だが、もう止まらない

「そうやって忘れた頃に、人との違いを見せ付けられて……そうい
うのはもう、沢山だ……うんざりなんだよ……！」

もううんざりだ

人に奇異な存在と見られることはもう慣れた。拒絶されることも、
恐怖されることも我慢できなくはない

だが、受け入れられて、受け入れてしまって……ふとした拍子に、
自分と周りの存在の違いを見せ付けられることだけは

それだけは

「
」

言葉にならなかった。口が、舌が、喉が。人間のソレと同じように見せかけて作られたモノが動かなかった

それが堪らなく嫌だ。人間とそっくりで、人間の様な機能を持つのに、作られた物だという事実が

人間と同じような存在でありながら、限りなく違う自分という存在が

「君は、確かに人ではない。君が言う通り、人間に見せかけたモノなのかもしれない」

高町士郎の声が聞こえる。静かな声、でもなぜか強烈な何かを感じる様な、そんな声

それが俺の意識を捕らえる。捕らえて、放そうとしてくれない

「でも、私と君はそんなに違うとは思わないよ……そんな、泣いている君を見てしまったら、尚更」

「俺は、涙は出ない」

「でも、泣くことはできる。涙が出てないからといって、泣いていないとは限らないよ?」

どこまでも優しい言葉。何故、どうしてそこまでお前は、お前達は

「お前は異常だ、狂っている。俺みたいな化け物モにそんな風に接するお前は異常者だ……!」

俯いたまま、抵抗する。喉が勝手に震え、情けない声となって口から出てくる

「……そうだね。そうなのかもしれない。そうだとしても」

やめてくれ。何を言おうとしているのか判らないが、それ以上言われると俺は

「君みたいな泣いてる化け物こを見捨てる一般人であるくらいなら、受け入れる事ができる異常者でありたいよ」

俺は、もう

「馬鹿っ……やろっがあ………！」

我慢、できない

「ハハッ……異常者で馬鹿野郎か。それでもいいさ」

頭に何かが置かれる感触　高町士郎の、手の感触

そこから伝わってくるのは、温もり。俺が焦がれてやまない、人の温もり

もう抵抗する気は起きない。そんなモノ、とっくの昔に尽きていた
今まで俺を支えていたのは、単なる意地

自分を守るために最後の最後まで抵抗していた、恐怖心

「……君が周りと違うのだとしても、君は君さ。銀という名前のね」

「くくっ……ありふれている上、安い慰めの言葉だな……」

「そうだね。だが……いい言葉だろ？」

ああ、そうだな

声で答えず、頭を軽く上下させる動作で答える

その様子に満足したのか、高町士郎が笑う声が聞こえる

その声はとても優しかった

……ああ、この親にして、この子あり、とはよく言ったものだな
……)

お前と同じで、高町士郎も温かいな……なのは

終話 『Merry Christmas』

「判った。俺の負けだ、高町士郎」

道場で俺と向かい合っている。俺の正面に立つ男……少女の父、高町士郎に降参の台詞をぶつける

「そうかい？ いやあ、受け入れてくれて嬉しいよ」

ハツハツハと笑いながら、目の前の狸が抜かす……もとい、男が言う

そんな様子の男に若干辟易としつつも、俺は口を開いた

「俺は少女……高町なのはの傍に居よう」

相手の目をしっかりと見て、俺は告げる

「高町なのはを非日常へと招き入れた責任、その償いならいくらでもしよう」

自分の意思を固める様に、一言一句漏らさず、自身に刻むかのように

「非日常が、魔法が高町なのはを苦しめることがあるのなら……俺がその原因を全て、消す」

今日、この日より俺はモノではなく、少女に貰った名前、銀という名の存在になる

「今日より俺は少女の為、その大切な者達の為に。ここで、この世界で生きていく」

誓いの言葉を、高町士郎に宣言する

「はっ、これで満足か異常者」高町士郎

最後にそんな憎まれ口を叩きつつニヤリと嗤う

そんな俺の様子（茶番）に耐え切れなくなったのか、大声で笑い出す高町士郎

「……………」

その様子を見て、半分閉じている目を更に細め無言で睨む

そんな俺の様子を見て高町士郎は更に笑う。そんな状態が5分程続いた

「ひーっ…はぁーっ……。ひ、久々だよ、ここまで笑ったのは…！
ああでも病み上がりだからか腹筋が痛い…」

「自業自得だ」

ふんっ、とそっぽを向いて俺は冷たく言い放つ

そんな俺に対し高町士郎は息を整え、体勢を正すと　少し、複雑
そうな顔で俺を見てくる

「……………？　なんだ。何か不満だったか？」

何か内容に不備があっただろうか？　先程の言葉は全て、それこそ
一言一句に至るまで刻んでいる

あの言い方はほとんど戯れだったが、意志は本物だ。その辺は理解
してくれていると思う

どこもおかしい所はなかったと思うのだが……そんな風に若干焦っ
ていると

「ああ、いや。違うんだよギン君。特に不備があったとか、そういう事じゃないよ」

「では、なんだ？」

純粹に疑問をぶつけてみるが、高町士郎の反応はいまいち芳しくない

「ううん……いや、今はそれでいいと思うよ、ギン君」

「……そうか。それでは他の高町家の面々に報告をしてくる」

「いや、先になのはに顔を見せてあげてくれ……きっと、心配していると思うから」

「…分かった」

そう言い、踵を反すと道場を出て行くこと

「ああ、ごめんちょっと待ってくれ!」

高町士郎の少し焦った声を聞いて、俺は再び振り返る

「君は今日から家の家族になる訳だからね　これからは、ギンと呼んでもいいかな？」

そう言いつつ、にやりと笑う高町士郎が見える……もしかしなくてもそれは、俺の真似だろうか？

(しかし……家族、か)

家族。その言葉が俺の中に浸透していく。どこかむず痒い感触。落ち着かないのに、何故か悪い気分ではない

「勝手にしてくれ　と、言いたい所だが、それはまず皆に承認されてからにしようか、高町士郎」

そう言いつつ、お返しとばかりにニヤリと嗤い返す。その表情を見て笑みを深くしつつ

「その辺は問題ないと思うけどね。そうなったあかつきには、ぜひお父さんと呼んで貰おうかな？」

高町士郎はそんな言葉を言ってくる。しかしお父さん、ねえ？

「……一応言っておくが、俺の歳は数百くらいはあるからな？」

「なんだって!？」

ショックを受け、驚き半分、絶望半分の顔で固まる高町士郎

そんな表情をさせた事実にも、どことなく嬉しくなり、胸中で「ざま
ーみる」と笑う

何となく、妙な達成感すら感じつつある気分そのままに、口を開い
て口撃する

「なんなら俺の事をお爺ちゃんとも呼んでみるか？ 俺は別に
かまわんぞ」

「は、はは……さすがにそれは……」

顔を引き攣らせ苦笑するその様子に、今度は俺が小さく笑う

そんな俺を見て高町士郎も微笑む。そして何か思い出したかの様な
顔になり

「あ、済まないギン君。一つだけ、君の誓いに付け加えさせてもらっていいかな？」

「なんだ？」

「一体何を付け加えるというのだろうか？ 碌なものじゃない気がするのは気のせいだろうか」

「なのはがもし自分の意思で魔法に関わった場合……できるだけサポートしてあげて欲しい」

「……解っているのか？ それは……」

「ああ、解ってるよ……でもきつとあの子は……」

その先は、言われなくても予想が付く

そうだな、おそらくあいつなら……あの少女なら

「分かったよ高町士郎……。あー、その……か、家族になるかもしれない者の頼みだから……」

高町士郎の願いを承諾する。少しもってしまった……やはりこういう事を言うのは初めてだったからか

そんな俺の言葉を聞いて一瞬呆けた様な表情をした後

「…ああ。ありがとう、ギン」

とても嬉しそうな顔をしてくる高町士郎。何気に呼び捨てになっ
てはいるが、悪い気はせず

その様子を見て居心地が悪くなった俺は、慌てて道場を出ていく

「…っ、高町なのは所へ行ってくる！」

出ていく直前に、そんな言葉を残して

そんな、俺の背に

「ん。は君 願 を れ」

よく聞き取れなかったが、高町士郎の声が掛った気がした

終話

道場から出た俺は、少し早足気味に少女の部屋目指して歩いていく
別に急ぐ理由はない。特には無い。ただ、なんとなくそんな気分な
だけだ

階段へと続く廊下を歩き、階段を4段飛ばしで“跳び”上がり、2階廊下を突っ切り

目的の少女の部屋の前に着いた……のだが

(……無駄に、はしゃいでるな俺は)

気分が高揚しているとしてもいうのが、テンションが上がり、そわそわと落ち着かない気分だ

理由は一つしかないが、正直にそれを認めるのも癪だ。説得しやうとくという名の言葉攻めで随分と苛められたから

(素直じゃない……か)

自分のそんな思考に対して、ふいに脳裏に浮かんできたのは夢の中で言われた台詞

名前も知らない、不思議な少女に言われた言葉

(まったくもって、その通りだな……)

こういうのを的を射た評価と言うのか。そんな事を考えつつも深呼吸吸って、気分を落ち着かせる

なんとなく姿勢を正し、目の前のドアを2回、軽く叩く

「はい？」

「邪魔するぞ」

中から聞こえる少女の声、それに対し短く答えながら入っていく
開かれたドアの向こう、ベッドの上に状態を起こして座る少女が、
こちらを見て驚いた表情をしている

その脇の椅子に座っている少女の兄……こちらも驚いた顔で、俺を
見ていた

「ギン君！？ もう大丈夫なの！？」

慌てて飛び起きようとする少女を手で制し、苦笑しつつも応える

「どこかのお人好しのおかげだな。一命を取り留めたよ」

「え、あ、うん……？」

少女は俺の雰囲気の違いに気づいたのか、どこか困惑している表情になりつつ、最終的に安堵の表情に落ち着く

「よ、よかったの……。間に合ったんだよね？」

「ああ」

言葉の応酬をしながらも、互いに視線を逸らさない……。これもまた、少し前の俺からは考えられない事

少女が再び困惑気味な表情になるが、気持ち的には俺も若干困惑気味だ

「俺は下に降りてるよ……。なのは、また後でな」

不意にそんな声が聞こえる。俺から見て左前方……。高町恭也から

「あ、うん！」

少女の方を見て優しげな表情を浮かべる兄と、それに嬉しそうな表情と声で答える妹

それを見ながらホツとしつつも、苦笑を浮かべる

(仲直りできたんだな……なんというか、予想通り過ぎるが)

無論、目の前の少女のお人好しぶりというのか

やはり“あの親にしてこの子あり”ということなのだろう

そんな事を考える俺の横を高町恭也が通り、部屋を出ていった

「……迷惑かけた」

すれ違いざま、小声でそんな事を言いながら

少し…ほんの少しの間、呆気に取られていたがすぐに意識を少女へと戻す

(……悪くは、ないな)

人に感謝されるのは悪くない気分だ

そんな事を、心の中で呟きながら

少女への説明は滞りなく終わる

とは言ってもそこまで説明する事柄も無かったが

簡単に言ってしまうえば「お前の父親が俺を家族として迎えたいとか
ほざ…もとい、言っているがお前はどっ思う？」で終わる

聞き終わって少女は嫌な顔一つせず、賛成の意を示してくる

「……………まったく。予想はできてたとはいえ、お前も、お前の父も

」

異常者共め。と素直に喜べない俺は心の中で毒吐きながらも笑う。
悪い気分ではない……………悪い気分である筈がない

受け入れてくれる。それで嬉しくない筈は無い……………俺という存在を
知ってもそう言ってくれる事に

同時にどうしようもなく恐い。この状況がもし壊れる時が来るとし
て、果たして俺はその事実能耐えられるだろうか？

嬉しさと恐怖心がぶつかり合う心が苦しい。言葉一つでここまで弱
さが浮き彫りになってしまふ事が、とても……………

「今一度聞くが、本当に解っているのか？ 俺がここに…お前達の傍で生きるという事は、お前が望んでいる日常が」

少女の指が俺の唇に触れた事により、言葉が止まる

じっとこちらを見つめる視線。少女の優しい瞳

その目に引き込まれる様に、吸い込まれる様に目を逸らす事ができず…暫くの間、そのまま見つめ合う事になる

「ギン君はね 確かにわたしの日常を壊したよ」

唐突に発せられた少女の言葉に、俺の体がビクリと跳ねる

その言葉の意味を考え、理解し、心が…体が震える

そんな俺の体を、少女に抱きしめられて俺は更に震える 　ただし、
先程とは違う感情で

優しい抱擁。少女の顔が耳元にあり、少々息がくすぐつたい

そのままの体勢で、少女が続けて言った言葉

「わたしの、ひとりぼっちの日常を壊してくれたよ」

その言葉に、涙が出そうになった

俺の体では涙は出ないけれど、流す事はできないけれど

(でも、泣くことはできる。涙が出てないからといって、泣いていないとは限らないよ?)

高町士郎が言った言葉が蘇る

それがとどめだったのかもしれない

少女の体を、抱きしめ返す

壊れない様に、壊してしまわない様にできるだけ優しく、ゆっくりと

少女もその行動に対し、抱きしてくる力を少しでも強めることで答えてくれる

そのまま、その体勢のまま……俺は泣いた

声も無く、泣いた

少女の温もりを感じながら

少女の優しさに包まれながら

遙か年下である子供の腕の中で、俺は泣いた

不意に、白い何かが視界の端をよぎる

少女を抱きしめ、抱きしめられたまま……視線を動かして窓の外を見る

カーテンが半分程ずらされている、閉じた窓の向こうに見える景色

白と黒のコントラスト

「……雪」

「え？……わあ〜！」

窓の外に降る雪を見てはしゃぎだし、体ごと窓の外へと向く少女

その際抱擁が解けてしまう。その事に一抹の寂しさを感じつつも、少女と同じ様に体を窓の方向へ

ふわふわ、ふわふわと。舞い落ちる様に落ちていく真白

「……ギン君の髪と同じ色なの」

「俺のはあそこまで綺麗じゃないと思うが」

「うっん……。そんなことないよ」

こちらを向きつつ、笑いかけてくる少女

「…そうか。ならそういう事にしておこう」

再び、お互いに視線を窓の外へ移す

そのまま、ただその光景を見続けて

「…あつ！ ギン君ホワイトクリスマスなの！」

少女のその言葉に、あのトラック一騒動から一日しか経ってない事実を今更ながらに知る

その事に多少驚きつつも、俺は言葉を返す

「良かったじゃないか。今日も降ってくれて」

「うん!……あ、そうだ。クリスマスならあの言葉を言わないと!」

嬉しそうに笑う。その笑顔を見て俺も心の中で笑う

笑顔のまま、少女が口を開く

今日を祝う祝福の言葉を言うために

それにつられたのか、少女に合わせて口を開き

「「ギン君! /なのは」「」

『 Merry Christmas!』

異端のデバイスは少女と出会う。それがきつと、彼の始まり

魔法少女リリカルなのは x Silver eyes、始まります

終話 『Merry Christmas』(後書き)

第一章 始まりの物語〜完〜

第二章 変わり始める物語 に続きます

設定メモ 『これまでの主人公』（前書き）

今回は設定の説明紹介となります。

結局主人公ってどんな？と思われた方が見られるといいかもしれませんが。

若干先取りの情報がございます。所謂ネタバレですね。

ただ、そこまでネタバレでもない様な気がします。ストーリー的に重要な事でもありませんし。

それでは、興味を持たれた方はどうぞごゆっくり。

設定メモ 『これまでの主人公』

主人公メモ

【名前】

銀（高町なのは命名）
デバイス名は【Silver-^{シルバー}wraith^{レイス}】としてある。
とある世界でそう呼ばれたことがあり、そのまま取ってきた。

【年齢】

外見は10歳前後だが、やろうと思えば外見はある程度自由に変われる。

実際は数百年単位の年齢。

【容姿】

下記載：友人からの支援絵

> i 3 4 4 6 0 — 4 3 5 4 <

左【始まりの物語まで】

右【始ま

りの物語以降】

肩までかかる真っ白で長めの髪と鈍い銀色の目が目立つ。
後に高町桃子によって散髪。若干すっきりした髪型になる。

容姿は悪くはないはずだが、目付きが半眼だったり無愛想だったり。

そのため総評では怖い、もしくは普通といった印象に行き着くことが多い。

【口調】

基本無愛想風。

ただし思考時の時の口調は砕けた感じだったり、素はこちらのほうなのかも。

自称は俺。

【性格】

基本他人に関わりたがらない。

実際は他人と深く関わるのが怖いため、逃げているだけである。
軽い人間恐怖症？

だが何だかんだ言いつつも結局関わったりしたりなど、まごごことなきツンデレである。

面倒事を嫌うが、自分に害がある事柄に対しては割と積極的に動く。

でも結局何だかんだ愚痴りつつも他人のために動いたり、真正のツンry。

何も考えずのんびりするのが好きだが、考え出すと止まらなくなるのが悩み。

数百年生きていただけあって人生？経験は豊富。

だがその方向が偏っているため、時折一般常識が抜けてたりする。
数百歳という割には子供っぽいところが多々ある。

始まりの物語の彼はネガティブ思考でしたが、さて、これからの彼は……

【備考】

一般的なデバイスとは異なる、異端的存在。

例とするならば、ユニゾンデバイスと表現するのが一番近いのか

もしれない。

なのはの様な年代の子供に苦手意識、というか弱い（特になのはは性格も）

そのためなのに対しては若干口調がマイルドになる、かもしれない。

現在ツンツン。素直になれないお年頃って事なのでしょう（笑）追々デレていきます。今はヘタレ分多め。

後々性格が激変すると思われる。

きつと…きつと士郎さんや桃子さんならやってくれる…！

おおよそな主人公の能力早見表（RPGステータス風）

F ～ EX（0 ～ 8）

F、才能無し E、一般人 D、平凡 C、優秀 B、超人 A、人外 S、論外 EX、理解できない

【力】：A

【魔力】：F

【機動力】：B

速度】：A

【体力（耐久力）】：S 【抵抗（魔抗）】：D 【反応】：A

【技量】：B+

スキル
機能一覧

【半永久機関】

無限にエネルギーを生み出す機能。EN回復（大）と表す事も可能か。

現在停止中。

【レーダー】

色々と高性能な知覚機能。反応速度に補正。

現在異常発生中。

【自己修復】

エネルギーがある限り自身に回復効果。

リジエネとかHP回復（大）と書けば分かりやすい？

現在異常発生の為修復率ダウン。2割程度稼働中。

【変換機能】

魔力をエネルギーに。エネルギーを魔力に変換する為の機能。

だが元々、何らかの原因によりエネルギー 魔力への変換が不可能な状態。

3割程度稼働中。

【バリアジャケット】

エネルギー消費で展開可能。

装着時には耐久、魔抗が上がる。

耐久に関して殆ど意味ない気もする。耐久S EX 魔抗D C

【粒子】

体を循環しているエネルギーが可視化した物。

視界を遮ったりする事もできる。

【力場展開】

エネルギー消費で展開可能。

足元に展開して自身を固定、空中に展開して掴んだり蹴り跳んだり等。

空中を滑る様に滑空する事も。ただ、エネルギー消費量の問題で滅多に使わない。

【満身創痍】

オデノカラダバボドボドダ（俺の体はぼろぼろだ）
ほぼ全ステータスが1〜2ランクダウン。

以下、不明

【魔道師（総合）ランク】：魔法が基本使えないためなんとも

【魔力保有量】：F 【最大魔力出力値】：A 【平均魔力出力値】：F

【レアスキル】：？ 【魔力操作技能】：EX 【近接格闘技能】：SS

【対集団戦闘評価】：AAA 【対個人戦闘評価】：A

【近距離戦闘評価】：S 【中距離戦闘評価】：C 【遠距離戦闘評価】：E

全体考察

彼自身のリンカ コアは訳あってほとんど機能しておりません。故に保有量、平均出力ともに0。最大保有量となるとBくらいでしょうが。

他人から分けて貰う等によって初めて魔力が使えます。ただ、彼の場合魔力ではないエネルギーを使った戦闘が基本となるので、何とも言えません。

魔力が無いので飛行魔法も使えません。飛べないので跳んでます。

その方面に特化したデバイスなのか、制御、演算系統が異常なレベルです。

その演算能力を用いて、第六話では石を蹴って銃を狙い撃つてたりしています。

また、基本近接で戦い続けた彼は経験（数百年物）故か、近接でチートレベルの強さを発揮しますが、遠距離対応への術がほとんど無く、また使い勝手も悪いです。

そのため遠距離魔法戦となると結構防戦一方になる事もあるかも。まあ彼の戦い方がそもそも生き残るための戦い方なので、そうなたたとしてもやたらとしぶとかったりしますが。

魔力光、並びに粒子色は銀色。

以下、おまけ

「ギン君って強いんだね」

「まあ、それなりの環境で生きてたからな……もっとも最近自信失
ってきたが」

「どうして?」

「…口で説明するより見てもらった方が早いな」

「ほえ?」

おまけな高町士郎の能力早見表（RPGステータス風）

F（EX（0）8）

F、才能無し E、一般人 D、平凡 C、優秀 B、超
人 A、人外 S、論外 EX、理解できない

【力】：C

【魔力】：F

【機動力】：A

【速度】：B

【体力（耐久力）】：A

【抵抗（魔抗）】：F

【反応】：B

【技量】：B

スキル一覧

【小太刀二刀御神流】

正式名称は古武術「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術」
培われた経験と技術、本人の才能による剣術は、既に人間の域を
超えている。

戦闘技能に多大な+補正。

【勘】

経験からくる勘と第六感による直感の事。
反応に補正。

【神速】

自らの意思で瞬間的に認識速度を極端に高める技術。
常人を越える速さでの状況判断、攻撃、移動を可能とする。
なんかもつ色々と補正。

【心眼】

視覚に頼らず全体を知覚する。銀で言うならレーダー。
全方位からの攻撃等に対応できる技術。

【病み上がり】

さすがに寝たきりだったためか、身体能力が落ちているらしい。
ステータスがそれなりにダウン。

以下、色々

「あ、お父さんなの！」

「まあ、こつという訳だ」

「？ でも全体的なステータス、ギン君の方が上だよな？」

「よく考えるよなのは。 士郎は人間だぞ？」

「……あ」

「人間の身でありながら人外レベルのステータスがある時点でもう色々とな」

「あ、あははは……」

「正直な話、人間相手にあそこまで手こずる事が既に異常事態だ。それこそ人外としての機能を活用すれば圧倒も可能……？ かもしれないと、という訳だ」

「さ、さすがお父さん！」

「そついうレベルじゃないと思うんだ」

設定メモ 『これまでの主人公』（後書き）

えー、当初は設定載せる気なかったのですが、小説を初投稿時に友人から支援絵（色なし）を頂きました。

このまま埃を被らせるのもあれなので許可を求めた所、「自信ないから検索できない設定ならいいよ」との事でした。

それだけではなく、今回の為にイメチェン後の主人公まで描いてくれるのかもうね……テンション上がりまくりな訳でして、投稿しちやった訳でございます。何気に色が付いてたし。

「素人の下手絵& a m p ; 携帯写メで申し訳ない」などと言ってますが……絵が描けない私としてはこれだけ描ければ十分すぎると思うのですが……皆さんはどう思われますか？何か意見下さるとおそらく喜ぶと思います。友人が。

それではまた次回も、よろしく願いします！

第一話 『始まる日常』（前書き）

という訳で第二部の始まり、所謂OP部分となります。

いきなり全てが変わる訳でもありませんが、確かに変わった部分もある主人公。果たしてこれからどこまで変わっていけるのでしょうか。

第二部はほのぼのの中心予定でお送りいたします……こゝ、今度こそほのぼのタグ詐欺にならないようにしたい……！

それでは始まります。

第一話 『始まる日常』

本当によかったのか？

何がだい？

俺を受け入れて、後悔しないのか？

しないよ。それより今ここで君を見捨てた方が、きっと後悔するさ

……別に傍に居るだけなら家族にしくても良かった筈だ。俺は一人でも我慢できるぞ

でも、平気な訳じゃない。そうだろう？

……ふん。なら、精々後悔する日が来ない事を祈るんだな

ははは。その憎まれ口にも大分慣れたよ

チツ、異常者めが

はっはっは。君のそれは褒め言葉にしか聞こえないよ

そういえばギン君の髪、とても綺麗ね

……そうなのか？

ええ、真っ白でとても綺麗よ。まるで雪みたいだわ

少女も、同じ事言ってたな……

ふふっ、親子だもの。それよりもギン君？　なのはって呼ばない
いとまたあの子拗ねちゃうわよ？

……面倒な。まだ慣れてないんだ、色々と

早く慣れないとね？　これからは家族として、一緒に暮らしていくんだから

……善処は、する

素直でよろしい。ところでギン君は髪を伸ばしてるの？

そついう訳ではないが……。今思うと結構邪魔だな。短くしてみるか……？

そついう事なら、お母さんに任せなさい！　恭也や美由希も小さい頃は私がしてたのよねえ、懐かしいわ

は？　待て高ま……桃子！　そんな事しなくても髪の長さ位自分で調整でき

そついえばなのはも結構伸びてきてるわねえ。どうせなら纏めて散髪しようかしら？

おい離せ！　そして俺と話せ！　無視するな！

おかーさん、呼んだあ？

呼んでない！

あらなのは、丁度いい所に。これから散髪する？ ギン君も一緒に

え、ほんと！？ するー

お前ら人の話を聞け！ 聞いてくれっ！ 聞いてください！……待て、なんで風呂場に向かつて……ま、まさか！？ やめる！ やめて

ふっ！ はっ！ せえっ！！

随分と熱心な事で。とてもじゃないが、先日血を吐いた人間の様には見えんな

ギンか。心配は無用だ。二日程寝たら随分とよくなった

…… 士郎といい、お前といい。つくづく人外家族だな

人より丈夫で、回復が早い事は否定しないさ……。それよりギン、何故俺だけ名前を呼ばない？

何だ？ 呼んで欲しいのか？

別に、そういう訳ではないが……

くくくっ

お前！ ワザとか！？

お前がそう思うなら、そうなのかもしれないなあ？

喧嘩売っているらしいな。買っぞ？

そういう台詞は、せめて俺から一本取ってから言っただな

五月蠅い！ 今日こそ取ってみせる！

元気だけは一人前か。いいぞ、丁度むしゃくしゃしてた所だ…付き合ってたやる

後悔するなよ！………ところでギン。髪、切ったのか？

ははっ、死ねやあッ！！

なあっ！いきなり怒りだしてどうし うおあ！？

仲いいなああの二人。……よし、私ももう少し汗流していいとっ
と！

あ、ギン君ギン君！ ちょっと稽古に付き合ってよ

…何で俺なんだ？

えー？ だって恭ちゃん居ないし、お父さんは病み上がりだし

大丈夫だろ、人外じみてるし

あははは……ひ、否定はできないけど。……ほら、お母さんと
ゆっくりさせてあげたいじゃん？

……優しい事で。分かった、付き合いおう

ふふふ。お互い様だと思っけどな？

……美由希。お前、最初俺と話した時あれだけビクビクしてたのにな

あー……あ、あれはねえ？ その、なんというか……

怖かったと

し、仕方ないじゃん！ 初めて会った時のギン君、いきなり出
てきて不気味だったし！ すっごい怖い顔してたし！

初めて……。ああ、恭也がなのはを叩いた時の事か。俺はてつきり
トラック止めた事に関する事で怖がってるのかと思っってたんだがな

恭ちゃんの居ない所では普通に呼んでるんだね……。トラックの事は確かにびっくりしたし、怖かったけど……。でもさ？

でも？

あれってなのはの事、助ける為に必死になってくれてたんでしょ？　なのはああああ！　なんて大声で叫んでまで

……。さて、どうだったか

あれ？　もしかしてギン君照れてる？　照れてるよね？

……。帰るぞ？

ごめんなさい！もうからかわないから、だから帰ろうとしないで！

……。今は、怖くないのか？　恐ろしく、ないのか？

え？　そだよ。だって話してみると結構いい人っぽかったし

……異常者共め

ええ！？ 折角褒めてるのになんで！？……あ、もしかして
照れ隠

さて、帰るか

あああ！？ ごめん、今のなし！ だから待ってってばー！！

……

ギン君？

……なのはか。どうかしたか？

ギン君こそ……何してるの？

別に何も。強いて言えば……木を見てた

木？　そういえば大きな木なの

……そうだな

ギン君、木が好きなんだ？

好きというか……憧れるんだ

憧れる？

こいつらからは命を感じる事ができる。強い生命の息吹を。春には花を咲かせ、夏には青々とした緑を。秋には紅葉を散らせ、冬には葉が無くなりながらもしぶとく生きる

うん。四季によって見た目が変わるから楽しいの

……まあ、木だけに限らず自然はそうだ。強く、華やかに。しぶとく、時には醜くも……生きる事を諦めない。どこまでも純粹に生きて逝く……羨ましいよ、そう出来る事が

ギン君も、生きてるよ？

そうだな……。まあ、そうなんだがな

？

……気になるな。単なる感傷だからな

う、うん。あ、そうだギン君

何だ？

ギン君、これから私達と家族になるんだよね？

……まあ、そうらしいな。正確には養子という形になるそうだが

そうなの？ とにかく家族になるなら……その、ね？

どうした……何か言いにくい事か？

ううん、そうじゃないの……ただ、どう呼べないのかわかって

どう呼べば……とは？　今まで通りでいいんじゃないか？

え？　でも家族なのに君付けておかしくないの？

人それぞれだろう。君付けが嫌なら呼び捨てにでもするか？

う、うん。じゃあ…ギン　君

……

うううう……やっぱり呼び捨ては無理なの……

まあ、呼びやすいので良いと思っただ。どうしても気になるのなら、
何時か呼び捨てで呼べるように練習していけばいいわ

う、う。うん。じゃあ今はギン君って呼ぶの

そうか。さて、そろそろ室内に戻ろうか……。俺は平気だが、お前が湯冷めする

にゃ？……そ、そういえば寒気がするの……！

……遅かったか。もう一回風呂入ってくればどうだ？

うー。でも一人で入るのは寂しいし、上手く頭洗えないからあんまり好きじゃないの……あっ！ ギンく

却下

ええー！？ ま、待ってなの！ このままじゃわたし風邪引いちやうかもなの！

そもそも俺は入らなくても、体の汚れ位落とせる

うう〜……、お母さんに言い付けてやるの（ぼそっ

………入ります

やったー！なの

だがお前とは入らん

ひ、ひどいの！ 一緒に入るのー！

ええい！ お前には羞恥心が無いのか！？

しゅうちしん？

年齢にそぐわず大人びてるのに、なんでこういう所だけ子供なんだ
お前は！？

そういえばギン君、さっきからわたしの事お前って呼んでるの！

このタイミングで其処そこに食いつくか！？

なのはって呼んでなのー！ ついでに一緒にお風呂入るの〜
っ！！

前者は努力するが、後者は断る……断るって言うているだろ！？

待て、引っ張るな！　なのは

新暦61年12月29日　A M 03:05

「……………結局、あのまま強引に連れ込まれたんだっただか」

目を覚ますと同時に、布団の中で彼はそんな呟きを漏らす

室内は闇に包まれている。どうやら起きるには早すぎる時間のようだ

ここは高町家の使われていなかった一階の和室であり、現在は銀の部屋となっている

とはいえ今はまだ大した物は置いていない。使われていなかったちやぶ台と座布団に古いタンス、そこに置かれた時計と、姿見に寝るための布団くらいだろうか

時間を確認するため、時計の方向へと視線を向ける。デジタル時計のディスプレイに03:05と表示されていた

(……約2時間か)

高町家の面々に受け入れて貰えた影響なのかどうなのかは判らないが、彼は夢を見る位には眠る事が出来るようになった

だが長年の癖はそうそう完治しないという事なのか。いつも2時間寝ればいい所といったのが現状なのだ

そういう訳で、大体いつもこのくらいの時間に起きるのが彼の常である

とは言ったものの、いつもと言える程彼はまだ此処で生活している訳でもない

熟睡の事に関しても可能ではあるのだが、彼はそれにあまり乗り気にはなれない。何故なら……

(……誰かに添い寝してもらったのは……なあ)

そんな事を思い浮かべ情けなさのあまりからか、銀の口から溜息が漏れる。いや、もしかしたらそのリスクの大きさ故か

以前、なのはが銀の布団に潜り込んで来たことがあり、それにまったく気付けなかった銀。その理由は受け入れて貰った事による心の緩みが原因か、それとも自身の体調不良故かきのつうざん

ともかく、銀が朝起きた時最初に感じたものは一人で熟睡できたの

かという不思議な感動だった。だが右手に感じる違和感でそれらは吹き飛ばす事となる

耳に届くのは安らかな寝息と寝言。ギギギ…と擬音が出そうな動きで顔を向ける方向にはだらしのない顔で眠る少女、なのはの姿

銀は恐怖のあまり思わず絶叫した。未だ人との過剰接触は苦手なのである

前みたく心の中だけでのものであったならまだマシだったのかもしれないが、その時はすっかり声に出してしまい、その後何事かと士郎と恭弥が

その後起きた一騒動を思い出しげんなりとした気分になったのか、見て分かる程どんよりとしたオーラを纏い始める

5分程そのままだった彼は、唐突に頭を振り始める。それでなんとか気分を持ち直したのか、これからどうするかを考え始める様に再び動きを止めた

暫く経った後、再び布団に潜り込み始める

どうやら起きていても仕方ないので寝直す事にした様だ。とは言ってもただ寝転がっているだけではあるが

しかし、こんな時間から活動していればそれは他の面々に迷惑を掛ける事他ならない。故に彼は大人しくしている事を選んだ

余計な心配も掛けてしまう恐れもある。それは彼としてもあまり好ましくないのだろう

(……まだここで生活する事になって数日とも経たないのに、随分と順応したもんだな)

思っていたよりも自分は単純な存在だった様だと。そんな風に考え薄く笑う銀。

(まだまだ割り切れない事や、悩んでしまう事は多い……でも、この暖かい場所なら……もしかしたら俺は)

そこまで銀は考えて、目を閉じた

高町家の朝まで約2時間。それまで部屋でじっとし続ける

長いような短い様な。銀のいつもの夜が始まる

鳥のさえずりが聞こえてくると同時に目を開けた銀は、時計を確認する

ディスプレイに表示されている数字は04:56。この時間なら大丈夫と判断したのか、布団から抜け出すと畳み始める

そのまま畳み終えた布団を隅へと持っていき、カーテンを開けて少しの間外を眺め、ボーっとする

冬真っ只中の空は未だ暗く、室内と室外の温度差により窓ガラスが白くなっている

その事を確認し終わるとタンスへと向かい、服を取り出していく。恭也のおさがりであるそれは銀には少し大きめで、多少ぶかぶかしてしまう

(体が万全ならば、適当に生成でもするのだが…今は少しでも機能修復に回さないとどうにもならん)

割とボロボロである自身の体の事を思い出し溜息を吐いて、思い直す

(いや、そもそも土郎と桃子がそれを許してくれないか……。気を遣ってくれているのだろうか)

人との違いを思い出す度、見せつけられる度に辛くなる。そんな弱音であり、本音を零してしまったあの夜の日の事を思い出しつつも、銀は考える

散髪する時も人にする様に、風呂の事も人と同じ様に。高町家の面

々は銀に対してそう接してくる

日々の生活をできる限り人として過ごせるように。高町家なりの優しく、温かいお節介

だがその度に言い聞かせる様に銀は思う。自分は人と違うのだと言う事を

傍から見ればそれは好意を無下にする行為であり、どこまでも後ろ向きなものでもある

彼はその好意をとて嬉しいと思っている。自分という存在を人間として扱ってくれる事も正直泣きたくなくなるくらいに感謝もしている

もしかしたらただ単に人であろうとなかろうと、高町家の面々には関係ないのかもしれない

そんな風に思ってしまうほど高町家の人達は優しく、それを思い出し銀は心が温かくなるのを感じる

(その好意に甘えたくもなる。縋りたくもある……だが、それはできな)

温かくなった心に言い聞かせる。何度も何度も

(今ここで甘えるのは、縋るのは逃げだ。それでは何時まで経っても前に進めない。今までの俺がそうであったように)

クリスマス
あの日、自分の現状を知った時、銀は意地でも進むと決めた

(違いを知る度、思い出す度辛いし、逃げたくなる…目を背けたくなる)

だがこれは受け入れなければいけない事なのだ。自分がそういう存在である限り、逃げる事などできはしない現実なのだと言い聞かせ続ける

それは前に進むための銀なりの決意。高町家の優しさに触れた事により変わった、変化した心の表れ

だが変わらない物があるのもまた事実。心には深く根付く恐怖がある

(いつか、完全にこれが消える日が来るのだろうか)

着替え終わった銀の目に映るもの。“人の格好”をした自分という現実

その現実を受け入れて、素直に好意を受け取れる日が果たして来るのか……今の彼には判らない

そんな思いを抱きつつも、彼の“新たな日常”は始まっていく

変わるため

その為に彼は歩き始めた

第一話 『始まる日常』（後書き）

今回は冒頭の夢は会話のみの構成。

残りは三人称視点……三人称になってましたよね？

大体一人称で書いているので、久しぶりに変えると自信が無い＆元々自信ないので不安ですね。

次回からはまた、基本的に一人称の主人公視点多めに戻ります。

それではまた次回で会いましょう。読んでくださり、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6370x/>

魔法少女リリカルなのは×Silver eyes

2011年11月9日04時02分発行